

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0

日常的な管理 – CLI 手順ガイド



Part No: E39705-01
2013 年 2 月

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	7
関連ドキュメント	7
ドキュメントのフィードバック	8
製品のダウンロード	8
Oracle ILOM 3.0 ファームウェアのバージョン番号スキーム	9
サポートとアクセシビリティ	9
CLI の概要	11
関連情報	11
Oracle ILOM CLI - DMTF Server Management Command-Line Protocol ユーザーインターフェース	12
Oracle ILOM CLI 接続	12
Oracle ILOM CLI の管理ネームスペース	14
CLI コマンド構文の入力とコマンドの実行	18
代表的な CLI コマンド	20
Oracle ILOM 3.0 のプロパティと Oracle ILOM 2.x のプロパティの比較	24
ILOM へのログイン、バナーメッセージの表示、CLI セッションタイムアウトの設定	27
関連情報	28
ILOM のログインとログアウトおよびパスワードの回復	28
バナーメッセージおよび CLI セッションタイムアウトの設定	32
ネットワーク、Secure Shell、ローカル相互接続の構成	37
関連情報	37
ネットワーク設定の構成 (CLI)	38
Secure Shell の構成 (CLI)	56
ローカル相互接続インターフェースの構成 (CLI)	60
ユーザーアカウントの管理 (CLI)	67
関連情報	67
ユーザーアカウントの構成 (CLI)	68
SSH ユーザー鍵の構成 (CLI)	74

Active Directory の構成 (CLI)	76
Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) の構成 (CLI)	87
LDAP/SSL の構成 (CLI)	89
RADIUS の構成 (CLI)	98
コンポーネントのステータスと保守処理の管理 (CLI)	101
関連情報	101
コンポーネント情報の表示 (CLI)	101
コンポーネントの取り外しの準備 (CLI)	102
コンポーネントのサービスへの復帰 (CLI)	103
コンポーネントの状態の有効化と無効化 (CLI)	103
障害の表示およびクリア (CLI)	104
システムセンサーの監視およびイベントログエントリとクロック設定の管理 (CLI)	107
関連情報	107
システムセンサー、インジケータ、イベントログの監視 (CLI)	108
SP コンソールログ出力の表示と管理 (CLI)	116
ストレージコンポーネントおよび Zone Manager の監視	119
関連情報	119
x86 サーバーでのストレージコンポーネントの監視 (CLI)	119
Sun Blade Zone Manager 機能へのアクセス	123
システムアラートの管理 (CLI)	125
関連情報	125
アラートルール構成の管理 (CLI)	125
CLI コマンド: アラートルール	129
SMTP クライアントの構成 (CLI)	132
電力監視およびハードウェアインタフェースの管理	135
関連情報	135
電力管理機能の更新のサマリー (CLI)	135
システムの消費電力の監視 (CLI)	137
電力ポリシーおよび通知しきい値の構成 (CLI)	144
コンポーネント割り当て配電の監視 (CLI)	147
電力制限プロパティの構成 (CLI)	153
CMM の電源冗長性プロパティの管理 (CLI)	157
ストレージメディアのリダイレクトと Oracle ILOM リモートコンソールの表示のロック	159
関連情報	160

ストレージメディアのリダイレクト (CLI)	160
Oracle ILOM リモートコンソールロックオプションの管理 (CLI)	161
リモートホストの電源状態、BIOS ブートデバイス、およびホストサーバーコン ソールの管理	163
関連情報	164
サーバー SP CLI または CMM CLI からのリモート電源状態コマンドの実行	164
BIOS ホストブートデバイスのオーバーライドの構成 (CLI)	167
SP ホストコンソールの管理	168
SPARC サーバーでの TPM と LDom の状態の管理 (CLI)	173
関連情報	173
SPARC サーバーでの TPM の状態の制御 (CLI)	173
SPARC サーバーでの LDom 構成の管理 (CLI)	175
CLI コマンドリファレンス	181
cd コマンド	181
create コマンド	182
delete コマンド	183
dump コマンド	184
exit コマンド	184
help コマンド	185
load コマンド	186
reset コマンド	187
set コマンド	187
show コマンド	198
start コマンド	210
stop コマンド	211
version コマンド	212
IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断	213
Oracle ILOM の接続に関する問題の診断	213
ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動構成ガイドライン	215
ホスト OS での内部 USB Ethernet デバイスの構成	215
索引	219

このドキュメントの使用方法

このコマンド行インタフェース (CLI) 手順ガイドでは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 をサポートする Oracle の Sun ラック搭載型サーバー、サーバーモジュール、および CMM に共通する Oracle ILOM の日常的な管理機能について説明します。

このガイドは、その他の Oracle ILOM 3.0 のドキュメントコレクションと一緒に使用してください。このガイドは、技術者、システム管理者、Oracle の認定サービスプロバイダ、およびシステムハードウェアの管理の経験を持つユーザーを対象にしています。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- 7 ページの「関連ドキュメント」
- 8 ページの「ドキュメントのフィードバック」
- 8 ページの「製品のダウンロード」
- 9 ページの「Oracle ILOM 3.0 ファームウェアのバージョン番号スキーム」
- 9 ページの「サポートとアクセシビリティ」

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ドキュメントライブラリ	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom30
システム管理、単一システム管理 (SSM) のセキュリティ、および診断のドキュメント	http://www.oracle.com/technetwork/documentation/sys-mgmt-networking-190072.html
Oracle Hardware Management Pack 2.0	http://docs.oracle.com/cd/E19960-01/index.html

注: 使用している Sun サーバーのプラットフォームに固有の Oracle ILOM 3.0 ドキュメントを見つけるには、使用しているサーバーに付属している管理ガイドの Oracle ILOM のセクションを参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントについてのフィードバックをお寄せ下さい。

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

製品のダウンロード

各 Sun サーバーまたは Sun ブレードシャーシシステムの Oracle ILOM 3.0 ファームウェアの更新は、My Oracle Support (MOS) Web サイトからダウンロードできるスタンドアロンソフトウェア更新によって利用できます。このようなソフトウェア更新を MOS Web サイトからダウンロードするには、次の手順を参照してください。

▼ 製品のソフトウェアおよびファームウェアのダウンロード

- 1 <http://support.oracle.com> にアクセスします。
- 2 **My Oracle Support** にサインインします。
- 3 ページの上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
- 4 「パッチ検索」パネルで、「製品またはファミリ (拡張)」を選択します。
- 5 「対象製品」リストボックスで、製品名の全体または一部を入力し、リストボックスに一致する製品のリストが表示されたら該当する製品名を選択します。
- 6 「リリース」リストボックスで次のようにします。
 - a. 「リリース」リストボックスで下矢印をクリックして、一致する製品フォルダのリストを表示します。
1つ以上の製品ソフトウェアリリースのリストが表示されます。
 - b. 目的のソフトウェアリリースの横にあるチェックボックスを選択します。
- 7 「パッチ検索結果」画面で、目的の「パッチ名」を選択します。
- 8 「パッチ名」の選択で、次のいずれかのアクションをクリックします。
 - 「**Readme**」 – 選択したパッチの Readme ファイルを開きます。
 - 「**Add to Plan**」 – 選択したパッチを新規または既存のプランに追加します。
 - 「**ダウンロード**」 – 選択したパッチをダウンロードします

Oracle ILOM 3.0 ファームウェアのバージョン番号スキーム

Oracle ILOM 3.0 では、サーバーまたは CMM で動作しているファームウェアのバージョンを識別しやすいように、バージョン番号スキームを採用しています。この番号スキームでは、5つのフィールドがある文字列を使用しています。たとえば、a.b.c.d.e となり、ここでは次のとおりです。

- a - Oracle ILOM のメジャーバージョンを示します。
- b - Oracle ILOM のマイナーバージョンを示します。
- c - Oracle ILOM の更新バージョンを示します。
- d - Oracle ILOM のマイクロバージョンを示します。マイクロバージョンは、プラットフォームまたはプラットフォームのグループ単位で管理されます。詳細は、使用しているプラットフォームのプロダクトノートを参照してください。
- e - Oracle ILOM のナノバージョンを示します。ナノバージョンは、マイクロバージョンの増分反復です。

たとえば、Oracle ILOM 3.1.2.1.a の意味は次のとおりです。

- Oracle ILOM 3 はメジャーバージョン
- Oracle ILOM 3.1 はマイナーバージョンです
- Oracle ILOM 3.1.2 は 2 番目の更新バージョン
- Oracle ILOM 3.1.2.1 はマイクロバージョン
- Oracle ILOM 3.1.2.1.a は 3.1.2.1 のナノバージョン

サポートとアクセシビリティ

説明	リンク
My Oracle Support を通じた電子的なサポートへのアクセス	http://support.oracle.com
	聴覚障害の方へ: http://www.oracle.com/accessibility/support.html
アクセシビリティに対する Oracle のコミットメントについて	http://www.oracle.com/us/corporate/accessibility/index.html

CLI の概要

説明	リンク
Oracle ILOM CLI の業界標準 ユーザーインタフェースモデル について学習します。	■ 12 ページの「Oracle ILOM CLI - DMTF Server Management Command-Line Protocol ユーザーインタフェース」
Oracle ILOM CLI の接続要件、イン ストールされるファーム ウェア、CLI プロンプトについ て学習します。	■ 12 ページの「Oracle ILOM CLI 接続」 ■ 13 ページの「Oracle ILOM CLI で許可されるサーバー SP ま たは CMM のネットワークアドレス」 ■ 14 ページの「Oracle ILOM CLI ファームウェアと CLI プロン プト」
Oracle ILOM CLI の管理ネームス ペースについて理解します。	■ 14 ページの「Oracle ILOM CLI の管理ネームスペース」 ■ 14 ページの「Oracle ILOM CLI のターゲットネームス ペース」 ■ 15 ページの「CLI 管理ターゲットネームスペース」 ■ 16 ページの「DMTF でサポートされる CLP コマンド」 ■ 17 ページの「CLI コマンドのオプション」 ■ 18 ページの「サーバー SP - CLI ターゲットツリー」
CLI コマンドを実行するための 構文要件と例を確認します。	■ 18 ページの「CLI コマンド構文の入力とコマンドの実行」
一般的な CLI コマンドを確認し ます。	■ 20 ページの「代表的な CLI コマンド」
以前の Oracle ILOM 2.0 のプロパ ティと新しい Oracle ILOM 3.0 のプロパティを比較します。	■ 24 ページの「Oracle ILOM 3.0 のプロパティと Oracle ILOM 2.x のプロパティの比較」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、Oracle ILOM の概要
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、Web インタフェースの概要
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、SNMP の概要
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、IPMI の概要
- 『Oracle ILOM 3.0 保守と診断』、保守および診断の概要

- 『Oracle ILOM 3.0 機能更新およびリリースノート』、新機能または更新された機能

Oracle ILOM CLI - DMTF Server Management Command-Line Protocol ユーザーインタフェース

Oracle ILOM CLI は、Distributed Management Task Force の仕様である Server Management Command-Line Protocol Specification, version 11.0a.8 Draft (DMTF CLP) に基づいています。この仕様全体は、次のサイトで参照できます。

<http://www.dmtf.org/>

DMTF CLP には、サーバーの状態、アクセス方法、またはインストールされているオペレーティングシステムにかかわらず、1 つ以上のサーバーを対象にした管理用ユーザーインタフェースがあります。

DMTF CLP アーキテクチャーでは、階層的なネームスペースをモデル化しており、システム管理下にあるすべてのオブジェクトを含むツリーがあらかじめ定義されています。このモデルでは、少数のコマンドを使用してターゲットの大きなネームスペースを操作し、ターゲットは、オプションやプロパティで変更できます。このネームスペースでは、各コマンド動詞のターゲットが定義されています。

Oracle ILOM CLI ネームスペースでのオブジェクトの管理の詳細については、[14 ページの「Oracle ILOM CLI の管理ネームスペース」](#)を参照してください。

Oracle ILOM CLI 接続

コマンド行インタフェースを使用し、ネットワーク接続を通じて、あるいはシャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module、CMM) またはサーバーサービスプロセッサ (Service Processor、SP) 上のシリアルポートへの直接端末接続を通じて、CMM またはサーバー SP 上の Oracle ILOM にアクセスできます。また、一部の Oracle Sun サーバーでは、Oracle ILOM のローカル相互接続インタフェース機能を使用して、サーバーへの物理ネットワークまたはローカル接続を使用することなく、ホストオペレーティングシステムからサーバーを直接管理できます。

注 - Oracle ILOM でローカル相互接続インタフェース機能を使用する方法の詳細は、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』を参照してください。サーバーにローカルシリアルデバイスを接続する方法、あるいはサーバーまたは CMM の NET MGT ポートにネットワークケーブルを接続する方法については、使用しているサーバーまたは CMM に付属のインストールガイドを参照してください。

このセクションで説明するトピックは次のとおりです。

- 13 ページの「Oracle ILOM CLI で許可されるサーバー SP または CMM のネットワークアドレス」
- 13 ページの「IPv6 アドレスの入力例」
- 14 ページの「Oracle ILOM CLI ファームウェアと CLI プロンプト」

Oracle ILOM CLI で許可されるサーバー SP または CMM のネットワークアドレス

Oracle ILOM 3.0.12 以降では、次のネットワークアドレスが Oracle ILOM サーバープロセッサ (Service Processor、SP) の CLI で許可されます。

- IPv4 アドレス (10.8.183.106 など)
- IPv6 アドレス (fec0:a:8:b7:214:4fff:5eca:5f7e/64 など)
- リンクローカル IPv6 アドレス (e80::214:4fff:feca:5f7e/64 など)
- DNS ホストドメインアドレス (company.com など)

IPv6 アドレスの入力例

SSH 接続を使用して Oracle ILOM にログインするために IPv6 アドレスを指定するときは、IPv6 アドレスを角かっこで囲まないようにします。Web ブラウザの使用時に URL 内で IPv6 アドレスを使用するときや、ファイルを転送するときは、IPv6 アドレスを角かっこで囲む必要があります。

例:

- Web ブラウザで URL を入力するときは、次のように入力します。

https://[ipv6address]

- SSH とデフォルトの Oracle ILOM root ユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM CLI セッションを確立するときは、次のように入力します。

ssh root@ipv6address

SSH 接続を使用して Oracle ILOM にログインするために IPv6 アドレスを指定するときは、IPv6 アドレスを角かっこで囲まないようにします。

- CLI の **load -source tftp** コマンドと **tftp** を使用してファイルを転送するときは、次のように入力します。

load -source tftp://[ipv6address]filename.extension

IPv6 アドレスの入力の詳細については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』を参照してください。IPv4 と IPv6 の接続に関する問題の診断のヘルプについては、213 ページの「IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断」を参照してください。

Oracle ILOM CLI ファームウェアと CLI プロンプト

サーバー SP または CMM で CLI セッションへの接続を確立すると、システムにインストールされている Oracle ILOM ファームウェアのバージョンが識別され、著作権情報と CLI プロンプトが表示されます。

例:

```
Oracle(R) Integrated Lights Out Manager
```

```
Version 3.0.0.0 r54408
```

```
Copyright (c) 2010, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
```

```
->
```

注 - Oracle ILOM 3.0.10 から、CMM の CLI プロンプトを変更して、CMM の CLI プロンプトとサーバーモジュール (ブレード) の CLI プロンプトを区別できます。新しい CLI プロンプトプロパティおよび CLI プロンプトを CMM またはブレード固有にする方法の詳細は、『Oracle ILOM CMM 管理ガイド』を参照してください。

Oracle ILOM CLI の管理ネームスペース

Oracle ILOM CLI 管理ネームスペースには、システム内のすべての管理対象オブジェクトを含む階層的な定義済みツリーが含まれます。Oracle ILOM CLI 内では、少数のコマンドが、オプションおよびプロパティによって修正されたターゲットの大規模なネームスペースに対して機能します。

このセクションで説明するトピックは次のとおりです。

- 14 ページの「[Oracle ILOM CLI のターゲットネームスペース](#)」
- 15 ページの「[CLI 管理ターゲットネームスペース](#)」
- 16 ページの「[DMTF でサポートされる CLP コマンド](#)」
- 17 ページの「[CLI コマンドのオプション](#)」
- 18 ページの「[サーバー SP - CLI ターゲットツリー](#)」

Oracle ILOM CLI のターゲットネームスペース

次の表では、Sun サーバープラットフォームまたは Sun ブレードシャーシプラットフォームに対して Oracle ILOM によって提供される、CLI 管理ターゲットネームスペースについて説明します。

表1 Oracle ILOM 管理ターゲットネームスペース

ターゲット	説明
* /SP	このターゲットの種類の下にあるターゲットおよびプロパティは、Oracle ILOM サービスプロセッサ (Service Processor, SP) の構成や、ログおよびコンソールの表示に、Sun サーバーで使用されます。
* /CMM	ブレードシャーシプラットフォームでは、このターゲットの種類が /SP の代わりになり、Oracle ILOM シャーシ監視モジュール (CMM) の構成に使用されます。
* /SYS	このターゲットの種類の下にあるターゲットおよびプロパティは、インベントリのステータスや環境センサーを監視するため、およびサービスコンポーネントを管理するために、Sun サーバーで使用されます。このターゲットの種類に属するターゲットは、ハードウェアコンポーネントの名前に直接対応しており、その一部は物理的なハードウェアに印字されています。
* /CH	ブレードシャーシプラットフォームでは、このターゲットの種類が /SYS の代わりになり、シャーシレベルのインベントリステータス、環境ステータス、およびハードウェアの管理を提供します。ターゲットの種類は、すべてのハードウェアコンポーネントの命名法に直接対応しており、その一部は物理的なハードウェアに印字されています。
* /HOST	このターゲットの種類の下にあるターゲットおよびプロパティは、ホストオペレーティングシステムを監視および管理するために、Sun サーバーで使用されます。

CLI 管理ターゲットネームスペース

Oracle ILOM では、次のように、サーバー管理とシャーシ管理に異なる CLI ネームスペースが提供されています。

- サーバー **SP CLI** 管理 – サーバー SP CLI からは、/SP ネームスペースにアクセスして、サーバー SP を管理および構成できます。また、SP ネームスペースからは、/SYS および /HOST ネームスペースにアクセスすることもできます。
- シャーシ **CLI** 管理 – CMM CLI からは、/CMM ネームスペースと /CH/BLn、/CH/BLn/Node n、/CH/NEM などのシャーシコンポーネントネームスペースにアクセスできます。/CMM ネームスペースでは、CMM の管理および構成を行うことができます。/CH ネームスペースでは、単一の SP サーバーモジュール (ブレード)、複数の SP サーバーモジュール、NEM などの管理対象シャーシコンポーネントのプロパティにアクセスし、それらを構成できます。

次の表では、Oracle ILOM でナビゲートできる CLI サーバーおよび CMM 管理ターゲットを示します。

表2 CMMおよびサーバー SP の CLI 管理ターゲット

管理対象デバイス	CLI 管理ターゲットについての説明
サーバー	■ <code>/SP</code> を使用して、サーバーモジュール SP を構成し、ログおよびコンソールを表示します。 ■ <code>/SYS</code> は、ブレードレベルでのインベントリのステータスや環境センサーの監視、およびハードウェアコンポーネントの管理に使用されます。
CMM、シャーシ サーバーモ ジュール(ブ レード)、SP、または NEM	■ <code>/CMM</code> を使用して、CMM 上の Oracle ILOM を管理します。 ■ <code>/CH</code> を使用して、シャーシレベルのインベントリ、環境、およびハードウェアの管理を提供します。<code>/CH</code> アドレス空間は、Sun Blade モジュラーシステムで <code>/SYS</code> の代わりになります。 ■ <code>/CH/BLn</code> を使用して、CMM CLI セッションからサーバーモジュール SP のプロパティおよびオプションにアクセスし、それらを構成します。 ■ <code>/CH/BLn/Noden</code>。ここでは、<code>Noden</code> は、複数の SP をサポートするサーバーモジュール上の特定の SP のプロパティおよびオプションにアクセスし、それらを構成するために使用されます。 ■ <code>/CH/NEMn/</code> は、CMM CLI セッションから NEM ターゲットおよびプロパティにアクセスするために使用されます。
サーバーのホスト OS	■ <code>/HOST</code> を使用して、ホストサーバーのオペレーティングシステムの対話を監視および管理します。

DMTFでサポートされるCLPコマンド

Oracle ILOM CLI は、次の DMTF システム管理 CLP コマンドをサポートします。

注-CLI コマンドの大文字と小文字は区別されます。

表3 CLI コマンド

コマンド	説明
<code>cd</code>	オブジェクトのネームスペースを操作します。
<code>create</code>	ネームスペースにオブジェクトを作成します。
<code>delete</code>	ネームスペースからオブジェクトを削除します。
<code>exit</code>	CLI のセッションを終了します。
<code>help</code>	コマンドとターゲットに関するヘルプ情報を表示します。

表3 CLI コマンド (続き)

コマンド	説明
load	指定されたソースから指定されたターゲットにファイルを転送します。
dump	ターゲットから URI で指定したリモート位置にファイルを転送します。
reset	ターゲットの状態をリセットします。
set	ターゲットのプロパティを指定した値に設定します。
show	ターゲットとプロパティについての情報を表示します。
start	ターゲットを起動します。
stop	ターゲットを停止します。
version	実行中のサービスプロセッサのバージョンを表示します。

CLI コマンドのオプション

次の表は、一部の CLI コマンドでサポートされる CLI オプションについて説明しています。

注-CLI コマンドでサポートされる CLI オプションを確認するには、help コマンドを使用してください。

表4 CLI オプション

長文形式オプション	省略形式	説明
-default		コマンドのデフォルト機能のみを実行します。
-destination		データの宛先を指定します。
-display	-d	ユーザーが表示したいデータを表示します。
-force	-f	アクションをただちに実行するように指定します。
-help	-h	ヘルプ情報を表示します。
-level	-l	現在のターゲットと、特定レベルのすべてのターゲットのコマンドを実行します。
-output	-o	コマンド出力の内容と形式を指定します。Oracle ILOM では、表形式でターゲットおよびプロパティを表示する <code>-o table</code> のみをサポートしています。
-script		コマンドに関連する通常の警告またはプロンプトをスキップします。

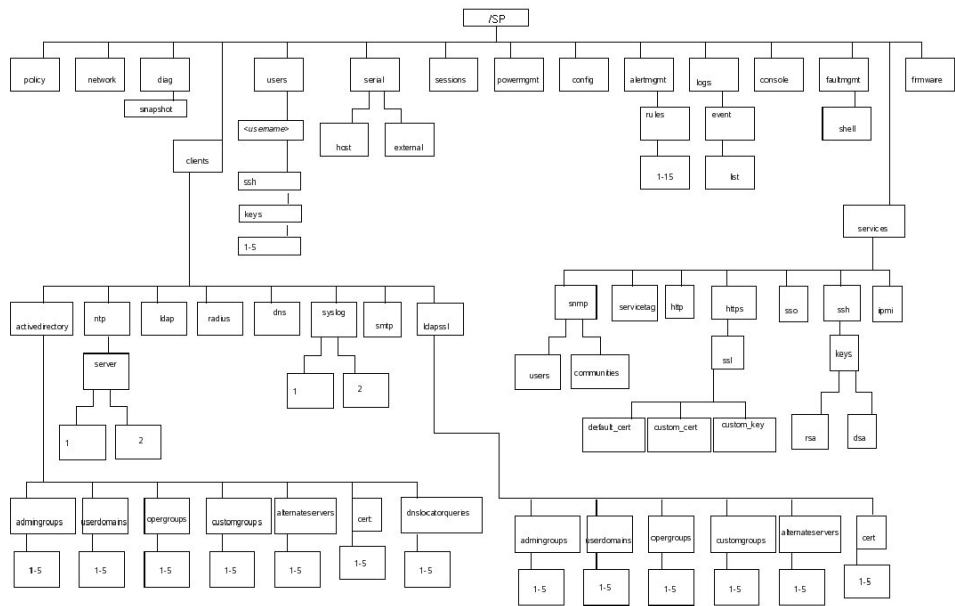
表 4 CLI オプション (続き)

長文形式オプション	省略形式	説明
-source		ソースイメージの場所を表示します。

サーバー SP-CLI ターゲットツリー

CLI ネームスペース内のすべてのオブジェクトはターゲットと見なされます。

図 1 Oracle ILOM CLI ターゲットツリーの /SP の例



CLI コマンド構文の入力とコマンドの実行

Oracle ILOM でターゲットの場所を指定し、CLI コマンドを適切に実行するには、コマンドの入力時と実行時に、必要なコマンド行構文を適用する必要があります。詳細については、次のトピックを参照してください。

- [19 ページの「CLI コマンド構文の入力」](#)
- [19 ページの「コマンドの実行」](#)

CLI コマンド構文の入力

Oracle ILOM CLI を使用するときのコマンド構文は、次のとおりです。[*command name*] [*option*] [*target*] [*property*] [*value*]

例:

```
-> set /SP/services/https port=portnumber servicestate=enabled|disabled
```

注- この章の構文例では、/SP/ で始まるターゲットを使用しますが、使用しているサーバープラットフォームによっては、/CMM/ で始まるターゲットに置き換わる場合があります。サブターゲットは、すべてのサーバープラットフォームで共通です。

コマンドの実行

ほとんどのコマンドでは、実行するにはターゲットの場所を指定してからコマンドを入力します。これらのアクションは、個別に実行することも、同じコマンド行で組み合わせることもできます。

- [19 ページの「コマンドを個別に実行する」](#)
- [19 ページの「コマンドを組み合わせる」](#)

▼ コマンドを個別に実行する

- 1 **cd** コマンドを使用して、ネームスペースに移動します。

例:

```
cd /SP/services/http
```

- 2 コマンド、ターゲット、および値を入力します。

例:

```
-> set port=80
```

または

```
-> set prop1=x
```

```
-> set prop2=y
```

▼ コマンドを組み合わせる

- **<command><target>=value** という構文を使用して、単一のコマンド行でコマンドを入力します。

例:

```
-> set /SP/services/http port=80  
または  
-> set /SP/services/http prop1=x prop2=y
```

代表的な CLI コマンド

注 - Oracle ILOM CLI コマンドの詳細については、[181 ページ](#)の「CLI コマンドリファレンス」を参照してください。

表5 一般的なコマンド

説明	コマンド
コマンドとターゲットについての情報を表示します。	help
特定のコマンドについての情報を表示します。	help <string>
すべての有効なターゲットを表示します。	help targets
現在のターゲットを変更して表示します。	cd
ターゲットから URI で指定したリモート位置にファイルを転送します。	dump
CLI からログアウトします。	exit
システムで実行中の Oracle ILOM のファームウェアバージョンを表示します。	version
ターゲットをリセットします。	reset
クロック情報を表示します。	show /SP/clock
アクティブな Oracle ILOM セッションを表示します。	show /SP/sessions
Oracle ILOM と BIOS ファームウェアを更新します。	load -source tftp://newSPimage
Oracle ILOM のイベントログのリストを表示します。	show /SP/logs/event/list

表6 ユーザーコマンド

説明	コマンド
ローカルユーザーを追加します。	create /SP/users/user1 password=password role=[a u c r o s]
ローカルユーザーを削除します。	delete /SP/users/user1
ローカルユーザーの役割を変更します。	set /SP/users/user1 role=operator

表6 ユーザーコマンド (続き)

説明	コマンド
すべてのローカルユーザーの情報を表示します。	show -display [targets properties all] -level all /SP/users
LDAP 設定の情報を表示します。	show /SP/clients/ldap
LDAP 設定を変更します。	set /SP/clients/ldap binddn=proxyuser bindpw=proxyuserpassword defaultrole=[a u c r o s] address=ipaddress

表7 ネットワークとシリアルポート設定のコマンド

説明	コマンド
ネットワーク構成情報を表示します。	show /SP/network
Oracle ILOM のネットワークプロパティを変更します。IP アドレスなどの特定のネットワークプロパティを変更すると、アクティブセッションが切断されます。	set /SP/network pendingipaddress=ipaddress pendingipdiscovery=[dhcp static] pendingipgateway=ipgateway pendingipnetmask=ipnetmask commitpending=true
外部シリアルポートの情報を表示します。	show /SP/serial/external
外部シリアルポート構成を変更します。	set /SP/serial/external pendingspeed=integer commitpending=true
ホストへのシリアル接続の情報を表示します。	show /SP/serial/host
ホストのシリアルポート構成を変更します。	set /SP/serial/host pendingspeed=integer commitpending=true
注-この速度設定は、ホストのオペレーティングシステムのシリアルポート 0、COM1、または /dev/ttyS0 の速度設定と一致している必要があります。	

表8 アラート管理コマンド

説明	コマンド
アラートについての情報を表示します。最大 15 件までのアラートを構成できます。	show /SP/alertmgmt/rules/1...15
IPMI PET アラートを構成します。	set /SP/alertmgmt/rules/1...15 type=ipmipet destination=ipaddress level=[down critical major minor]

表8 アラート管理コマンド (続き)

説明	コマンド
SNMPv3 トラップアラートを構成します。	set /SP/alertmgmt/rules/1...15 type=snmptrap snmp_version=3 community_or_username=username destination=ipaddress level=[down critical major minor]
メールアラートを構成します。	set /SP/alertmgmt/rules/1...15 type=email destination=email_address level=[down critical major minor]

表9 システム管理アクセスコマンド

説明	コマンド
HTTP 設定の情報を表示します。	show /SP/services/http
HTTPS への自動リダイレクションを有効化するなど、HTTP 設定を変更します。	set /SP/services/http port=portnumber secureredirect=[enabled disabled] servicestate=[enabled disabled]
HTTPS アクセスの情報を表示します。	show /SP/services/https
HTTPS 設定を変更します。	set /SP/services/https port=portnumber servicestate=[enabled disabled]
SSH DSA 鍵の設定を表示します。	show /SP/services/ssh/keys/dsa
SSH RSA 鍵の設定を表示します。	show /SP/services/ssh/keys/rsa

表10 クロック設定コマンド

説明	コマンド
プライマリ NTP サーバーと同期化するように Oracle ILOM クロックを設定します。	set /SP/clients/ntp/server/1 address=ntpIPAddress
セカンダリ NTP サーバーと同期化するように Oracle ILOM クロックを設定します。	set /SP/clients/ntp/server/2 address=ntpIPAddress2

表11 SNMP コマンド

説明	コマンド
SNMP 設定の情報を表示します。デフォルトでは、SNMP ポートは 161 で、v3 が有効化されています。	show /SP/services/snmp engineid=snmpengineid port=snmpportnumber sets=[enabled disabled] v1=[enabled disabled] v2c=[enabled disabled] v3=[enabled disabled]
SNMP ユーザーを表示します。	show /SP/services/snmp/users

表 11 SNMP コマンド (続き)

説明	コマンド
SNMP ユーザーを追加します。	create /SP/services/snmp/users/<i>snmpusername</i> authenticationpassword=<i>password</i> authenticationprotocol=[MD5 SHA] permissions=[rw ro] privacypassword=<i>password</i> privacyprotocol=[none DES AES]
SNMP ユーザーを削除します。	delete /SP/services/snmp/users/<i>snmpusername</i>
SNMP MIB を表示します。	show /SP/services/snmp/mibs
SNMP パブリック (読み取り専用) コミュニティーの情報を表示します。	show /SP/services/snmp/communities/public
SNMP プライベート (読み書き) コミュニティーの情報を表示します。	show /SP/services/snmp/communities/private
SNMP パブリックコミュニティを追加します。	create /SP/services/snmp/communities/public/<i>comm1</i> permission=[ro rw]
SNMP プライベートコミュニティを追加します。	create /SP/services/snmp/communities/private/<i>comm2</i> permission=[ro rw]
SNMP コミュニティーを削除します。	delete /SP/services/snmp/communities/<i>comm1</i>

表 12 ホストシステムのコマンド

説明	コマンド
ホストシステムまたはシャーシの電源を起動します。	start /SYS または start /CH
ホストシステムまたはシャーシの電源を停止します (正常な停止)。	stop /SYS または stop /CH
ホストシステムまたはシャーシの電源を停止します (強制的に停止)。	stop [-f force] /SYS または stop [-f force] /CH
ホストシステムまたはシャーシをリセットします。	reset /SYS または reset /CH
ホストコンソールに接続するセッションを開始します。	start /SP/console
ホストコンソールに接続していたセッションを停止します (正常な停止)。	stop /SP/console
ホストコンソールに接続していたセッションを停止します (強制的に停止)。	stop [-f force] /SP/console

表13 コマンドの出力オプションのフィルタリング

説明	フィルタリングされたコマンド
7月17日に開始されたアクティブな Oracle ILOM セッションを表示します。	<code>show /SP/sessions -level all starttime=="*Jul 17"</code>
Admin の役割を持つユーザーを表示します。	<code>show /SP/users -level all role=="a"</code>
User の役割と Console の役割のみを持つユーザーを表示します。	<code>show /SP/users -level all role=="uc"</code>
すべての SNMP トラップアラートを表示します。	<code>show /SP/alertmgmt -level all type=="snmptrap"</code>
すべての無効になっているサービスを表示します。	<code>show /SP/services -level all servicestate==disabled</code>
IP 1.2.3.4 の NTP アドレスサーバーを使用する NTP クライアントを表示します	<code>show /SP/clients/ntp -level all address=="1.2.3.4"</code>
0D01B で始まるシリアル番号を持つすべての FRU を表示します。	<code>show /SYS fru_serial_number=="0D01B*" -level all</code>
INFINEON によって製造されたすべてのメモリーモジュールを表示します。	<code>show /SYS -level all type=="DIMM" fru_manufacturer=="INFINEON"</code>
アラームの状態が「メジャー」のすべての電源装置を表示します。	<code>show /SYS -level all type=="Power Supply" alarm_status==major</code>
DIMM またはハードディスクであるすべてのコンポーネントを表示します。	<code>show /SYS type==("Hard Disk",DIMM) -level all</code>
upper_nonrecov_threshold の値が 2.89 または 60V であるすべての電圧センサーを表示します。	<code>show /SYS type==Voltage upper_nonrecov_threshold==("2.*", "60.*")</code>

Oracle ILOM 3.0 のプロパティーと Oracle ILOM 2.x のプロパティーの比較

注-プロパティーは、構成可能な属性であり、各オブジェクトに固有です。

Oracle ILOM 2.x から Oracle ILOM 3.0 にアップグレードし、2.x スクリプトを更新する場合は、Oracle ILOM 3.0 コマンドを実装するために Oracle ILOM 3.0 が使用する新しい方法を理解する必要があります。次の表では、Oracle ILOM 2.x のプロパティーを、それ以降の ILOM 3.0 のプロパティーと比較します。

表 14 Oracle ILOM 2.x のプロパティと新しい Oracle ILOM 3.0 の実装

Oracle ILOM 2.x のプロパティ	Oracle ILOM 3.0 の実装
/SP/clients/syslog/destination_ip1	/SP/clients/syslog/1/address
/SP/clients/syslog/destination_ip2	/SP/clients/syslog/2/address
/SP/clients/activedirectory/ getcertfile (証明書のロード)	/SP/clients/activedirectory/cert をターゲットとして load コマンドを使用します
/SP/clients/activedirectory/getcertfile (証明書の削除)	set コマンドを /SP/client/activedirectory/cert clear_action=true とともに使用します
/SP/clients/activedirectory/ getcertfile (証明書の復元)	この機能はなくなりました
/SP/clients/activedirectory/ certfilestatus	/SP/clients/activedirectory/cert/ certstatus
/SP/clients/activedirectory/ ipaddress	/SP/clients/activedirectory/ address
/SP/clients/activedirectory/alternativeservers/getcertfile (証明書のロード)	/SP/clients/activedirectory/ alternativeservers/cert をターゲットとして load コマンドを使用します
/SP/clients/activedirectory/ alternativeservers/getcertfile (証明書の削除)	set コマンドを /SP/client/activedirectory/alternativeservers/cert clear_action=true とともに使用します
/SP/clients/activedirectory/ getcertfile/alternativeservers/ (証明書の復元)	この機能はなくなりました
/SP/clients/activedirectory/ alternativeservers/certfilestatus	/SP/clients/activedirectory/ alternativeservers/cert/certstatus
/SP/clients/activedirectory/ alternativeservers/ipaddress	/SP/clients/activedirectory/ alternativeservers/address
/SP/clients/radius/ipaddress	/SP/clients/radius/address
/SP/clients/ldap/ipaddress	/SP/clients/ldap/address
/SP/cli/commands	help コマンドをターゲット名とともに使用します
/SP/diag/state	/HOST/diag/state
/SP/diag/generate_host_nmi	/HOST/generate_host_nmi
/SP/diag/mode	/HOST/diag/mode
/SP/diag/level	/HOST/diag/level
/SP/diag/verbosity	/HOST/diag/verbosity

ILOM へのログイン、バナーメッセージ の表示、CLI セッションタイムアウトの

設定

説明	リンク
ILOM のログインまたはログアウトの CLI 手順、およびパスワード回復の手順	■ 28 ページの「ILOM のログインとログアウトおよびパスワードの回復」
バナーメッセージおよび CLI セッションタイムアウトのセットアップの CLI 手順	■ 32 ページの「バナーメッセージおよび CLI セッションタイムアウトの設定」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、Oracle ILOM へのログイン
- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、必須の設定タスク (CLI)
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、Oracle ILOM へのログイン
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、バナーメッセージの表示
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、バナーメッセージ

ILOM のログインとログアウトおよびパスワードの回復

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM にログインするための初期要件	■ 28 ページの「初回ログインの前に」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM
Oracle ILOM にログインするための CLI 手順	■ 30 ページの「root アカウントを使用したログイン (CLI)」 ■ 30 ページの「ユーザーアカウントでの Oracle ILOM へのログイン (CLI)」	
Oracle ILOM からログアウトするための CLI 手順	■ 31 ページの「Oracle ILOM からのログアウト (CLI)」	
パスワードを回復するための CLI 手順	■ 31 ページの「失ったパスワードの回復 (CLI)」	

初回ログインの前に

このセクションの手順を開始する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- システム (サーバーまたは CMM) への物理シリアル接続またはネットワーク管理接続が確立されていることを確認します。システムの SER MGT ポートまたは NET MGT ポートに物理接続を確立する方法については、サーバーまたは CMM に付属のインストールガイドを参照してください。

このセクションで説明するログイン手順では、物理ネットワーク接続を使用して Oracle ILOM CLI にログインするものとします。

注 - または、ローカル相互接続インタフェース接続をサポートする Oracle の Sun サーバーの場合は、ホストオペレーティングシステムから Oracle ILOM に直接接続できます。ローカル相互接続インタフェース接続を使用して Oracle ILOM に接続する方法の詳細は、[60 ページの「ローカル相互接続インタフェースの構成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

- サーバー SP または CMM ネットワークアドレスを取得します。
デフォルトでは、Oracle ILOM は、IPv4 または IPv6 アドレスをサーバー SP または CMM に対して自動的に割り当てます。サーバー SP または CMM に割り当てられているデフォルトの IP アドレスを特定するには、サーバー SP または CMM へのローカルシリアル管理接続を確立し、`/network` (または `/network/ipv6`) プロパティを表示します。

Oracle ILOM へのローカルシリアル管理接続の確立方法の詳細は、『Oracle ILOM 3.0 クイックスタートガイド』を参照するか、Sun サーバーまたは Sun ブレードシャーシシステムに付属するドキュメントを参照してください。

サーバー SP または CMM に割り当てられているデフォルト IP アドレスを変更する方法については、[38 ページの「ネットワーク設定の構成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

注 - Oracle ILOM 3.0.12 から、IPv4 および IPv6 のデュアルスタック用のネットワーク構成が提供されます。Oracle ILOM 3.0.12 よりも前のバージョンでは、IPv4 用のネットワーク構成が提供されます。

- Oracle ILOM のユーザーアカウントを入手します。
Oracle ILOM をはじめて設定する場合は、デフォルトの root アカウントと changeme パスワードを使用してログインします。システムを設定したあとは、各 Oracle ILOM ユーザーに新しいユーザーアカウントを作成することを強く推奨します。ユーザーアカウントの詳細については、[67 ページの「ユーザーアカウントの管理 \(CLI\)」](#)を参照してください。

▼ root アカウントを使用したログイン (CLI)

- 1 **Secure Shell (SSH)** セッションを使用して、デフォルトの **root** ユーザーアカウントとサーバー **SP** または **CMM** の IP アドレスを指定し、**Oracle ILOM CLI** にログインします。

例:

```
$ ssh root@system_ipaddress
```

Oracle ILOM がデュアルスタックネットワーク環境で動作している場合は、IPv4 または IPv6 のアドレス形式を使用して *system_ipaddress* を入力できます。次に例を示します。

- **IPv4 のアドレス形式: 10.8.183.106**

または

- **IPv6 のアドレス形式: fec0:a:8:b7:214:4fff:5eca:5f7e/64**

デュアルスタック環境での IP アドレスの入力に関する詳細は、[13 ページ](#)の「**Oracle ILOM CLI で許可されるサーバー SP または CMM のネットワークアドレス**」を参照してください。IPv4 と IPv6 の接続に関する問題の診断のヘルプについては、[213 ページ](#)の「**IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断**」を参照してください。

パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

- 2 デフォルトのパスワードとして **changeme** と入力します。

例:

Password: **changeme**

Oracle ILOM CLI のプロンプト (->) が表示されます。

注 - Oracle ILOM 3.0.4 から、CLI セッションがアイドルになってからタイムアウトで終了するまでの時間を設定できます。手順については、[34 ページ](#)の「**CLI セッションタイムアウトのプロパティ値の設定**」を参照してください。

▼ ユーザーアカウントでの **Oracle ILOM** へのログイン (CLI)

Oracle ILOM システム管理者によって作成されたユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインするには、次の手順に従います。

- 1 **Secure Shell (SSH)** セッションを使用し、ユーザー名と、サーバー SP または CMM の IP アドレスを指定して、**Oracle ILOM** にログインします。

例:

```
$ ssh username@system_ipaddress
```

Oracle ILOM がデュアルスタックネットワーク環境で動作している場合は、IPv4 または IPv6 のアドレス形式を使用して *system_ipaddress* を入力できます。次に例を示します。

- IPv4 のアドレス形式: **10.8.183.106**

- IPv6 のアドレス形式: **fec0:a:8:b7:214:4fff:5eca:5f7e/64**

デュアルスタック環境での IP アドレスの入力に関する詳細は、[13 ページの「Oracle ILOM CLI で許可されるサーバー SP または CMM のネットワークアドレス」](#)を参照してください。IPv4 と IPv6 の接続に関する問題の診断のヘルプについては、[213 ページの「IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断」](#)を参照してください。

Oracle ILOM のパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

- 2 **Oracle ILOM** のパスワードを入力します。

例:

```
Password: password
```

Oracle ILOM CLI プロンプト (->) が表示されます。

▼ Oracle ILOM からのログアウト (CLI)

Oracle ILOM からログアウトするには、次の手順を実行します。

- コマンドプロンプトで、次のように入力します。

```
-> exit
```

▼ 失ったパスワードの回復 (CLI)

始める前に

- この手順は、実際にサーバーのある場所で実行する必要があります。
- この手順では、default ユーザーアカウントを使用して、失ったパスワードを回復できるようにしたり、root ユーザーアカウントを作成し直したりします。
- default ユーザーアカウントは変更または削除できません。

- 1 ILOM にローカルシリアル管理接続を確立し、**default** ユーザーアカウントを使用して ILOM にログインします。
- 例:

```
SUNSP-0000000000 login:default
Press and release the physical presence button.
Press return when this is completed...
```
- 2 サーバーのある場所に居ることを証明します。
- サーバーのある場所に居ることの証明方法については、使用しているプラットフォームのドキュメントを参照してください。
- 3 シリアルコンソールに戻り、**Enter** キーを押します。
- パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
- 4 **default** ユーザーアカウントのパスワードを入力します:**defaultpassword**
- 5 アカウントのパスワードをリセットするか、または **root** アカウントを作成し直します。
- 方法については、69 ページの「ユーザーアカウントのパスワードの変更 (CLI)」または69 ページの「ユーザーアカウントの追加 (CLI)」を参照してください。

参考 関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、Oracle ILOM への接続
- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、新しいユーザーアカウントの追加
- 『Oracle ILOM 3.0 概念』、default および root ユーザーアカウント

バナーメッセージおよび**CLI**セッションタイムアウトの設定

説明	リンク	機能をサポートするプラットフォーム
Oracle ILOM ログインページに表示するバナーメッセージの構成。	■ 33 ページの「ログインページでのバナーメッセージの表示 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM
CLIセッションタイムアウトプロパティの構成。	■ 34 ページの「CLIセッションタイムアウトのプロパティ値の設定」	

▼ ログインページでのバナーメッセージの表示 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM でバナーメッセージを構成するには、Admin (a) の役割が必要です。
- Oracle ILOM 3.0.8 以降を使用する必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 バナーターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/preferences/banner**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/preferences/banner**
- 3 現在のバナープロパティおよびサポートされるコマンドを表示するには、**show** コマンドを使用します。

例:

-> **show**

```
/SP/preferences/banner
Targets:

Properties:
  connect_message = (none)
  login_message = (none)
  login_message_acceptance = disabled

Commands:
  cd
  set
  show
```

- 4 バナーメッセージを作成するには、次のいずれかのタスクを実行します。

タスク	手順
「Login」ページ に表示されるバ ナーメッセージを 作成します	次のように入力します。 -> set /SP/preferences/banner connect_message=message ここでは、 <i>message</i> にはログインページに表示する内容を指定します。

タスク	手順
Oracle ILOM への ユーザーログイン 後のダイアログ ボックスに表示さ れるバ ナーメッセージを 作成します	次のように入力します。 -> set /SP/preferences/banner login_message=message ここでは、 <i>message</i> には Oracle ILOM へのログイン後に表示する内容を指定し ます。
注-バナーメッセージは1000 文字以内です。メッセージ内で改行するには、次の CLI 文字のい ずれかを使用します: /r または /n。	

- 5 システムがバナーメッセージを表示できるようにするには、次のように入力しま
す。
-> **set /SP/preferences/banner/ login_message_acceptance=enabled**
- 6 システムがバナーメッセージを表示できないようにするには、次のように入力しま
す。
-> **set /SP/preferences/banner/ login_message_acceptance=disabled**

▼ CLI セッションタイムアウトのプロパティ値の 設定

始める前に

- CLI で `timeout` プロパティ値を変更するには、Admin (a) の役割が必要です。
- CLI で `timeout` プロパティ値を変更するには、Oracle ILOM 3.0.4 以降を使用する
必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 cli ターゲットに移動するには、`cd` コマンドを使用します。
- サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/cli**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/cli**
- 3 現在の設定を表示するには、次のように入力します。
-> **show**

- 4 CLIで **timeout** プロパティ値を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
-> set timeout=n
```

ここでは、*n* は 0 - 1440 の数値です。

注-0(ゼロ)はCLIセッションのタイムアウトが無効であることを示し、セッションがアイドル状態になっている時間の長さに関係なく CLIセッションは終了しません。

たとえば、タイムアウト値を 60 分に設定するには、次のように入力します。

```
-> set timeout=60
Set 'timeout' to '60'
```


ネットワーク、Secure Shell、ローカル相互接続の構成

説明	リンク
IP、ホスト名、DNS、シリアルポート出力、および HTTP Web アクセスのネットワークプロパティを構成します。	■ 38 ページの「ネットワーク設定の構成 (CLI)」
Secure Shell を構成します。	■ 56 ページの「Secure Shell の構成 (CLI)」
ローカル相互接続インタフェースを構成します。	■ 60 ページの「ローカル相互接続インタフェースの構成 (CLI)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、ネットワーク管理接続の確立
- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』 デフォルトネットワーク設定の変更
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、ネットワーク通信の設定
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、シリアルポートコンソール出力の切り替え
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、ネットワーク設定の構成
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、Secure Shell 設定の構成
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、シリアルポート共有の構成
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、ネットワーク設定の構成
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、ローカル相互接続インタフェースの構成

ネットワーク設定の構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認します。	■ 38 ページの「始める前に — ネットワーク設定 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM
IPv4 のネットワーク設定を表示および構成します。	■ 40 ページの「IPv4 ネットワーク設定の表示と構成 (CLI)」	
既存の IPv4 アドレスを編集します。	■ 41 ページの「既存の IPv4 アドレスの編集 (CLI)」	
IPv4 と IPv6 デュアルスタックネットワークの設定を表示および構成します。	■ 43 ページの「IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク設定の表示と構成 (CLI)」	
IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストします。	■ 49 ページの「IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト (CLI)」	
ホスト名およびシステム識別子を割り当てます。	■ 50 ページの「ホスト名とシステム識別子の割り当て (CLI)」	
DNS の設定を表示および構成します。	■ 51 ページの「DNS 設定の表示と構成 (CLI)」	
シリアルポートの設定を表示および構成します。	■ 52 ページの「シリアルポート設定の表示と構成 (CLI)」	
HTTP または HTTPS の Web アクセスを有効にします。	■ 53 ページの「HTTP または HTTPS の Web アクセスの有効化 (CLI)」	
SP コンソールとホストコンソールの間でシリアルポート出力を切り替えます。	■ 55 ページの「シリアルポート出力の切り替え (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP

始める前に — ネットワーク設定 (CLI)

Oracle ILOM のネットワーク設定を表示または構成する前に、次の情報について確認してください。

ネットワーク環境	作業を開始する前に
IPv4 のみ	■ ネットワーク上で Oracle ILOM を簡単に特定するには、常に同じ IP アドレスを Oracle ILOM に割り当てる必要があります。Oracle ILOM は、デフォルトで IPv4 ネットワーク設定を DHCP を使用して取得しようとしています。
IPv4/IPv6 デュアルスタック	■ Oracle ILOM は、IPv4 DHCP および IPv6 ステートレスのデフォルトネットワーク設定で出荷されます。 ■ サーバーまたは CMM に Oracle ILOM ファームウェア 3.0.12 以降がインストールされていることを確認してください。 ■ IPv4 ネットワーク環境または IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で Oracle ILOM を動作させるには、IPv4 ネットワークの状態を常に有効にする必要があります。 ■ IPv6 のステートレス自動構成を使用する場合、Oracle ILOM (3.0.12 以降) では、ネットワークルーターを IPv6 用に構成する必要があります。 ■ DHCPv6 自動構成オプションのために、Oracle ILOM (3.0.14 以降) ではネットワーク DHCPv6 サーバーがデバイスの IPv6 アドレスおよび DNS 情報を提供する必要があります。 注 - DHCP と DHCPv6 は別々のプロトコルです。デュアルスタックネットワーク環境では、DHCP と DHCPv6 は次のように動作します。(1) DHCPv6 サーバーはネットワークノードに IPv6 アドレスを提供でき、ネットワークノードは常に IPv6 プロトコルを使用して DHCPv6 サーバーと通信します。(2) DHCP サーバーはネットワークノードに IPv4 アドレスを提供でき、ネットワークノードは常に IPv4 プロトコルを使用して DHCP サーバーと通信します。 ■ DHCP と DHCPv6 の自動構成を行うためには、DNS 情報を IPv6 DHCP サーバーと IPv4 DHCP サーバーの両方からではなくそのどちらかから受信します。Oracle ILOM CLI の <code>/SP/clients/dns</code> ターゲットで、DNS ネームサーバーを手動で構成できます。手順については、51 ページの「DNS 設定の表示と構成 (CLI)」を参照してください。 注 - Oracle ILOM での IPv6 の構成をサポートしていないレガシープラットフォームサーバーのリストについては、『ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』で IPv6 をサポートしていないレガシー Sun システムを参照してください。
このセクションで説明するネットワーク設定	■ サーバー SP または CMM のネットワークプロパティまたはオプションを変更するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

▼ IPv4 ネットワーク設定の表示と構成 (CLI)

注—ここでは、IPv4 のみのネットワーク環境で動作するように Oracle ILOM を構成する手順を説明します。Oracle ILOM を IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で動作するように構成する場合の手順については、[43 ページの「IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク設定の表示と構成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 ネットワークターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/network**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/network**
- 3 ネットワーク設定を表示するには、次のように入力します。
-> **show**
- 4 ネットワーク設定を変更するには、次のように入力します。
-> **set property=value**

コマンドを組み合わせ、複数のプロパティを変更できます。[19 ページの「コマンドを組み合わせ、実行する」](#)を参照してください。

注—一連のプロパティをすべて変更し、保留されているすべての値がコマンドに入力された場合にのみ、true に確定します。

注—設定は、**commitpending=true** と設定するとすぐに有効になります。ネットワーク経由で Oracle ILOM に接続している場合、ネットワーク構成を行うと、アクティブなセッションが切断されることがあります。変更を確定する前にすべてのシステムを構成してください。変更を確定したら、Oracle ILOM に再接続する必要があります。

たとえば、複数のネットワーク設定を DHCP から静的に割り当てた設定に変更するには、次のように入力します。

-> **set pendingipdiscovery=static pendingipaddress=nnn.nn.nn.nn
pendingipgateway=nnn.nn.nn.nn pendingipnetmask=nnn.nn.nn.nncommitpending=true**

Oracle ILOM のネットワーク設定では、次のターゲット、プロパティ、および値が有効です。

ターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/network	ipaddress	読み取り専用 (値はシステムによって更新される)	
	ipdiscovery		
	ipgateway		
	ipnetmask		
	macaddress	Oracle ILOM の MAC アドレス	
	commitpending	[true none]	none
	pendingipaddress	[ipaddress none]	none
	pendingipdiscovery	[dhcp static]	dhcp
	pendingipgateway	[ipaddress none]	none
	pendingipnetmask	ipdotteddecimal	255.255.255.0
	dhcp_server_ip	読み取り専用 (値は SP が DHCP アドレスを受け取ったときに更新される)	
	state	[enabled disabled]	none

▼ 既存の IPv4 アドレスの編集 (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 ネットワークターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - ラック搭載型スタンドアロンサーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/network**
 - シャーシブレードサーバーモジュール SP の CMM からの場合は、次のように入力します。
-> **cd /CH/BLn/SP/network**
 - シャーシ CMM の場合は、次のように入力します。
-> **cd /CMM/network**
- 3 割り当てられた IP アドレスおよびほかのネットワーク設定を表示するには、次のように入力します。
-> **show**

4 既存のネットワーク設定を変更するには、次のように入力します。

-> **set** *property=value*

ここで指定可能なプロパティおよび値を、下の表に示します。

コマンド	説明および例
<code>set pendingipaddress=ipaddress</code>	このコマンドに続けて、サーバー SP または CMM に割り当てる静的 IP アドレスを入力します。 例: -> set pendingipaddress=129.144.82.26
<code>set pendingipnetmask=ipnetmask</code>	このコマンドに続けて、サーバー SP または CMM に割り当てる静的ネットマスクアドレスを入力します。 例: -> set pendingipnetmask=255.255.255.0
<code>set pendingipgateway=ipgateway</code>	このコマンドに続けて、サーバー SP または CMM に割り当てる静的ゲートウェイアドレスを入力します。 例: -> set pendingipgateway=129.144.82.254
<code>set pendingipdiscovery=static</code>	このコマンドを入力して、サーバー SP または CMM で静的 IP アドレスを設定します。
<code>set commitpending=true</code>	このコマンドを入力して、指定したネットワーク設定を割り当てます。

注 - リモート SSH 接続を使用して Oracle ILOM に接続した場合、以前の IP アドレスを使用して確立された Oracle ILOM への接続はタイムアウトします。Oracle ILOM に接続するには、新しく割り当てた設定を使用します。

▼ IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク設定の表示と構成 (CLI)

注-ここでは、Oracle ILOM を IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で動作するように構成する場合の手順について説明します。Oracle ILOM を IPv4 のみのネットワーク環境で動作するように構成する場合の手順については、[40 ページの「IPv4 ネットワーク設定の表示と構成 \(CLI\)」](#)を参照してください。この手順は、Oracle ILOM 3.0.10 以前のバージョンでサポートされています。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
- 2 使用しているネットワーク環境に当てはまるネットワーク構成手順を実行します。
 - **IPv4** のネットワーク設定を構成するには、この手順の[手順3-手順5](#)を実行します。
 - **IPv6** ネットワーク設定を構成するには、この手順の[手順6-手順9](#)を実行します。
- 3 **IPv4** ネットワークを構成するには、**cd** コマンドを使用してデバイスの作業用ディレクトリ **/x/network** に移動します。
 - ラック搭載型スタンドアロンサーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/network**
 - シャーシブレードサーバーモジュール **SP** の場合は、次のように入力します。
-> **cd /CH/BLn/SP/network**
 - 複数の **SP** ノードを持つシャーシブレードサーバーの場合は、次のように入力します。
-> **cd /CH/BLn/Noden/network**
 - シャーシ **CMM** の場合は、次のように入力します。
-> **cd /CMM/network**
- 4 デバイスで構成された **IPv4** ネットワーク設定を表示するには、次のように入力します。
-> **show**

5 IPv4 ネットワーク設定を構成するには、**set** コマンドを使用します。

- **DHCP IPv4** ネットワーク設定を構成するには、次の表に示す値を設定します。

プロパティ	set プロパティ値	説明
state	set state=enabled	IPv4 では、ネットワークの state のデフォルトは enabled です。 注-DHCP IPv4 ネットワークオプションを有効にするには、state を enabled に設定する必要があります。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=dhcp	IPv4 の場合、デフォルトの ipdiscovery のプロパティ値は dhcp に設定されます。 注- プロパティのデフォルトの値 dhcp が static に変更されている場合は、このプロパティの値を dhcp に戻す必要があります。
commitpending	set commitpending=true	state および ipdiscovery のプロパティ値に対して行われた変更を確定するには、set commitpending=true と入力します。

- **静的 IPv4** ネットワーク設定を構成するには、次の表に示す値を設定します。

プロパティ	set プロパティ値	説明
state	set state=enabled	IPv4 では、ネットワークの state のデフォルトは enabled です。 注- 静的 IPv4 ネットワークオプションを有効にするには、state を enabled に設定する必要があります。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=static	静的 IPv4 ネットワーク構成を有効にするには、pendingipdiscovery のプロパティ値を static に設定する必要があります。 注- IPv4 では、pendingipdiscovery プロパティはデフォルトで dhcp に設定されます。
pendingipaddress pendingipnetmask pendingipgateway	set pendingipaddress=<ip_address> pendingipnetmask=<netmask> pendingipgateway=<gateway>	複数の静的なネットワーク設定を割り当てるには、 set コマンドに続けて、プロパティ値 (IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイ) ごとに pending コマンドを入力し、割り当てる静的な値を入力します。

プロパティ	set プロパティ値	説明
commitpending=	set commitpending=true	set commitpending=true と入力して、IPv4 ネットワークのプロパティに対して行なった変更を確定します。

- 6 IPv6 ネットワークを構成するには、**cd** コマンドを使用してデバイスの作業用ディレクトリ `/x/network/ipv6` に移動します。
 - ラック搭載型スタンドアロンサーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/network/ipv6**
 - シャーシブレードサーバーモジュール **SP** の場合は、次のように入力します。
-> **cd /CH/BLn/SP/network/ipv6**
 - 複数の **SP** ノードを持つシャーシブレードサーバーの場合は、次のように入力します。
-> **cd /CH/BLn/Noden/network/ipv6**
 - シャーシ **CMM** の場合は、次のように入力します。
-> **cd /CMM/network/ipv6**
- 7 デバイスで構成された **IPv6** ネットワーク設定を表示するには、次のように入力します。
-> **show**

例:
-> **show**
 `/SP/network/ipv6`
 Targets:

 Properties:
 state = enabled
 autoconfig = stateless
 dhcpv6_server_duid = (none)
 link_local_ipaddress = fe80::214:4fff:feca:5f7e/64
 static_ipaddress = ::/128
 ipgateway = fe80::211:5dff:febe:5000/128
 pending_static_ipaddress = ::/128
 dynamic_ipaddress_1 = fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

 Commands:
 cd
 show

注 - autoconfig プロパティーが dhcpv6_stateful または dhcpv6_stateless に設定されている場合、読み取り専用の dhcpv6_server_duid プロパティーによって、Oracle ILOM が DHCP 情報を取得するために最後に使用した、DHCPv6 サーバーの一意の DHCP ID が特定されます。

注 - Oracle ILOM 3.0.14 以降で提供されている IPv6 の autoconfig プロパティーのデフォルト値は、autoconfig=stateless です。ただし、使用している CMM またはサーバーに Oracle ILOM 3.0.12 がインストールされている場合、autoconfig のデフォルトのプロパティー値は autoconfig=stateless_only と表示されます。

- 8 IPv6 ネットワーク設定を構成するには、**set** コマンドを使用します。
- IPv6 自動設定オプションを構成するには、次の表に示す値を設定します。

プロパティー	set プロパティー値	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの state は、デフォルトで enabled になっています。IPv6 自動構成オプションを有効にするには、この state が enabled に設定されている必要があります。

プロパティ	set プロパティ値	説明
autoconfig	set autoconfig=<value>	このコマンドの後に、設定する autoconf の値を指定します。オプションには、次のものがあります。 ■ stateless (Oracle ILOM 3.0.14 以降で提供されているデフォルト設定) または stateless_only (Oracle ILOM 3.0.12 で提供されているデフォルト設定) IPv6 ネットワークルーターから学習した IP アドレスを自動的に割り当てます。 ■ dhcpv6_stateless DHCP サーバーから学習した DNS 情報を自動的に割り当てます。 dhcpv6_stateless プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 ■ dhcpv6_stateful DHCPv6 サーバーから学習した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。 dhcpv6_stateful プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 ■ disable 自動構成プロパティの値をすべて無効にし、リンクローカルアドレスの読み取り専用プロパティの値を設定します。

注 - IPv6 構成オプションは、設定後に有効になります。/network ターゲットでこれらの変更を確定する必要はありません。

注 - 新しく取得した自動構成の IPv6 アドレスは、デバイスに対するアクティブな Oracle ILOM セッションに影響を与えません。新しく取得した自動構成 IPv4 アドレスは、/network/ipv6 ターゲットで確認できます。

注 - Oracle ILOM 3.0.14 以降では、dhcpv6_stateless のオプションが有効になったとき、または dhcpv6_stateful のオプションが有効になったときに、stateless 自動構成オプションを同時に実行可能にできます。ただし、dhcpv6_stateless 自動構成オプションと dhcpv6_stateful 自動構成オプションを同時に有効にするべきではありません。

- 静的 IPv6 アドレスを設定するには、次の手順を実行します。
 - a. 保留中の静的 IPv6 アドレスを設定するには、次の表のプロパティ値を指定します。

プロパティ	set プロパティ値	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの state は、デフォルトで enabled になっています。静的 IP アドレスを構成するには、この state を有効にする必要があります。
pendingipaddress	set pending_static_ipaddress=<ip6_address>/<subnet mask length in bits>	このコマンドの後に、静的な IPv6 アドレスのプロパティの値とデバイスに割り当てるネットマスクを入力します。 IPv6 アドレスの例を次に示します。 fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

- b. 保留中の IPv6 静的ネットワークのパラメータを確定 (保存) するには、次の表の手順を実行します。

手順	説明
1	cd コマンドを使用して、ディレクトリをデバイスの network ターゲットに変更します。 ■ ラック搭載型サーバーの場合、次のように入力します。 -> cd /SP/network ■ シャーシブレードサーバーモジュール SP の場合は、次のように入力します。 -> cd /CH/BLn/SP/network ■ 複数の SP ノードを持つシャーシブレードサーバーの場合は、次のように入力します。 -> cd /CH/BLn/Noden/network ■ シャーシ CMM の場合は、次のように入力します。 -> cd /CMM/network
2	次のコマンドを入力して、変更した IPv6 プロパティの値を確定します。 set commitpending=true

注 - デバイス (SP または CMM) に新しい静的 IP アドレスを割り当てると、デバイスとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいブラウザセッションを作成する必要があります。

- 9 Oracle ILOM で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストするには、ネットワークテストツール (Ping および Ping6) を使用します。詳細は、[49 ページの「IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト \(CLI\)」](#) を参照してください。

▼ IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。
- 2 `cd` コマンドを使用して、デバイスの作業ディレクトリ `/x/network/test` に移動します。
 - ラック搭載型スタンドアロンサーバー SP の場合、次のように入力します。
-> `cd /SP/network/test`
 - シャーシブレードサーバーモジュール SP の場合は、次のように入力します。
-> `cd /CH/BLn/SP/network/test`
 - 複数の SP ノードを持つシャーシブレードサーバーの場合は、次のように入力します。
-> `cd /CH/BLn/NodeN/network/test`
 - シャーシ CMM の場合は、次のように入力します。
-> `cd /CMM/network/test`
- 3 ネットワークの `test` ターゲットとプロパティを表示するには、次のように入力します。
-> `show`
例:
-> `show`
`/CMM/network/test`
Targets:

Properties:

```
ping = (Cannot show property)
ping6 = (Cannot show property)

Commands:
  cd
  set
  show
```

- 4 次の表に示すように、**set ping** または **set ping6** コマンドを使用して、デバイスと指定されているネットワークの宛先との間の接続をテストします。

プロパティ	set プロパティ値	説明
ping	set ping=<IPv4_address>	コマンドプロンプトで set ping コマンドを入力し、続けて IPv4 テストの宛先アドレスを入力します。 例: -> set ping=10.8.183.106 テストに失敗すると、エラーメッセージが表示されます。一部の Oracle サーバーでは、テストに成功すると成功メッセージが表示されます。
ping6	set ping6=<IPv6_address>	set ping6 コマンドの後に、IPv6 テストの宛先アドレスを入力します。 例: -> set ping6=fe80::211:5dff:febe:5000 テストに失敗すると、エラーメッセージが表示されます。一部の Oracle サーバーでは、テストに成功すると成功メッセージが表示されます。

▼ ホスト名とシステム識別子の割り当て (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 SP または CMM 作業ディレクトリに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **cd /SP**
 - CMM の場合、次のように入力します。

-> **cd /CMM**

- 3 SP ホスト名およびシステム識別子のテキストを設定するには、次のように入力します。

```
-> set hostname=text_string system_identifier=text_string
```

ここでは、次のように指定します。

- ホスト名には英数字を使用でき、ハイフンを含めることができます。ホスト名は最大 **60** 文字まで入力できます。
- システム識別子には、標準的なキーボードの任意のキーを使用したテキスト文字列を使用できます。ただし、引用符は除きます。

例:

```
-> set /SP hostname=Lab2-System1 system_identifier=DocSystemforTesting
```

この設定の場合、show コマンドの出力は次のようになります。

```
-> show /SP
/SP
Targets:
  alertmgmt
  .
  .
  .
  users
Properties:
  check_physical_presence = false
  hostname = Lab2-System1
  system_contact = (none)
  system_description = SUN BLADE X3-2 SERVER MODULE, Oracle ILOM
v 3.0.0.0, r31470
system_identifier = DocSystemforTesting
  system_location = (none)
Commands:
  cd
  reset
  set
  show
  version
```

▼ DNS 設定の表示と構成 (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 DNS ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/dns
```

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CMM/clients/dns**

- 3 DNS 設定を表示するには、次のように入力します。

-> **show**

- 4 DNS プロパティ値を変更するには、次のように入力します。

-> **set property=value**

ここで指定可能なプロパティおよび値を、次の表に示します。

プロパティ	値	デフォルト
auto_dns	enabled disabled	disabled
nameserver	ip_address	
retries	0 - 4 の整数	
searchpath	最大 6 つのコンマで区切られた検索接尾辞	
timeout	1 - 10 の整数	

▼ シリアルポート設定の表示と構成 (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。

- 2 シリアルポートターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **cd /SP/serial**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **cd /CMM/serial**

- 3 シリアルポート設定を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- 外部シリアルポートの設定を表示するには、次のように入力します。

-> **show external**

- ホストシリアルポートの設定を表示するには、次のように入力します。

-> **show host**

- 4 シリアルポートのプロパティの値を変更するには、次のように入力します。

-> **set target property=value commitpending=true**

ここで指定可能なターゲット、プロパティ、および値を、次の表に示します。

ターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/CMM/serial/external	commitpending	true (none)	(none)
	flowcontrol	software	software
	pendingspeed	<整数>	9600
	speed	読み取り専用の値 (pendingspeed プロパティを使用して構成)	
/SP/CMM/serial/host	commitpending	true (none)	(none)
	pendingspeed	<整数>	(none)
	speed	読み取り専用の値 (pendingspeed プロパティを使用して構成)	

たとえば、ホストシリアルポートのボーレートを 9600 から 57600 に変更するには、set コマンドを使用します。

- x86 ベースのサーバーの場合、次のように入力します。
-> **set /SP/serial/host pendingspeed=57600 commitpending=true**
- SPARC ベースのサーバーの場合、次のように入力します。
-> **set /SP/serial/external pendingspeed=57600 commitpending=true**

注—x86 ベースのシステムでは、Oracle ILOM がホストと適切に通信するために、ホストシリアルポートの速度を、ホストのオペレーティングシステムのシリアルポート 0、COM1、または /dev/ttyS0 の速度設定と一致させる必要があります。

▼ HTTP または HTTPS の Web アクセスの有効化 (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 **services** ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/services**

- CMM の場合、次のように入力します。

```
-> cd /CMM/services
```

3 Web アクセスのプロパティ値を構成するには、次のように入力します。

```
-> set [http|https] [property=value]
```

ここで指定可能なプロパティおよび値を、次の表に示します。

ターゲット	プロパティ	値	デフォルト
/SP/CMM/services/ http	secureredirect	enabled disabled	enabled
	servicestate	enabled disabled	disabled
	port	<ポート番号>	80
/SP/CMM/services/ https	servicestate	enabled disabled	enabled
	port	<ポート番号>	443

一般的な Web アクセス設定を、次の表に示します。

目的の状態	ターゲット	プロパティ	値
HTTP のみを有効にする	/SP/services/http	secureredirect	disabled
	/SP/services/http	servicestate	enabled
	/SP/services/https	servicestate	disabled
HTTP および HTTPS を有効にする	/SP/services/http	secureredirect	disabled
	/SP/services/http	servicestate	enabled
	/SP/services/https	servicestate	enabled
HTTPS のみを有効にする	/SP/services/http	secureredirect	disabled
	/SP/services/http	servicestate	disabled
	/SP/services/https	servicestate	enabled
HTTP を HTTPS に自動的にリダイレクトする	/SP/services/http	secureredirect	enabled
	/SP/services/http	servicestate	disabled
	/SP/services/https	servicestate	enabled

▼ シリアルポート出力の切り替え (CLI)

注 - シリアルポートの共有がサーバーでサポートされているかどうかを確認するには、サーバーに付属している、プラットフォームの Oracle ILOM 補足マニュアルまたは管理ガイドを参照してください。



注意 - SP 上でネットワークを設定してから、シリアルポートの所有者をホストサーバーに切り替えるようにしてください。ネットワークが設定されていない状態でシリアルポートの所有者をホストサーバーに切り替えると、CLI または Web インタフェースを使用して接続できないため、シリアルポートの所有者を SP に戻すことができません。シリアルポートの所有者設定を SP に戻すには、サーバー上のシリアルポートへのアクセスを復元する必要があります。使用しているサーバー上のポートへのアクセスを回復する方法の詳細は、そのサーバーに付属しているプラットフォームのドキュメントを参照してください。

- 1 Oracle ILOM SP CLI にログインします。
- 2 シリアルポートの所有者を設定するには、次のように入力します。
-> **set /SP/serial/portsharing /owner=host**

注 - シリアルポートのデフォルトの共有値は owner=SP です。

- 3 ドングルまたはマルチポートケーブルを使用して、シリアルホストをサーバーのシリアルポートに接続します。
サーバーにデバイスを接続する方法の詳細については、サーバーに付属している、プラットフォームのインストールドキュメントを参照してください。

Secure Shell の構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Secure Shell の設定を構成するための手順	■ 56 ページの「リモート SSH 接続の確立 (CLI)」 ■ 56 ページの「SSH の有効化または無効化 (CLI)」 ■ 57 ページの「SSH 認証鍵の表示 (CLI)」 ■ 59 ページの「新しい SSH 認証鍵の生成 (CLI)」 ■ 59 ページの「SSH サーバーのリブート (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM

▼ リモート SSH 接続の確立 (CLI)

始める前に

- Secure Shell (SSH) を構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

次の手順を実行して、Oracle ILOM へのリモート SSH 接続を確立します。

- Oracle ILOM への SSH 接続を確立するには、次のように入力します。

`$ ssh -l username server_ipaddress`

Password: *********

デフォルトの CLI プロンプトが表示され、システムではネットワーク設定を確立する CLI コマンドを実行する準備ができました。

参考 関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、Oracle ILOM への接続
- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、Oracle ILOM へのログイン

▼ SSH の有効化または無効化 (CLI)

始める前に

- Secure Shell (SSH) を構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

注 - Oracle ILOM では、SSH がデフォルトで有効になっています。

次の手順に従って、SSH を有効または無効にします。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 **SSH** ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/services/ssh**
 - **CMM** の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/services/ssh**
- 3 ネットワーク経由でのアクセスを提供しない場合、または **SSH** を使用しない場合は、次のように入力します。
-> **set state=[enabled|disabled]**

▼ SSH 認証鍵の表示 (CLI)

始める前に

- Secure Shell (SSH) を構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

注 - /SP/services/ssh/keys/rsa|dsa の下のプロパティはすべて読み取り専用です。

現在の SSH 鍵を表示するには、次のいずれかの手順を使用します。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 **SSH 鍵** ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/services/ssh/keys**
 - **CMM** の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/services/ssh/keys**

3 RSA 鍵を表示するには、次のように入力します。

```
-> show rsa
```

例:

```
-> show rsa
/SP/services/ssh/keys/rsa
Targets:
  Properties:
    fingerprint
=
ca:c0:05:ff:b7:75:15:a0:30:df:1b:a1:76:bd:fe:e5
length
= 1024
publickey
=
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAthvlgqXbPIxN40EvkukKupdFPr8GDaOsKGg
BE5Vlnny4nX8yd8JC/hrw3qDHmXIZ8JAFwoLQgjtZCbEsgpn9nNIMb6nSfu6Y1t
TtUZXSGFBZ48R0mU0SqqfR3i3bgDUR0siphlpqV6Yu0Zd1h3549wQ+RWk3vxqHQ
Ffzhv9c=
Commands:
  cd
  show
```

4 DSA 鍵を表示するには、次のように入力します。

```
-> show dsa
```

例:

```
-> show dsa
/SP/services/ssh/keys/dsa
Targets:
  Properties:
    fingerprint
=
6a:90:c7:37:89:e6:73:23:45:ff:d6:8e:e7:57:2a:60
length
= 1024
publickey
=
AAAAB3NzaC1kc3MAAACBAInrYecNH86imBbUqE+3FoUfm/fei2ZZtQzqrMx5zBm
bHFIAfDRQKeoQ7gqj c9jQb07ajLxwk2vZzkg3ntnmqHz/hwHvdho2KaolBTAFGc
fLI dzGVxi4I3phVb6anmTlbqI2AIIAa7JvQ8dEGbyATYR9A/pf5VTac/TQ700/J
AAAAFQCIUavkex7tEhC0CH3s250N0I3CwAAAIbnfHUop6ZN7i46ZuQ0KhD7Mkj
gdHy+8MTBkupVfXqfRE9Zw9yrBZCNsoD8XEeIeyP+pu05k5dJvkzqSqrTVoAXyY
qewyZMFE7stutugw/XEmyjq+XqBWai0AQskdiMVnHa3MSg8PKJyWP8eIMxD3rIu
PTzkV632uBxzwSwfAQAAAAIAAtA8/3odDJUprnxLgHTowc8ksGBj/wJDgPfpGGJHB
B1FDBMhSsRbwh6Z+s/gAf1f+S67HJBTUPsVSMz+czmamc1oZeOazT4+zeNG6uCl
u/5/0mJSdkguc1FcoxtBFqf0/fKjyR0ecWau7L4kqvWoSsydHJ0pMHasEecEBER
lg==
Commands:
  cd
  show
```

▼ 新しい SSH 認証鍵の生成 (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 ssh ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/services/ssh**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/services/ssh**
- 3 次のように入力して、鍵の種類を設定します。
-> **set generate_new_key_type=dsa|rsa**
- 4 アクションを **true** に設定します。
-> **set generate_new_key_action=true**
フィンガプリントと鍵は異なって見えます。新しい鍵は、新しい接続が確立されるとすぐに有効になります。

▼ SSH サーバーのリブート (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 SSH ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/services/ssh**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/services/ssh**
- 3 SSH サーバーをリブートするには、次のように入力します。
-> **set restart_sshd_action=true**

ローカル相互接続インタフェースの構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認します	■ 60 ページの「ローカル相互接続の要件 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP
ローカル相互接続インタフェースを構成します	■ 61 ページの「サーバー SP とホスト OS の間のローカル相互接続インタフェースの構成 (CLI)」	

ローカル相互接続の要件 (CLI)

ローカル相互接続インタフェースの構成手順を実行する前に、次の要件が満たされている必要があります。

- Oracle ILOM SP とホスト OS の間のローカル相互接続インタフェースの使用について説明する概念を確認します。詳細については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』で「ホスト OS から ILOM へのローカル接続」を参照してください。
- Oracle ILOM のローカルホスト相互接続の構成に関する説明を確認します。詳細については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』で「Oracle ILOM のローカルホスト相互接続の設定」を参照してください。
- サーバーで Oracle ILOM 3.0.12 以降のバージョンの Oracle ILOM が実行されていることを確認します。
- プラットフォームサーバーでローカル相互接続インタフェースがサポートされていることを確認します。プラットフォームサーバーの管理ガイドまたは Oracle ILOM 補足マニュアルを参照してください。

注 - ローカル相互接続インタフェースを構成するための設定は、CMM ではサポートされません。ただし、Oracle ILOM CMM CLI または Web インタフェース接続を使用すると、Sun ブレードサーバーのこれらの設定にアクセスして構成できます。

- ローカル相互接続インタフェースを自動構成するには、Oracle ILOM の「Host Managed」(hostmanaged) 設定を有効にして (True に設定)、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアをサーバーにインストールする必要があります。Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 ソフトウェアのインストールの詳細については、『Oracle Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。

- Oracle ILOM SP とホストオペレーティングシステムの間でローカル相互接続インタフェースを手動で構成するには、Oracle ILOM で「Host Managed」(hostmanaged) の設定を無効にする (False に設定する) 必要があります。また、ホストオペレーティングシステムで、その他の設定を行う必要があります。

ローカル相互接続インタフェース上でホスト OS 接続ポイントを構成するためのガイドラインについては、[215 ページの「ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動構成ガイドライン」](#)を参照してください。

- ホストオペレーティングシステムで、Oracle ILOM SP から提供される内部 USB Ethernet デバイスがサポートされている必要があります。そのため、Oracle ILOM でローカル相互接続インタフェースを構成する前に、内部 USB Ethernet デバイスのドライバが、オペレーティングシステムのディストリビューションに含まれていたか、およびサーバーにインストールされているかを確認する必要があります。内部 USB Ethernet デバイスのドライバがオペレーティングシステムのディストリビューションによってインストールされていない場合は、使用中のオペレーティングシステム用のデバイスドライバを Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 ソフトウェアから取得できます。詳細については、『Oracle Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。
- Oracle ILOM のローカル相互接続インタフェースに関する設定のネットワークパラメータの変更は、Oracle ILOM で変更を確定するまで保留中とみなされます。たとえば、Oracle ILOM CLI では、commitpending=true コマンドを実行して、pendingipaddress および pendingipnetmask を network/interconnect ターゲットの下に保存する必要があります。Oracle ILOM Web インタフェースでは、「Configure USB Ethernet Parameters」ダイアログボックスで入力したネットワークパラメータの変更が、「Save」をクリックしたあとに確定されます。
- Oracle ILOM のローカル相互接続インタフェースに関する設定を変更するためには、Administrator (a) の役割の特権を持っている Oracle ILOM ユーザーアカウントが必要です。
- サーバーでサポートされているオペレーティングシステムを確認するには、プラットフォームサーバーのインストールガイドまたはオペレーティングシステムガイドを参照してください。

▼ サーバー SP とホスト OS の間のローカル相互接続インタフェースの構成 (CLI)

1 Oracle ILOM SP CLI にログインします。

サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。

- 2 **cd** コマンドを使用して、サーバーの **/x/network/interconnect** 作業ディレクトリに移動します。

- スタンドアロンのラック搭載型サーバー **SP** の場合、次のように入力します。

-> **cd /SP/network/interconnect**

- シャーシブレードサーバーモジュール **SP** の場合は、次のように入力します。

-> **cd /CH/BLn/SP/network/interconnect**

- 3 **show** コマンドを使用して、ネットワークの **interconnect** ターゲットとプロパティを表示します。

出力例:

- **network/interconnect** プロパティの下 **hostmanaged** プロパティが **true** に設定されています。この構成例では、**Oracle Hardware Management Pack 2.1.0** 以降のソフトウェアによる自動構成について、ホストの管理対象の状態が有効になっています。

-> **show**

```
/SP/network/interconnect
Targets:
Properties:
  hostmanaged = true
  type = USB Ethernet
  ipaddress = 169.254.182.76
  ipnetmask = 255.255.255.0
  spmacaddress = 02:21:28:57:47:16
  hostmacaddress = 02:21:28:57:47:17
Commands:
  cd
  set
  show
```

- **network/interconnect** プロパティの下 **hostmanaged** プロパティが **false** に設定されています。この構成例では、ホストの管理対象の状態が無効になっており、ローカル相互接続インタフェース上の **Oracle ILOM SP** およびホスト **OS** の接続ポイントを手動で構成できます。

-> **show**

```
/SP/network/interconnect
Targets:
Properties:
  hostmanaged = false
  state = enabled
  type = USB Ethernet
  ipaddress = 169.254.182.76
  ipnetmask = 255.255.255.0
  spmacaddress = 02:21:28:57:47:16
  hostmacaddress = 02:21:28:57:47:17
  pendingipaddress = 169.254.182.76
```

```
pendingipnetmask = 255.255.255.0
commitpending = (Cannot show property)
Commands:
  cd
  set
  show
```

4 ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェース上の接続ポイントに割り当てる構成を行う場合、次のいずれかの方法を使用できます。

- **hostmanaged** プロパティを **true** に設定して、ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェース上の各接続ポイントに自動的に割り当てます。

-> **set hostmanaged=true**

hostmanaged プロパティを true に設定する場合は、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 (以降) ソフトウェアをサーバーにインストールし、インストールのデフォルトを受け入れて、ローカル ILOM 相互接続を有効にする必要もありません。詳細については、『Oracle Hardware Management Pack ユーザーズガイド』のローカル ILOM 相互接続の構成に関するセクションを参照してください。

または

- **hostmanaged** プロパティを **false** に設定して、ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスをローカル相互接続インタフェース上の各接続ポイントに手動で割り当てます。

-> **set hostmanaged=false**

hostmanaged プロパティを false に設定する場合は、次の /network/interconnect プロパティの値も手動で設定する必要があります。

プロパティ	set プロパティ値	説明
state	set state=enabled	Oracle ILOM SP とホスト OS の間のローカル相互接続インタフェースを手動で有効にするには、 set state=enabled と入力します。 デフォルトでは、interconnect ターゲットの state プロパティは disabled に設定されています。

プロパティ	set プロパティ値	説明
pendingipaddress	set pendingipaddress=169.254.182.76	デフォルトでは、ローカル相互接続インタフェース上の Oracle ILOM SP 接続ポイントに対して、ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスが Oracle ILOM から提供されます。 この IPv4 アドレスがホスト OS 上で競合しない場合は、このデフォルトの IPv4 アドレス (169.254.182.76) を変更しないでください。 デフォルトの IPv4 アドレスを変更するには、set pendingipaddress= の入力に続けて、ローカル相互接続インタフェース上の Oracle ILOM SP 接続ポイントに割り当てる内部 IPv4 アドレスを入力します。
pendingipnetmask	set pendingipnetmask=255.255.255.0	デフォルトでは、ローカル相互接続インタフェース上の Oracle ILOM SP 接続ポイントに対して、IPv4 ネットマスクアドレスが Oracle ILOM から提供されます。 このデフォルトの IPv4 ネットマスク (255.255.255.0) アドレスは、ネットワーク環境で競合が発生しないかぎり変更しないでください。 デフォルトのネットマスクアドレスを変更するには、set pendingipnetmask= の入力に続けて、ローカル相互接続インタフェース上の Oracle ILOM SP 接続ポイントに割り当てる内部 IPv4 ネットマスクを入力します。
commitpending	set commitpending=<value>	network/interconnect ターゲットの pendingipaddress と pendingipnetmask の両方に対する変更は、確定されるまで保留中とみなされます。 変更を確定するには、次のように入力します。 -> set commitpending=true 変更をキャンセルするには、次のように入力します。 -> set commitpending=false

注 - Oracle Hardware Management Pack ソフトウェアでローカル相互接続インタフェース上の接続ポイントが自動的に構成されないようにするには、hostmanaged プロパティの値を False に設定する必要があります。Oracle ILOM SP とホスト OS の間でローカル相互接続インタフェースが使用されないようにするには、state プロパティの値を disabled に設定し、hostmanaged プロパティの値を False に設定する必要があります。

- 5 **Oracle Hardware Management Pack 2.1.0** ソフトウェアを使用せずに、ローカル相互接続インタフェースを **Oracle ILOM** で手動で構成するように選択した場合、ホストオペレーティングシステムで追加構成をいくつか実行する必要があります。

このホスト OS での追加構成に関する一般的な詳細については、[215 ページ](#)の「ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動構成ガイドライン」を参照してください。

- 6 手動のローカルホスト相互接続の構成プロパティに必要な値の詳細を参照するには、**help** コマンドを使用します。

たとえば、構成可能なプロパティの情報を参照するには、次のいずれかを入力します。

- **-> help hostmanaged**
- **-> help state**
- **-> help pendingipaddress**
- **-> help pendingipnetmask**
- **-> help commitpending**

読み取り専用プロパティの追加情報を参照するには、次のいずれかを入力します。

- **-> help type**
- **-> help ipaddress**
- **-> help ipnetmask**
- **-> help spmacaddress**
- **-> help hostmacaddress**

ユーザーアカウントの管理 (CLI)

説明	リンク
ユーザーアカウントを構成するための CLI 手順	■ 68 ページの「ユーザーアカウントの構成 (CLI)」
SSH ユーザー鍵を構成するための CLI 手順	■ 74 ページの「SSH ユーザー鍵の構成 (CLI)」
Active Directory の設定を構成するための CLI 手順	■ 76 ページの「Active Directory の構成 (CLI)」
LDAP の設定を構成するための CLI 手順	■ 87 ページの「Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) の構成 (CLI)」
LDAP/SSL の設定を構成するための CLI 手順	■ 89 ページの「LDAP/SSL の構成 (CLI)」
RADIUS の設定を構成するための CLI 手順	■ 98 ページの「RADIUS の構成 (CLI)」

関連情報

- [31 ページの「失ったパスワードの回復 \(CLI\)」](#)
- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、ユーザーアカウントの追加
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、ユーザーアカウント管理のガイドライン
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理』、ユーザーアカウントの管理

ユーザーアカウントの構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM でのユーザーアカウント管理手順	■ 68 ページの「シングルサインオンの構成 (CLI)」 ■ 69 ページの「ユーザーアカウントの追加 (CLI)」 ■ 69 ページの「ユーザーアカウントのパスワードの変更 (CLI)」 ■ 70 ページの「ユーザーアカウントへの役割の割り当て (CLI)」 ■ 71 ページの「ユーザーアカウントの削除 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM
Oracle ILOM ユーザーアカウントおよびユーザーセッションの表示手順	■ 72 ページの「個別のユーザーアカウントの表示 (CLI)」 ■ 72 ページの「ユーザーアカウントのリストの表示 (CLI)」 ■ 73 ページの「ユーザーセッションのリストの表示 (CLI)」 ■ 73 ページの「個別のユーザーセッションの表示 (CLI)」	

▼ シングルサインオンの構成 (CLI)

始める前に

- シングルサインオンを構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
 - 2 シングルサインオンを有効または無効にするには、**set** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **set /SP/services/sso state=[disabled|enabled]**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **set /CMM/services/sso state=[disabled|enabled]**

▼ ユーザーアカウントの追加 (CLI)

始める前に

- ユーザーアカウントを作成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 ローカルユーザーアカウントを追加するには、**create** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

```
-> create /SP/users/username password=password
role=[administrator|operator|a|u|c|r|o]
```

- CMM の場合、次のように入力します。

```
-> create /CMM/users/username password=password
role=[administrator|operator|a|u|c|r|o]
```

注-ユーザーアカウントを追加する場合、role や password プロパティを構成する必要はありません。role プロパティはデフォルトで Read Only (o) に設定され、CLI でパスワードの入力と確認が求められます。

例:

```
-> create /SP/users/user5
Creating user...
Enter new password: *****
Enter new password again: *****
Created /SP/users/user5
```

▼ ユーザーアカウントのパスワードの変更 (CLI)

始める前に

- ユーザーアカウントのプロパティを変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 ユーザーアカウントのパスワードを変更するには、**set** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

```
-> set /SP/users/user password
```

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **set /CMM/users/user password**

例:

```
-> set /SP/users/user5 password
Enter new password: *****
Enter new password again: *****
```

▼ ユーザーアカウントへの役割の割り当て (CLI)

始める前に

- ユーザーアカウントの役割のプロパティを追加または変更するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 ユーザーアカウントに役割を割り当てるには、**set** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

```
-> set /SP/users/user password=password
role=[administrator|operator|a|u|c|r|o|s]
```

- CMM の場合、次のように入力します。

```
-> set /CMM/users/user password=password
role=[administrator|operator|a|u|c|r|o|s]
```

例:

```
-> set /SP/users/user5 role=auc
Set 'role' to 'auc'
-> show /SP/users/user5
Targets:
  ssh

Properties:
  role = auc
  password = *****

Commands:
  cd
  set
  show
```

ユーザーの役割 (CLI)	付与されるユーザーの役割の権限 (CLI)
(a)	Admin (a)。すべての Oracle ILOM システム管理機能に対する読み取りと書き込みの権限が付与されます。ただし、Adminに加えて User Management (u)、Reset and Console (c)、Host Control (r)、および Services (s) の役割を有効にする必要がある機能は除きます。
(u)	User Management (u)。すべての Oracle ILOM ユーザーアカウント管理機能の読み取りおよび書き込み権限が、ユーザーに付与されます。
(c)	Console (c)。リモートコンソール管理機能 (リモートコンソールのロックオプションの管理、SP コンソールの履歴ログオプションの管理、Oracle ILOM リモートコンソールの起動と使用、Oracle ILOM Storage Redirection CLI の起動と使用) を実行するための読み取りと書き込みの権限が、ユーザーに付与されます。
(r)	Reset and Host Control (r)。リモートホスト管理機能 (ホストブートデバイスの制御、診断ユーティリティーの実行と構成、SP のリセット、CMM のリセット、コンポーネント管理サービスアクション、障害管理アクション、SPARC TPM 管理アクション、および SNMP MIB のダウンロード) を実行できる読み取りおよび書き込み権限が、ユーザーに付与されます。
(o)	Read Only (o)。すべての ILOM 構成プロパティの状態を表示するための読み取り専用権限が、ユーザーに付与されます。さらに、自分のユーザーアカウントに対して割り当てられたパスワードとセッションタイムアウトプロパティのみを変更するための書き込み権限が、ユーザーに付与されます。
(s)	Services (s)。オンサイトサービスが必要な場合に Oracle のサービスエンジニアを補助するための読み取りと書き込みの権限が、ユーザーに付与されます。
(aucro)	これらすべてのユーザーの役割の組み合わせ (aucro) により、バックアップおよび復元構成機能を実行できる読み取りおよび書き込み権限がユーザーに付与されます。 注 -aucro は、Web インタフェースの Administrator ユーザーの役割プロファイルのオプションを設定する手順と同等です。

▼ ユーザーアカウントの削除 (CLI)

始める前に

- ユーザーアカウントを削除するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 ローカルユーザーアカウントを削除するには、**delete** コマンドを使用します。
 - サーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> **delete /SP/users/username**

- **CMM** の場合、次のように入力します。

-> **delete /CMM/users/username**

例:

```
-> delete /SP/users/user5
Are you sure you want to delete /SP/users/user5 (y/n)?y
Deleted /SP/users/user5
```

▼ 個別のユーザーアカウントの表示 (CLI)

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 1つの特定のユーザーアカウントに関する情報を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- サーバー **SP** の場合、次のように入力します。

-> **show /SP/users/username**

- **CMM** の場合、次のように入力します。

-> **show /CMM/users/username**

例:

```
-> show /SP/users/user1
```

```
/SP/users/user1
Targets:
  ssh

Properties:
  role = aucros
  password = *****

Commands:
  cd
  set
  show
```

▼ ユーザーアカウントのリストの表示 (CLI)

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 すべてのローカルユーザーアカウントに関する情報を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- サーバー **SP** の場合、次のように入力します。

-> **show /SP/users**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CMM/users**

例:

```
-> show /SP/users
/SP/users
Targets:
  user1
  user2
  user3
  user4
```

▼ ユーザーセッションのリストの表示 (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 すべてのローカルユーザーセッションに関する情報を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **show /SP/sessions**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CMM/sessions**

例:

```
-> show /SP/sessions
/SP/sessions
Targets
  12 (current)

Properties:

Commands:
  cd
  show
```

▼ 個別のユーザーセッションの表示 (CLI)

注 - 個別のユーザーの役割を表示するには、Oracle ILOM 3.0.4 以降のバージョンの Oracle ILOM を使用している必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。

2 個別のユーザーセッションに関する情報を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

```
-> show /SP/sessions/session_number
```

- CMM の場合、次のように入力します。

```
-> show /CMM/sessions/session_number
```

例:

```
-> show /SP/sessions/12
```

```
/SP/sessions/12
Targets:

Properties:
  username = user4
  role = aucro
  starttime = Mon Apr 13 06:25:19 2009
  type = shell
  mode = normal

Commands:
  cd
  show
```

SSH ユーザー鍵の構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
SSH ユーザー鍵プロパティを管理するための手順	■ 74 ページの「SSH 鍵の追加」 ■ 75 ページの「SSH 鍵の削除 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM

▼ SSH 鍵の追加

始める前に

- 他のユーザーの SSH 鍵を追加するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- 自分のユーザーアカウントに SSH 鍵を追加するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。

1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。

- 2 ユーザーの SSH 鍵のディレクトリの場所に移動するには、**cd** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

```
-> cd /SP/users/user/ssh/keys/n
```

- CMM の場合、次のように入力します。

```
-> cd /CMM/users/user/ssh/keys/n
```

ここでは、*n* は構成する ssh 鍵の数です。

- 3 鍵をユーザーのアカウントに追加するには、次のように入力します。

```
-> set
```

```
load_uri=transfer_method://username:password@ipaddress_or_hostname/directorypath/filename
```

ここでは、次のように指定します。

- *transfer_method* には、**tftp**、**ftp**、**sftp**、**scp**、**http**、または **https** を指定できます。
- *username* はリモートシステムでのユーザーアカウント名です。(username は **scp**、**sftp**、および **ftp** の場合に必要です。username は **tftp** では使用されず、**http** および **https** ではオプションです)。
- *password* はリモートシステムでのユーザーアカウントのパスワードです。(password は **scp**、**sftp**、および **ftp** の場合に必要です。password は **tftp** では使用されず、**http** および **https** ではオプションです)。
- *ipaddress_or_hostname* は、リモートシステムの IP アドレスまたはホスト名です。
- *directorypath* は、リモートシステム上の SSH 鍵の場所です。
- *filename* は、SSH 鍵ファイルに割り当てられた名前です。

例:

```
-> set load_uri=
scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/keys/sshkey_1.pub
Set 'load_uri' to
'scp://adminuser:userpswd@1.2.3.4/keys/sshkey_1.pub'
```

▼ SSH 鍵の削除 (CLI)

始める前に

- 他のユーザーの SSH 鍵を削除するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

- 自分の SSH 鍵を削除するには、Read Only (o) の役割を有効にする必要があります。
- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
 - 2 ユーザーの SSH 鍵のディレクトリの場所に移動するには、`cd` コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> `cd /SP/users/user/ssh/keys/n`
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> `cd /CMM/users/user/ssh/keys/n`ここでは、`n` は構成する ssh 鍵の数です。
 - 3 ユーザーのアカウントから鍵を削除するには、次のように入力します。
-> `set clear_action=true`
例:
-> `set clear_action=true`
Are you sure you want to clear /SP/users/user1/ssh/keys/1 (y/n)? `y`
Set 'clear_action' to 'true'

Active Directory の構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Active Directory の設定を管理するための手順	■ 77 ページの「Active Directory strictcertmode (CLI) の有効化」 ■ 77 ページの「Active Directory certstatus の確認 (CLI)」 ■ 78 ページの「Active Directory 証明書の削除 (CLI)」 ■ 79 ページの「Active Directory の設定の表示と構成 (CLI)」 ■ 86 ページの「Active Directory の認証および承認のトラブルシューティング (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM

▼ Active Directory strictcertmode (CLI) の有効化

始める前に

- Active Directory を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

注-デフォルトでは、strictcertmodeは無効です。この変数が無効になっている場合、チャンネルはセキュアですが、証明書に対して限定的な検証が実行されます。strictcertmodeが有効になっている場合は、サーバーの証明書が提供されたときに証明書の署名を検証できるように、サーバーの証明書がサーバーにすでにアップロードされている必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 Active Directory 証明書設定にアクセスするには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/clients/activedirectory**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/clients/activedirectory**
- 3 証明書をロードするには、次のように入力します。

-> **set cert load_uri=[tftp|ftp|scp]://IP address/file-path/filename**

注-TFTP、FTP、またはSCPを使用して証明書をロードできます。あるいは、CLIでload-sourceコマンドを使用して、Active Directory用のSSL証明書をどこからでもロードできます。例: -> load -source URI_to_SSL_certificate target

- 4 strictcertmode を有効にするには、次のように入力します。
-> **set strictcertmode=enabled**

注-strictcertmodeが無効の場合でも、データは常に保護されます。

▼ Active Directory certstatus の確認 (CLI)

始める前に

- Active Directory を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

注 - certstatus は、現在の証明書の state を反映する操作変数です。strictcertmode が無効の場合、certstatus も state も存在する必要はありません。ただし、strictcertmode が有効になっている場合は、証明書をロードする必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 証明書のステータスを確認するには、**show** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **show /SP/clients/activedirectory/cert**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CMM/clients/activedirectory/cert**

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory/cert
Targets:

Properties:
  certstatus = certificate present
  clear_action = (none)
  issuer = /DC=com/DC=oracle/DC=east/DC=sales/CN=
CAforActiveDirectory
  load_uri = (none)
  serial_number =
08:f3:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
  subject = /DC=com/DC=oracle/DC=east/DC=sales/CN=
CAforActiveDirectory
  valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
  valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
  version = 3 (0x02)

Commands:
  cd
  load
  reset
  set
  show
```

▼ Active Directory 証明書の削除 (CLI)

始める前に

- Active Directory を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

注 - 認証サーバー証明書は、`strictcertmode` が無効な場合にのみ削除できます。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 **Active Directory** ターゲットに移動するには、`cd` コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> `cd /SP/clients/activedirectory/cert`
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> `cd /CMM/clients/activedirectory/cert`
- 3 証明書を削除するには、次のいずれかのコマンドを入力します。
 - -> `set clear_action=true`
 - -> `reset target`

例:

```
-> reset /SP/clients/activedirectory/cert
Are you sure you want to reset /SP/clients/activedirectory/cert
(y/n)? y
```

▼ **Active Directory** の設定の表示と構成 (CLI)

始める前に

- Active Directory を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- Active Directory Group プロパティを構成するための名前フィールドでは、128 文字までがサポートされます。選択した書式が 128 文字を超えている場合、より少ない文字で指定可能な、サポートされる書式を使用してください。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 **Active Directory** ターゲットに移動するには、`cd` コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> `cd /SP/clients/activedirectory`
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> `cd /CMM/clients/activedirectory`

3 Active Directory のプロパティを表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **admingroups** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

```
-> show admingroups/n
```

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show admingroups/1
/SP/clients/activedirectory/admingroups/1
Targets:

Properties: name = CN=SpSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=
east,DC=oracle,DC=com
```

- **admingroups** ターゲット内のプロパティを変更するには、次のように入力します。

```
-> set admingroups/n property=value
```

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> set admingroups/1 name=CN=spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=
oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,
DC=com'
```

4 **opergroups** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **opergroups** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

```
-> show opergroups/n
```

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show opergroups/1
/SP/clients/activedirectory/opergroups/1
Targets:

Properties: name = CN=SpSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=
east,DC=oracle,DC=com
```

- **opergroups** ターゲット内のプロパティを変更するには、次のように入力します。

```
-> set opergroups/n property=value
```

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> set opergroups/1 name=CN=spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=
oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=
com'
```

- 5 **customgroups** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **customgroups** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

```
-> show customgroups/n
```

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show customgroups/1
/SP/clients/activedirectory/customgroups/1
Targets:

Properties
  name = custom_group_1
  roles = auctro
```

- **customgroups** ターゲット内のプロパティを変更するには、次のように入力します。

```
-> set customgroups/n property=value
```

例:

```
-> set customgroups/1 name=CN=spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=
oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=
com'
-> set /SP/clients/activedirectory/customgroups/1 roles=au
Set 'roles' to 'au'
```

- 6 **userdomains** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **userdomains** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

```
-> show userdomains/n
```

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show userdomains/1
/SP/clients/activedirectory/userdomains/1
Targets:

Properties:
  domain = <USERNAME>@sales.example.oracle.com
```

- **userdomains** ターゲット内のプロパティを変更するには、次のように入力します。

-> **set userdomains/*n* property=value**

例:

```
-> set userdomains/1 domain=<USERNAME>@sales.example.oracle.com
Set 'domain' to '<username>@sales.example.oracle.com'
```

注- 前の例で、<USERNAME> はユーザーのログイン名で置き換えられます。認証時に、ユーザーのログイン名が <USERNAME> に置き換わります。名前には、完全修飾ドメイン名 (FQDN)、domain\name (NT)、または単純名を使用できます。

- 7 **alternateservers** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **alternateservers** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

-> **show alternateservers/*n***

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show alternateservers/1
/SP/clients/activedirectory/alternateservers/1
Targets:
    cert

Properties:
    address = 10.8.168.99
    port = 0
```

注- address プロパティには、IP アドレスまたは DNS (ホスト名) のいずれかを指定できます。DNS を使用する場合は、DNS が有効である必要があります。DNS の有効化の詳細については、[51 ページの「DNS 設定の表示と構成 \(CLI\)」](#) を参照してください。

- **alternateservers** ターゲット内のプロパティを変更するには、次のように入力します。

-> **set alternateservers/*n* property=value**

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> set alternateservers/1 port=636
```

8 **alternateservers** 証明書プロパティを表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- 代替サーバー証明書情報を表示するには、次のように入力します。

```
-> show alternateservers/n/cert
```

ここでは、*n* には 1-5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show alternateservers/1/cert
/SP/clients/activedirectory/alternateservers/1/cert
Targets:

Properties:
  certstatus = certificate present
  clear_action = (none)
  issuer = /DC=com/DC=oracle/DC=east/DC=sales/CN
CAforActiveDirectory
  load_uri = (none)
  serial_number =
08:f3:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
  subject = /DC=com/DC=oracle/DC=east/DC=sales/CN=
CAforActiveDirectory
  valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
  valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
  version = 3 (0x02)
```

- 代替サーバーの証明書をコピーするには、次のように入力します。

```
-> set alternateservers/n/cert
```

```
load_uri=[tftp|ftp|scp]:[//username:password@]//[ipAddress/|hostName/]filePath/
fileName
```

次は、TFTP を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set alternateservers/n/cert load_uri=
tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert
Set 'load_uri' to 'tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert'
```

注-TFTP 転送方法では、ユーザー名とパスワードは不要です。

次は、FTP を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set load_uri=
ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert
Set 'load_uri' to
'ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert'
```

次は、SCP を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set load_uri=
scp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/home/dc150698/8275_put/cert
.cert
```

```
Set 'load_uri' to
'scp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/home/dc150698/8275_put/
cert.cert'
```

- 代替サーバーの証明書を削除するには、次のように入力します。

```
-> set alternateservers/n/cert clear_action=true
```

例:

```
-> set alternateservers/1/cert clear_action=true
Are you sure you want to clear
/SP/clients/activedirectory/alternateservers/1/cert (y/n)? y
Set 'clear_action' to 'true'
```

- 9 **dnslocatorqueries** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **dnslocatorqueries** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

```
-> show dnslocatorqueries/n
```

ここでは、*n* には 1-5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show dnslocatorqueries/1
/SP/clients/activedirectory/dnslocatorqueries/1
Targets:

Properties:
  service = _ldap._tcp.gc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:3269>

Commands:
  cd
  set
  show
```

注-DNS ロケータクエリーが機能するには、DNS および DNS ロケータモードが有効である必要があります。DNS の有効化については、[51 ページの「DNS 設定の表示と構成 \(CLI\)」](#) を参照してください。

DNS ロケータサービスクエリーは、名前付き DNS サービスを特定します。レコードには通常ポート ID が含まれますが、<PORT:636> という形式でオーバーライドできます。さらに、<DOMAIN> 置換マーカを使用して、認証対象の特定のドメインに対する名前付きサービスを指定できます。

- **dnslocatorqueries** ターゲット内のプロパティを変更するには、次のように入力します。

```
-> set dnslocatorqueries/n service=DNSLocatorServiceQuery
```

例:

```
-> set dnslocatorqueries/1 service=
_ldap._tcp.gc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:3269>
```

- 10 expsearchmode** プロパティーを表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

注 - expsearchmode プロパティーを表示および構成するには、Oracle ILOM 3.0.4 以降を使用している必要があります。

- **expsearchmode** プロパティーを表示するには、次のように入力します。

```
-> show expsearchmode
```

例:

```
-> show expsearchmode

/SP/clients/activedirectory
Properties:
  expsearchmode = disabled
```

- **expsearchmode** プロパティーを有効または無効にするには、次のように入力します。

```
-> set expsearchmode=[enabled|disabled]
```

例:

```
-> set expsearchmode=enabled
Set 'expsearchmode' to 'enabled'
```

- 11 strictcredentialerrormode** プロパティーを表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

注 - Oracle ILOM 3.0.10 から、strictcredentialerrormode を使用してユーザー資格エラーの処理方法を制御できるようになりました。このモードが有効な場合、どのサーバーから報告された資格エラーでも、これらのユーザー資格は無効になります。このモードが無効な場合 (デフォルト設定)、認証のため他のサーバーへこれらのユーザー資格を提供できます。

- **strictcredentialerrormode** プロパティーを表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/clients/activedirectory
```

例:

```
-> show /SP/clients/activedirectory

/SP/clients/activedirectory
```

```
Properties
strictcredentialerrormode = disabled
```

- **strictcredentialerrormode** プロパティを有効または無効にするには、次のように入力します。

```
-> set strictcredentialerrormode=[enabled|disabled]
```

例:

```
-> set strictcredentialerrormode=enabled
Set 'strictcredentialerrormode' to 'enabled'
```

▼ Active Directory の認証および承認のトラブルシューティング (CLI)

始める前に

- Active Directory を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 Active Directory ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。


```
-> cd /SP/clients/activedirectory
```
- 3 Active Directory 認証モジュールのデバッグイベントレベルを **trace** に設定するには、次のように入力します。


```
-> set logdetail=trace
Set 'logdetail' to 'trace'
```
- 4 Oracle ILOM CLI からログアウトしてもう一度ログインして、もう一度承認します。
- 5 承認に関するイベントログ出力を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。


```
-> show /SP/logs/event/list Class==ActDir Type==Log
```
- CMM の場合、次のように入力します。


```
-> show /CMM/logs/event/list Class==ActDir Type==Log
```

例:

```
-> show /SP/logs/event/list Class==ActDir Type==Log
```

ID	Date/Time	Class	Type	Severity
----	-----------	-------	------	----------

```
-----
26      Thu Jul 10 09:40:46 2008  ActDir  Log      minor
      (ActDir) authentication status: auth-OK
25      Thu Jul 10 09:40:46 2008  ActDir  Log      minor
      (ActDir) server-authenticate: auth-success idx 100/0
dns-server 10.8.143 .231
24      Thu Jul 10 09:40:46 2008  ActDir  Log      debug
      (ActDir) custRoles
23      Thu Jul 10 09:40:46 2008  ActDir  Log      debug
      (ActDir) role-name administrator
```

イベントログ詳細の構成に関する詳細は、[113 ページの「Oracle ILOM イベントログリストのスクロール、終了、クリア」](#)を参照してください。

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) の構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
LDAP の設定を管理するための手順	87 ページの「LDAP サーバーの構成 (CLI)」 88 ページの「LDAP 用の Oracle ILOM の構成 (CLI)」	- x86 システムサーバー SP - SPARC システムサーバー SP - CMM

▼ LDAP サーバーの構成 (CLI)

始める前に

- LDAP を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- Oracle ILOM に対して認証するユーザーアカウントのパスワードが、GNU 拡張機能を使用した **crypt** 形式であることを確認します (一般に、**MD5 crypt** と呼ばれます)。Oracle ILOM では、次の 2 種類の暗号化形式のいずれかで保存したパスワードの LDAP 認証のみをサポートしています。
 - userPassword: {CRYPT}ajCa2He4PJhNo
 - userPassword: {CRYPT}\$1\$pzKng1\$du1Bf0NWBjh9t3FbUgf46.
 - オブジェクトクラス **posixAccount** および **shadowAccount** を追加し、このスキーマ (RFC 2307) に必要なプロパティー値を入力します。

必須プロパティー	説明
uid	Oracle ILOM にログインするためのユーザー名

必須プロパティ	説明
uidNumber	任意の一意の数字
gidNumber	任意の一意の数字
userPassword	パスワード
homeDirectory	任意の値 (このプロパティは、Oracle ILOM では無視されます)
loginShell	任意の値 (このプロパティは、Oracle ILOM では無視されます)

- 3 **LDAP** サーバーを構成して、**Oracle ILOM** のユーザーアカウントにアクセスできるようにします。

LDAP サーバーが匿名バインドを許可するようにするか、または LDAP サーバーにプロキシユーザーを作成します。LDAP サーバーは、Oracle ILOM により認証されるすべてのユーザーアカウントに読み取り専用アクセスができます。

詳細は、LDAP サーバーのドキュメントを参照してください。

▼ **LDAP 用の Oracle ILOM の構成 (CLI)**

始める前に

- LDAP を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。

- 2 **LDAP** ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。

- サーバー **SP** の場合、次のように入力します。

-> **cd /SP/clients/ldap**

- **CMM** の場合、次のように入力します。

-> **cd /CMM/clients/ldap**

- 3 プロキシユーザー名とパスワードを入力するには、次のように入力します。

-> **set binddn="cn=proxyuser, ou=people, ou=sales, dc=oracle, dc=com" bindpw=password**

- 4 **LDAP** サーバーの IP アドレスを入力するには、次のように入力します。

-> **set address=[ldapipaddress | DNS name]**

注-DNS 名を使用する場合、DNS は構成済みで機能している必要があります。

- 5

LDAP サーバーとの通信に使用するポートを割り当てるには、次のように入力します。

-> **set port=ldapport**

デフォルトのポートは 389 です。
- 6

ユーザーとグループを含む LDAP ツリー分岐の識別名を入力するには、次のように入力します。

-> **set searchbase="ou=people, ou=sales, dc=oracle, dc=com"**

これは、ユーザー認証を検索する LDAP ツリーの場所です。
- 7

LDAP サービスの状態を **enabled** に設定するには、次のように入力します。

-> **set state=enabled**
- 8

LDAP 認証の動作を確認するには、LDAP ユーザー名とパスワードを使用して、**Oracle ILOM** にログインします。

注 - Oracle ILOM は、LDAP ユーザーの前にローカルユーザーを検索します。LDAP ユーザー名がローカルユーザーとして存在する場合は、Oracle ILOM は認証にローカルアカウントを使用します。

LDAP/SSL の構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
LDAP/SSL の設定を構成するための手順	■ 89 ページの「LDAP/SSL strictcertmode の有効化」 ■ 90 ページの「LDAP/SSL certstatus の確認」 ■ 91 ページの「LDAP/SSL 証明書の削除 (CLI)」 ■ 92 ページの「LDAP/SSL 設定の表示と構成 (CLI)」 ■ 96 ページの「LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM

▼ LDAP/SSL strictcertmode の有効化

始める前に

- LDAP/SSL を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

注- デフォルトでは、`strictcertmode` は無効です。この変数が無効になっている場合、チャンネルはセキュアですが、証明書に対して限定的な検証が実行されます。`strictcertmode` が有効になっている場合は、サーバーの証明書が提供されたときに証明書の署名を検証できるように、サーバーの証明書がサーバーにすでにアップロードされている必要があります。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 LDAP/SSL ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> `cd /SP/clients/ldapssl`
 - **CMM** の場合、次のように入力します。
-> `cd /CMM/clients/ldapssl`
- 3 証明書をロードするには、次のように入力します。
-> `set cert load_uri=[tftp|ftp|scp]://IP address/file-path/filename`

注- TFTP、FTP、または SCP を使用して証明書をロードできます。

- 4 **strictcertmode** を有効にするには、次のように入力します。
-> `set strictcertmode=enabled`

▼ LDAP/SSL certstatus の確認

注- `strictcertmode` が無効になっている場合、`certstatus` は、証明書の現在の状態を反映する操作変数です。ただし、`strictcertmode` が有効になっている場合は、証明書をロードする必要があります。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 証明書のステータスを確認するには、**show** コマンドを使用します。
 - サーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> `show /SP/clients/ldapssl/cert`

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CMM/clients/ldapssl/cert**

例:

-> **show /SP/clients/ldapssl/cert**

Targets:

Properties:

```
certstatus = certificate present
clear_action = (none)
issuer = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration Certificates
load_uri = (none)
serial_number =
08:f23:2e:c0:8c:12:cd:bb:4e:7e:82:23:c4:0d:22:60
subject = /C=US/O=Entrust PKI Demonstration
Certificates/OU=Entrust/Web Connector/OU=No Liability as per
http://freecerts.entrust
valid_from = Oct 25 22:18:26 2006 GMT
valid_until = Oct 25 22:18:26 2011 GMT
version = 3 (0x02)
```

▼ LDAP/SSL 証明書の削除 (CLI)

始める前に

- LDAP/SSL を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

注- 認証サーバー証明書を削除するには、strictcertmode が無効である必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 LDAP/SSL 証明書ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/clients/ldapssl/cert**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/clients/ldapssl/cert**
- 3 証明書を削除するには、次のように入力します。
-> **set clear_action=true**
Are you sure you want to clear /SP/clients/ldapssl/cert (y/n)? **y**

▼ LDAP/SSL 設定の表示と構成 (CLI)

始める前に

- LDAP/SSL を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

注 - optionalUserMapping ターゲットを表示および構成するには、Oracle ILOM 3.0.4 以降のバージョンの Oracle ILOM を使用している必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 LDAP/SSL ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/clients/ldapssl**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/clients/ldapssl**
- 3 **admingroups** ターゲット内の LDAP/SSL プロパティを表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **admingroups** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。
-> **show admingroups/n**

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show /SP/clients/ldapssl/admingroups/1
/SP/clients/ldapssl/admingroups/1
Targets:
Properties: name = CN=SpSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=
east,DC=oracle,DC=com
```

- **admingroups** ターゲット内の情報を変更するには、次のように入力します。
-> **set admingroups/n property=value**

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> set admingroups/1/ name=CN=spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=
oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,
DC=com'
```

- 4 **opergroups** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **opergroups** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

-> **show opergroups/*n***

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show opergroups/1
/SP/clients/ldapssl/opergroups/1
Targets:
Properties: name = CN=SpSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=
east,DC=oracle,DC=com
```

- **opergroups** ターゲット内の **name** プロパティを変更するには、次のように入力します。

-> **set opergroups/*n* name=value**

例:

```
-> set name=CN=spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperOper,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=
com'
```

- 5 **customgroups** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **customgroups** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

-> **show customgroups/*n***

例:

```
-> show customgroups/1
/SP/clients/ldapssl/customgroups/1
Targets:

Properties:
  name = <fully qualified distinguished name
only>
  roles = (none)

Commands:
  cd
  set
  show
```

- **customgroups** ターゲット内のプロパティを変更するには、次のように入力します。

-> **set customgroups/*n* property=value**

例:

```
-> set customgroups/1 name=CN=spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=
oracle,DC=com
Set 'name' to 'CN=spSuperCust,OU=Groups,DC=sales,DC=oracle,DC=
com'
-> set customgroups/1 roles=au
Set 'roles' to 'au'
```

- 6 **userdomains** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **userdomains** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

```
-> show userdomains/n
```

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show userdomains/1
Targets:

Properties:
  domain = uid=<USERNAME>,ou=people,dc=oracle,dc=com

Commands:
  cd
  set
  show
```

- **userdomains** ターゲット内の **domain** プロパティを変更するには、次のように入力します。

```
-> set userdomains/n domain=value
```

例:

```
-> set userdomains/1 domain=uid=<USERNAME>, ou=people,dc=
oracle, dc=oracle
```

注 - 前の例で、<USERNAME> は、認証時にユーザーのログイン名に置き換えられます。名前には、完全修飾ドメイン名 (Fully Qualified Domain Name、FQDN) の形式を使用できます。

- 7 **alternateservers** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **alternateservers** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

```
-> show alternateservers/n
```

ここでは、*n* には 1 - 5 の整数を指定できます。

例:

```
-> show alternateservers/1

/SP/clients/ldapssl/alternateservers/1
Targets:
  cert

Properties:
  address = 10.8.168.99
  port = 0
```

注-前の例で、address には、IP アドレスまたは DNS 名のいずれかを指定できます。DNS を使用する場合は、DNS が有効である必要があります。DNS の有効化の詳細については、51 ページの「DNS 設定の表示と構成 (CLI)」を参照してください。

- **alternateservers** ターゲット内のプロパティを変更するには、次のように入力します。

```
-> set alternateservers/n property=value
```

例:

```
-> set /SP/clients/ldapssl/alternateservers/1 port=636
```

- 8 **alternateservers** 証明書ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- 代替サーバーの証明書をコピーするには、次のように入力します。

```
-> set alternateservers/n/cert
load_uri=[tftp|ftp|scp]:[username:password@]//[ipAddress|HostName]/filePath/fileName
```

次は、TFTP を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set load_uri=tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert
Set 'load_uri' to 'tftp://10.8.172.152/sales/cert.cert'
```

注-TFTP 転送方法では、ユーザー名とパスワードは不要です。

次は、FTP を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set load_uri=
ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert
Set 'load_uri' to
'ftp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/8275_put/cert.cert'
```

次は、SCP を使用してコピーした証明書の例です。

```
-> set load_uri=.cert
scp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/home/dc150698/8275_put/cert
.cert
```

```
Set 'load uri' to
'scp://sales:XpasswordX@129.148.185.50/home/dc150698/8275_put/cert.
t.cert'
```

- 代替サーバーの証明書を削除するには、次のように入力します。

```
-> set clear_action=true
```

例:

```
-> set clear_action=true
Are you sure you want to clear /SP/clients/ldapssl/cert (y/n)? y
Set 'clear_action' to 'true'
```

- 9 **optionalUserMapping** ターゲット内の情報を表示および変更するには、**show** および **set** コマンドを使用します。

- **optionalUserMapping** ターゲット内の情報を表示するには、次のように入力します。

```
-> show optionalUserMapping
```

例:

```
-> show optionalUserMapping
Targets:

Properties:
  attributeInfo = (&(objectclass=person)(uid=<USERNAME>))
  binddn = cn=Manager,dc=oracle,dc=com
  bindpw = (none)
  searchbase = ou=people,dc=oracle,dc=com
  state = disabled

Commands:
  cd
  set
  show
```

- **optionalUserMapping** ターゲット内のプロパティを変更するには、次のように入力します。

```
-> set property=value
```

例:

```
-> set state=enabled
Set 'state' to 'enabled'
```

▼ LDAP/SSL の認証と承認のトラブルシューティング (CLI)

始める前に

- LDAP/SSL を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 LDAP/SSL ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/clients/ldapssl**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/clients/ldapssl**
- 3 LDAP/SSL 認証モジュールのデバッグイベントレベルを **trace** に設定するには、次のように入力します。
-> **set logdetail=trace**
- 4 Oracle ILOM CLI からログアウトしてもう一度ログインして、もう一度承認します。
- 5 承認に関するイベントログ出力を表示するには、**show** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **show /SP/logs/event/list Class==ldapssl Type==Log**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **show /CMM/logs/event/list Class==ldapssl Type==Log**

例:

```
-> show /SP/logs/event/list Class==ldapssl Type==Log Severity==Trace
```

ID	Date/Time	Class	Type	Severity
3155	Thu Nov 13 06:21:00 2008	LdapSsl	Log	critical
	(LdapSSL) authentication status: auth-ERROR			
3154	Thu Nov 13 06:21:00 2008	LdapSsl	Log	major
	(LdapSSL) server-authenticate: auth-error idx 0 cfg-server 10.8.xxx.xxx			
3153	Thu Nov 13 06:21:00 2008	LdapSsl	Log	major
	(LdapSSL) ServerUserAuth - Error 0, error binding user to ActiveDirectory server			

イベントログの詳細の構成については、113 ページの「Oracle ILOM イベントログリストのスクロール、終了、クリア」を参照してください。

RADIUS の構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
RADIUS の設定を構成するための手順	■ 98 ページの「RADIUS の構成 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM

▼ RADIUS の構成 (CLI)

始める前に

- RADIUS を設定するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。
- RADIUS サーバーを正しく構成したあとは、RADIUS 認証を使用して、10 より多くのローカルユーザーアカウントに Oracle ILOM へのアクセスを提供できます。

- 1 使用している **RADIUS** 環境に関する適切な情報を収集します。
- 2 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 3 **RADIUS** ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/clients/radius**
 - **CMM** の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/clients/radius**
- 4 **RADIUS** プロパティを表示するには、次のように入力します。
-> **show**

例:

```
-> show
/SP/clients/radius
Targets:

Properties:
  defaultrole = Operator
  address = 129.144.36.142
  port = 1812
  secret = (none)
  state = enabled
```

Commands:
cd
set
show

5 次の表に示されている RADIUS プロパティを構成するには、次のように入力します。

```
-> set [defaultrole=[Administrator|Operator|a|u|c|r|o|s]  
address=radius_server_IPaddress port=port# secret=radius_secret  
state=[enabled|disabled]]
```

例:

```
-> set /SP/clients/radius state=enabled address=10.8.145.77  
Set 'state' to 'enabled'  
Set 'address' to '10.8.145.77'
```

プロパティ (CLI)	デフォルト	説明
state	Disabled	Enabled Disabled RADIUS クライアントを有効にするか無効にするかを指定します。
defaultrole a u c r o s Administrator Operator	Operator	Administrator Operator <i>Advanced Roles</i> 認証されたすべての RADIUS ユーザーに付与されるアクセスの役割。このプロパティは、旧バージョンの Administrator または Operator の役割、あるいは a、u、c、r、o、および s の個々の役割 ID の任意の組み合わせをサポートします。たとえば aucros の場合、a=Admin、u=User Management、c=Console、r=Reset and Host Control、および s=Service です。
ipaddress	0.0.0.0	RADIUS サーバーの IP アドレスまたは DNS 名。DNS 名を使用する場合は、DNS が構成され機能していなければなりません。
port	1812	RADIUS サーバーとの通信に使用するポート番号を指定します。デフォルトのポートは 1812 です。
secret	(なし)	機密データを保護しクライアントとサーバーの相互認識を可能にするために使われる共有シークレットを指定します。

コンポーネントのステータスと保守処理の管理 (CLI)

説明	リンク
システムコンポーネントのステータスと保守処理を管理するための CLI 手順	■ 102 ページの「コンポーネントの取り外しの準備 (CLI)」 ■ 103 ページの「コンポーネントのサービスへの復帰 (CLI)」 ■ 103 ページの「コンポーネントの状態の有効化と無効化 (CLI)」 ■ 104 ページの「障害の表示およびクリア (CLI)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、障害管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、システムコンポーネントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理』、システムコンポーネントの情報の管理

▼ コンポーネント情報の表示 (CLI)

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 コンポーネントのインベントリ情報を表示するには、**show** コマンドを使用します。
 - ラック搭載型サーバーコンポーネントの場合、次のように入力します。
-> **show /SYS/component_name**
 - シャーシコンポーネントの場合、次のように入力します。
-> **show /CH/component_name**

例:

```
-> show /SYS/MB type
Targets:
.
```

```
.
Properties:
  type = Motherboard
  ipmi_name = MB
  fru_name = MB
  fru_description = BD, ASY, MB
.
.
.

Commands:
  cd
  set
  show
```

インベントリ情報を表示するプロパティのリストを次に示します。表示できるプロパティは、使用するターゲットの種類によって異なります。

- fru_part_number
- fru_manufacturer
- fru_serial_number
- fru_name
- fru_description
- fru_version
- chassis_serial_number
- chassis_part_number
- product_name
- product_serial_number
- product_part_number
- customer_frudata

▼ コンポーネントの取り外しの準備 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM でコンポーネントを取り外す準備をするには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。

シャーシのコンポーネントの取り外しを準備するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 コンポーネントを取り外す準備をするには、次のように入力します。

-> **set target prepare_to_remove_action=true**

例:

```
-> set /CH/RFM0 prepare_to_remove_action=true
Set 'prepare_to_remove_action' to 'true'
```

コンポーネントを取り外す準備ができれば、物理的に取り外せるようになっているかどうかを確認できます。

- 3 コンポーネントが取り外せる状態にあることを確認するには、次のように入力します。

-> **show target prepare_to_remove_status**

例:

```
-> show /CH/RFM0 prepare_to_remove_status
Properties:
  prepare_to_remove_status = [Ready|NotReady]
```

この例の [Ready|NotReady] 文は、デバイスを取り外す準備ができたかどうかを示します。

▼ コンポーネントのサービスへの復帰 (CLI)

始める前に

- コンポーネントのサービスへの復帰を Oracle ILOM に通知するには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。

注- コンポーネントを取り外す準備が完了してから、このアクションを取り消す場合は、リモートで実行できます。

シャーシのコンポーネントをサービスに復帰させるには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 Oracle ILOM コマンドプロンプトで、次のように入力します。

-> **set target return_to_service_action=true**

例:

```
-> set /CH/RFM0 return_to_service_action=true
Set 'return_to_service_action' to 'true'
```

▼ コンポーネントの状態の有効化と無効化 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM でシャーシのコンポーネントの状態を管理するには、Reset and Host Control (r) の役割を有効にする必要があります。

シャーシのコンポーネントの状態を有効または無効にするには、次の手順に従います。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 **Oracle ILOM** コマンドプロンプトで、次のように入力します。

-> **set target component_state=[enabled|disabled]**

例:

-> **set /SYS/MB/CMP0/P0/C0 component_state=enabled**
Set 'component_state' to 'enabled'

▼ 障害の表示およびクリア (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM でレポートされたコンポーネントの障害をクリアするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- サーバー SP または CMM に、Oracle ILOM ファームウェア 3.0.3 以降がインストールされている必要があります。

Oracle ILOM で障害を表示またはクリアするには、次の手順に従います。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 障害が発生したコンポーネントのリストを表示するには、次のように入力します。
 - サーバー SP から、次のように入力します。 -> **show /SP/faultmgmt**
 - CMM から、次のように入力します。 -> **show /CMM/faultmgmt**
- 3 **Oracle ILOM** イベントログの障害メッセージを表示するには、次のように入力します。
 - サーバー SP から、次のように入力します。 -> **show /SP/logs/event/list**
 - CMM から、次のように入力します。 -> **show /CMM/logs/event/list**
- 4 障害が発生したコンポーネントを修復または交換します。
- 5 コンポーネントの障害をクリアするには、次のコマンドを入力します。
-> **set component_path clear_fault_action=true**

ここでは、*component_path* は、障害が発生した次のいずれかのコンポーネントです。

- プロセッサ
- メモリー
- マザーボード
- ファンモジュール
- 電源装置
- CMM
- NEM
- PCIカード

たとえば、プロセッサ0の障害をクリアするには、次のように入力します。

```
-> set /SYS/MB/P0 clear_fault_action=true
Are you sure you want to clear /SYS/MB/P0 (y/n)? y
Set 'clear_fault_action' to 'true'
```


システムセンサーの監視およびイベントログエントリとクロック設定の管理 (CLI)

説明	リンク
システムセンサー、インジケータ、およびログを監視するための CLI 手順	■ 108 ページの「システムセンサー、インジケータ、イベントログの監視 (CLI)」
SP コンソール履歴ログを表示および管理するための CLI 手順	■ 116 ページの「SP コンソールログ出力の表示と管理 (CLI)」
SP クロックのプロパティを設定するための CLI 手順	■ 110 ページの「クロックのプロパティの構成 (CLI)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、システム監視とアラート管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、システムセンサー、インジケータ、イベントログの監視
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理』、インベントリおよびコンポーネントの管理

システムセンサー、インジケータ、イベントログの監視 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
LED とシステムインジケータを表示および構成します	■ 108 ページの「センサー測定値の表示 (CLI)」 ■ 109 ページの「システムステータスインジケータの構成 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM
クロックとタイムゾーンを設定します	■ 110 ページの「クロックのプロパティの構成 (CLI)」	
イベントログをフィルタリング、表示、およびクリアします	■ 112 ページの「Oracle ILOM イベントログリストのフィルタ処理 (CLI)」 ■ 113 ページの「Oracle ILOM イベントログリストのスクロール、終了、クリア」 ■ 115 ページの「リモート syslog 受信側の IP アドレスの構成 (CLI)」	

▼ センサー測定値の表示 (CLI)

センサーの測定値を表示するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 センサーのプロパティを表示するには、**show** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **show /SYS/sensor**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **show /CH/sensor**

ここでは、*sensor* はプロパティを表示するしきい値センサーまたはディスクリットセンサーのターゲットです。

例:

一部の Sun サーバーでは、次のように入力すると、外気の吸気温度測定値を表示できます。

```
-> show /SYS/T_AMB
/SYS/T_AMB
Targets:

Properties:
  type = Temperature
  class = Threshold Sensor
  value = 27.000 degree C
  upper_nonrecov_threshold = 45.00 degree C
  upper_critical_threshold = 40.00 degree C
  upper_noncritical_threshold = 35.00 degree C
  lower_noncritical_threshold = 10.00 degree C
  lower_critical_threshold = 4.00 degree C
  lower_nonrecov_threshold = 0.00 degree C
  alarm_status = cleared
```

一部の Sun サーバーでは、次のように入力すると、ハードドライブがスロット 0 に存在するかどうかを判断できます。

```
-> show /SYS/HDD0_PRSENT
/SYS/HDD0_PRSENT
Targets:

Properties:
  Type = Entity Presence
  Class = Discrete Indicator
  Value = Present

Commands:
  cd
  show
```

管理できるディスクリットセンサーターゲットの種類の詳細は、Sun システムハードウェアに付属するユーザードキュメントを参照してください。

▼ システムステータスインジケータの構成 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM を使用してシステムインジケータの状態を構成するには、User Management (u) の役割を有効にする必要があります。

システムインジケータの状態を構成するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。

- 2 **set** コマンドを使用してシステムインジケータの状態を変更できるかどうかを確認するには、**help** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **help /SYS/status_indicator**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **help /CH/status_indicator**

たとえば、ラック搭載型サーバーでロケータインジケータ LED を構成可能かどうかを確認するには、次のように入力します。

-> **help /SYS/LOCATE**

/SYS/LOCATE : Indicator

Targets:

Properties:

type : Type of component

ipmi_name : IPMI Name of component

value : Value of component.

value : Possible values = On, Off, Standby_Blink,
Slow_Blink, Fast_Blink

value : User role required for set = a

- 3 システムインジケータの状態を変更するには、**set** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **set /SYS/status_indicator property=value**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **set /CH/status_indicator property=value**

使用しているシステムでサポートされているシステムインジケータとそれらにアクセスするためのパスの詳細は、Sun サーバーに付属のユーザードキュメントを参照してください。

▼ クロックのプロパティの構成 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM でクロックのプロパティ値を構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- 次のことを確認する方法については、Oracle Sun プラットフォームサーバーのドキュメントを参照してください。
 - Oracle ILOM の現在の時間が SP をリブートしても維持されるか。

- Oracle ILOM の現在の時間をホストのブート時にホストと同期させることができるかどうか。
- システムが時間を格納するリアルタイムクロック要素をサポートするかどうか。

Oracle ILOM を使用してクロックのプロパティ値を構成するには、次の手順に従います。

- 1 **Oracle ILOM SP CLI** または **CMM CLI** にログインします。
- 2 **clock** ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - サーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/clock**
 - **CMM** の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/clock**
- 3 サーバー **SP** で現在設定されているクロックプロパティの値を表示するには、次のように入力します。
-> **show**
- 4 **Oracle ILOM** クロックプロパティの値を手動で設定するには、次のように入力します。
-> **set property_name=value**
例:
-> **set datetime=MMDDhhmmYYYY**
- 5 サーバー **SP** でのクロックプロパティの値と、ネットワーク上のほかのサーバーを同期するには、次の手順を実行します。
 - a. **NTP** サーバーの IP アドレスを設定するには、**set** コマンドを使用します。
 - サーバー **SP** の場合、次のように入力します。
-> **set /SP/clients/ntp/server/1 address=ip_address**
 - **CMM** の場合、次のように入力します。
-> **set /CMM/clients/ntp/server/1 address=ip_address**

b. NTPの同期を有効にするには、次のように入力します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **set /SP/clock usentpserver=enabled**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **set /CMM/clock usentpserver=enabled**

6 タイムゾーンを設定するには、次のように入力します。

-> **set timezone=UTC/GMT_timezone**

注 - Oracle ILOM は、ホストサーバーの UTC/GMT タイムゾーンに基づいてタイムスタンプを取得します。ただし、別のタイムゾーンに存在するクライアントシステムからイベントログを参照すると、タイムスタンプはクライアントシステムのタイムゾーンに合わせて調整されます。そのため、Oracle ILOM イベントログにある1つのイベントが、2つのタイムスタンプで表示されることがあります。

▼ Oracle ILOM イベントログリストのフィルタ処理 (CLI)

Oracle ILOM イベントログリストをフィルタ処理するには、次の手順に従います。

1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。

2 イベントログターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **cd /SP/logs/event**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **cd /CMM/logs/event**

3 コマンドプロンプトで、次のように入力します。

-> **show list Class==[Audit|IPMI|Chassis|Fault|System|Software]
Type==[Log|State|Action|Fault|Repair]
Severity==[debug|down|critical|major|minor]**

▼ Oracle ILOM イベントログリストのスクロール、終了、クリア

始める前に

- Oracle ILOM イベントログリストを変更するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

Oracle ILOM イベントログを表示またはクリアするには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 イベントログターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - ラック搭載型サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/logs/event**
 - シャーシ内のブレードサーバー SP の場合は、次のように入力します。
-> **cd /CH/BLn/SP/logs/event**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/logs/event**

- 3 イベントログの出力を表示するには、次のように入力します。
-> **show list**

イベントログの内容が表示されます。

例:

```
-> show list
ID      Date/Time                Class      Type      Severity
-----
578      Wed Jun 11 06:39:47 2008  Audit      Log        minor
      user1 : Open Session : object = /session/type : value = shell
      : success
577      Wed Jun 11 06:34:53 2008  Audit      Log        minor
      user1 : Set : object =
      /clients/activedirectory/userdomains/3/domain : value =
      <USERNAME>@joe.customer.example.sun.com : success
576      Wed Jun 11 06:25:06 2008  Audit      Log        minor
      user1 : Open Session : object = /session/type : value =
      www : success
575      Wed Jun 11 06:07:29 2008  Audit      Log        minor
      user1 : Close Session : object = /session/type : value =
      www : success
574      Wed Jun 11 06:02:01 2008  Audit      Log        minor
      root : Set : object =
      /clients/activedirectory/dnslocatorqueries/2/service :
      value = _ldap._tcp.pc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:636> : success
```

```

573   Wed Jun 11 06:01:50 2008   Fault       Fault       critical
      Fault detected at time = Wed Jun 11 06:01:41 2008. The
      suspect component:/CH/PS3/EXTERNAL/AC_INPUT has
      fault.powersupply.no_ac with probability=100 Please consult
      the Sun Blade 8000 Fault Diagnosis Document (Document ID:
      85878) at http://sunsolve.sun.com to determine the correct
      course of action.

```

4 イベントログで、次のいずれかのタスクを実行します。

- リストのエントリをスクロールするには、「q」以外の任意のキーを押します。次の表に、イベントログ内の各列の説明を示します。

列のラベル	説明
Event ID	イベントの番号で、1 番から順に付けられます。
Class/Type	一般的な Class/Type のペアで、次のものが含まれます。 ■ Audit/Log - 構成が変更されるコマンド。説明には、ユーザー、コマンド、コマンドパラメータ、成功と失敗が記述されます。 ■ IPMI/Log - IPMI SEL に記録されたイベントは、管理ログにも記録されます。 ■ Chassis/State - インベントリの変更および全般的なシステム状態の変更。 ■ Chassis/Action - サーバーのモジュール/シャーシの停止イベント、FRU コンポーネントのホットインサート/リムーバブル、および押された「Reset Parameters」ボタンのカテゴリ。 ■ Fault/Fault - 障害管理の障害。説明には、障害が検出された時間と原因と思われるコンポーネントが表示されます。 ■ Fault/Repair - 障害管理の修復。説明にはコンポーネントが表示されます。
Severity	「Debug」、「Down」、「Critical」、「Major」、または「Minor」。
Date/Time	イベントが発生した日付と時間。時間情報プロトコル (NTP) サーバーで Oracle ILOM 時間を設定できる場合、Oracle ILOM クロックは協定世界時 (UTC) を使用します。
説明	イベントの説明。

- イベントログを閉じる (ログの表示を中止する) には、q キーを押します。
- イベントログのエントリをクリアするには、イベントログを閉じて、次のように入力します。

```
-> set clear=true
```

```
Are you sure you want to clear /SPorCMM/logs/event (y/n)? y
```

▼ リモート **syslog** 受信側の IP アドレスの構成 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM でリモート syslog 受信側の宛先 IP アドレスを構成するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

宛先 IP アドレスを構成するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP または CMM にログインします。
- 2 syslog ターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - ラック搭載型サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/clients/syslog/[1|2]**
 - シャーシ内のブレードサーバー SP の場合は、次のように入力します。
-> **cd /CH/BLn/SP/clients/syslog/[1|2]**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/clients/syslog/[1|2]**

- 3 syslog 受信側のプロパティを表示するには、次のように入力します。

-> **show**

たとえば、サーバー SP ではじめて syslog 受信側のプロパティを設定している場合、出荷時のデフォルトプロパティは次のとおりです。

```
-> show
/SP/clients/syslog/1
Targets:

Properties:
  address = 0.0.0.0

Commands:
  cd
  set
  show
```

- 4 IP 1 の宛先 IP アドレスを識別するには(また、該当する場合は IP 2 も)、**set** コマンドを使用します。

たとえば、宛先の IP アドレスを 111.222.33.4 に設定するには、次のように入力します。

```
-> set address=111.222.33.4
Set 'address' to '111.222.33.4'
```

▼ SP コンソールログ出力の表示と管理 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM で SP コンソール出力のプロパティを変更するには、Console (c) の役割を有効にする必要があります。
- x86 サーバーで SP コンソールの履歴ログ出力を表示するには、サーバーが Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 以降を実行している必要があります。
ファームウェアバージョン 3.0.8 より前は、SPARC サーバー SP の Oracle ILOM でのみ SP コンソール履歴ログにアクセスできました。

- 1 Oracle ILOM SP CLI にログインします。
- 2 SP コンソールログターゲット、プロパティ、および使用可能なコマンドを表示するには、**show** コマンドを使用します。

例:

```
-> show /SP/console
/SP/console
  Targets
    history

  Properties
    line_count = 0
    pause_count = 0
    start_from = end

  Commands
    cd
    show
    start
    stop
```

- 3 SP コンソールターゲットおよびプロパティ値の詳細を表示するには、**help** コマンドを使用します。

例:

```
-> help /SP/console
/SP/console : Redirection of console stream to SP
  Targets
    history : console history

  Properties
    line_count : total number of lines to display
    line_count : Possible values = 0-2048 where 0 means no limit
    line_count : User role required for set = c

    pause_count : number of lines to display before each pause
    pause_count : Possible values = 0-2048 where 0 means no limit
    pause_count: User role required for set = c

    start_from : from which end of the available history to list
```

start_from : Possible values = beginning,end
start_from : User role required for set = c

4 SP コンソール履歴ログファイルのプロパティ値を指定するには、次のように入力します。

-> **set /SP/console property=value [property=value] [property=value]**

ここでは、*property* と *value* には、次の表に示すいずれかのパラメータを指定できます。

プロパティ	値	例
line_count	行の値を 0-2048 の範囲で指定できます。0 は無制限を意味します。 注-line_count のデフォルト値は 0 です。	Oracle ILOM に対して、SP コンソールの履歴ログの 4 行を表示するように指定するには、次のように入力します。 -> set /SP/console line_count=4
pause_count	一時停止の値を 0-2048 の範囲で指定できます。0 は、表示を一時停止しないことを意味します。 注-pause_count のデフォルト値は 0 です。	Oracle ILOM で SP コンソールの履歴ログの 4 行を表示し、そのうちの 2 行を表示したら表示を一時停止するように指定するには、次のように入力します。 -> set /SP/console line_count=4 pause_count=2
start_from	次の値を指定できます。 ■ end - 履歴ログの最後の行 (最新)。 ■ beginning - 履歴ログの最初の行。 注-start_from のデフォルト値は end です。	Oracle ILOM で SP コンソールの履歴ログの最初の 4 行を表示し、そのうちの 2 行を表示したら表示を一時停止するように指定するには、次のように入力します。 -> set /SP/console line_count=4 pause_count=2 start_from=beginning

注-SP コンソールの履歴ログに記録されている UTC タイムスタンプは、サーバーに構成されている現地時間です。

ストレージコンポーネントおよび Zone Manager の監視

説明	リンク
x86 Oracle Sun サーバプラットフォームにインストールされているハードドライブおよび RAID コントローラのストレージ詳細を表示するための CLI 手順	■ 119 ページの「x86 サーバでのストレージコンポーネントの監視 (CLI)」
Oracle Sun Blade 6000 および 6048 の Zone Manager 機能についての情報のリファレンス	■ 123 ページの「Sun Blade Zone Manager 機能へのアクセス」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、ストレージ監視
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、ストレージコンポーネントの監視
- 『Oracle Hardware Management Pack ユーザーズガイド』、ソフトウェアダウンロードの入手
- 『Oracle ILOM 3.0 CMM 管理』、Zone Manager

▼ x86 サーバでのストレージコンポーネントの監視 (CLI)

始める前に

- x86 サーバでストレージ監視機能がサポートされていることを確認します。x86 サーバがこれらの機能をサポートするかどうかを確認するには、使用しているサーバ用の管理ガイドまたは Oracle ILOM 補足マニュアルを参照してください。
- x86 サーバが Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 以降を実行していることを確認します。

- Oracle ILOM ストレージ監視機能をはじめて使用する前に、Oracle Hardware Management Pack をダウンロードしてインストールします。Oracle Hardware Management Pack ソフトウェアのダウンロード方法については、『Oracle Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。

ハードドライブおよび RAID コントローラストレージコンポーネントのプロパティの詳細を表示するには、次の手順に従います。

- 1 x86 サーバーの **Oracle ILOM SP CLI** にログインします。
- 2 ストレージコンポーネントターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。
 - ハードドライブストレージコンポーネントを監視するには、次のように入力します。
-> **cd /SYS**
 - RAID コントローラストレージコンポーネントを監視するには、次のように入力します。
-> **cd /STORAGE/raid**
- 3 ストレージコンポーネントのプロパティを表示するには、**show** コマンドを使用します。
 - リモートサーバーにインストールされている特定のハードドライブストレージコンポーネントのストレージの詳細を表示するには、次のように入力します。

-> **show /SYS/target**

ここでは、*target* はハードドライブストレージコンポーネントへのパスです。

たとえば、ハードドライブ 0 のストレージ詳細を表示するには、次のように入力します。

-> **show /SYS/DBP/HDD0**

/SYS/DBP/HDD0

Targets:

OK2RM

PRSNT

SERVICE

Properties:

type = Hard Disk

ipmi_name = DBP/HDD0

fru_name = H101414SCSSUN146G

fru_manufacturer = HITACHI

fru_version = SA25

fru_serial_number = 000852E6LJY P4X6LJYA

controller_id = 0d:00.0

disk_id = 0

capacity = 136

device_name = /dev/sg8


```

disk_type = sata
wnn = 5764832510609242989
raid_status = OK
raid_ids = 0

```

Commands:

```

cd
show

```

- **RAID** コントローラおよび関連するディスク ID についてのプロパティの詳細を表示するには、次の手順を実行します。

- a. 構成されている **RAID** コントローラターゲットのリストを表示するには、次のように入力します。

```

-> show /STORAGE/raid
/STORAGE/raid
Targets:
    controller@0d:00.0

```

Properties:

```

Commands:
    cd
    show

```

- b. コントローラに関連するプロパティの詳細を表示し、構成されている **raid_id** ターゲットのリストを表示するには、次のように入力します。

```

-> show /STORAGE/raid/controller@0d:00.0

```

ここでは、od:00.0 は、コントローラの PCI アドレスに対応する ID です。

例:

```

-> show /STORAGE/raid/controller@0d:00.0
/STORAGE/raid/controller@0d:00.0
Targets:
    raid_id0
    disk_id0
    disk_id1
    disk_id2
    disk_id3
    disk_id4
    disk_id5
    disk_id6
    disk_id7
    raid_id1

```

Properties:

```

fru_manufacturer = Adaptec
fru_model = 0x0285
pci_vendor_id = 36869
pci_device_id = 645
pci_subvendor_id = 645
pci_subdevice_id = 645
raid_levels = 0, 1, 1E, 5, 5EE, 10, 50, Spanned, RAID

```

```
max_disks = 0
max_raids = 24
max_hot_spare = 64
max_global_hot_spare = 64
min_stripe_size = 16
max_stripe_size = 1024
```

- c. 使用可能な **disk_id** ターゲットのリストを表示し、**controller raid_id** に関連するプロパティを表示するには、次のように入力します。

```
-> show /STORAGE/raid/controller@od:00.0/raid_id0
```

可変部分:	説明:
od:00.0	システムにインストールされていることが確認されたコントローラの PCI アドレスです
raid_id0	コントローラで構成されているターゲット RAID ディスクです

例:

```
-> show /STORAGE/raid/controller@0d:00.0/raid_id0
/STORAGE/raid/controller@0d:00.0/raid_id0
Targets:
  disk_id0

Properties:
  level = Simple
  status = OK
  disk_capacity = 136
  device_name = /dev/sda
  mounted = true

Commands:
  cd
  show
```

- d. コントローラ上の **raid_id** に関連する **disk_id** のプロパティの詳細を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /STORAGE/raid/controller@od:00.0/raid_id0/disk_id0
```

可変部分:	内容:
od:00.0	システムにインストールされていることが確認されたコントローラの PCI アドレスです
raid_id0	コントローラで構成されているターゲット RAID ディスクです。
disk_id0	raid_id に関連するターゲットディスクです。

例:

```
-> show /STORAGE/raid/controller@0d:00.0/raid_id0/disk_id0
/STORAGE/raid/controller@0d:00.0/raid_id0/disk_id0
Target:

Properties:
  fru_manufacturer = HITACHI
  fru_serial_number = 000852E6LJYA      P4X6LJYA
  fru_version = SA25
  status = OK
  capacity = 136
  device_name = /dev/sg8
  disk_type = sata
  wwn = 5764832510609242989
  raid_ids = 0
  system_drive_slot = /SYS/DBP/HDD0

Commands:
  cd
  show
```

- 4 CLIを終了するには、次のように入力します。

```
-> exit
```

Sun Blade Zone Manager 機能へのアクセス

Oracle Sun Blade 6000 または Sun Blade 6048 モジュラーシステムを使用している場合、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 から新しいゾーン管理機能が追加されています。ゾーン管理機能は、Oracle Sun Blade 6000 または Sun Blade 6048 モジュラーシステムにインストールされている SAS-2 ストレージデバイスに対して使用できます。Oracle ILOM で SAS-2 シャーシストレージデバイスを管理する方法の詳細については、『Oracle ILOM 3.0 CMM 管理ガイド - Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』を参照してください。

システムアラートの管理 (CLI)

説明	リンク
アラートルール構成を管理するための CLI 手順	■ 125 ページの「アラートルール構成の管理 (CLI)」
アラートルール管理用 CLI コマンドの例	■ 129 ページの「CLI コマンド: アラートルール」
SMTP 電子メールサーバーを構成するための CLI 手順	■ 132 ページの「SMTP クライアントの構成 (CLI)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、システム監視とアラート管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、システムアラートの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理』、インベントリおよびコンポーネントの管理

アラートルール構成の管理 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
必要条件を確認します。	■ 126 ページの「アラートルールの設定要件 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP
アラート構成を構成します。	■ 126 ページの「アラートルールの作成または編集 (CLI)」 ■ 128 ページの「アラートルールの無効化 (CLI)」	■ CMM
テストアラートを生成して、アラート構成が機能していることを確認します。	■ 128 ページの「テストアラートの有効化 (CLI)」	
電子メールでシステムアラートを受信者に通知します。	■ 132 ページの「SMTP クライアントの構成 (CLI)」	

アラートルールの設定要件 (CLI)

- 電子メール通知アラートを定義する場合は、送信電子メールサーバーを Oracle ILOM で構成する必要があります。送信電子メールサーバーが構成されていないと、Oracle ILOM は正常に電子メール通知を生成できません。詳細は、[132 ページの「SMTP クライアントの構成 \(CLI\)」](#)を参照してください。
- SNMPv3 トラップアラートを定義するときは、SNMP ユーザー名を SNMP ユーザーとして定義する必要があります。ユーザーが SNMP ユーザーとして定義されていないと、SNMPv3 アラートの受信者は SNMP アラートメッセージを復号化できません。
- Oracle ILOM アラートルール構成を管理するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- Oracle ILOM からテスト電子メールアラートを発行するには、プラットフォームサーバーまたは CMM で Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降のバージョンのファームウェアを実行している必要があります。
- [129 ページの「CLI コマンド: アラートルール」](#)を確認してください。

▼ アラートルールの作成または編集 (CLI)

始める前に

- 次の手順を実行する前に、[126 ページの「アラートルールの設定要件 \(CLI\)」](#)を確認してください。

Oracle ILOM CLI を使用してアラートルールを構成するには、次の手順を実行します。

- 1 サーバー SP または CMM で Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 アラートルールターゲットに移動するには、`cd` コマンドを使用します。
 - ラック搭載型サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> `cd /SP/alertmgmt/rules/n`
 - ブレードサーバーモジュールの場合、次のように入力します。
-> `cd /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules/n`
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> `cd /CMM/alertmgmt/rules/n`

- 3 アラートルールと関連付けられたプロパティを表示するには、次のように入力します。

```
-> show
例:
-> show
/SP/alertmgmt/rules/1

Properties:
  community_or_username = public
  destination = 172.31.250.251
  level = minor
  snmp_version = 1
  type = snmptrap
```

- 4 アラートルールのプロパティに値を割り当てるには、次のように入力します。

```
-> set property=value
アラートルールのプロパティを、次の表に示します。
```

プロパティ	説明
level	critical、major、minor、down、disable
type	ipmipet、snmptrap、email ■ 指定するアラートの種類が ipmipet の場合は、IPMI Pet 宛先アドレスを定義する必要があります。 ■ 指定するアラートの種類が snmptrap の場合は、SNMP 宛先アドレスとポート、および SNMP のバージョンと、SNMP テストアラートの受信を認証するコミュニティ名を定義する必要があります。 ■ 指定するアラートの種類が email の場合は、宛先電子メールアドレスを定義する必要があります。 注-指定できる destination アドレスは、アラートルールの種類ごとに1つです。
destination	SNMP トラップの IP/ホスト名、IPMI PET の IP アドレス、電子メールのアドレス

たとえば、アラートの種類として email を設定するには、次のように入力します。

```
-> set type=email
電子メールアラートを特定の電子メールアドレスに送信するには、次のように入力します。
```

-> **set destination=example@example.com**

ここでは、example@example.com は宛先電子メールアドレスです。

注 - 電子メール通知の宛先用に、SMTP クライアントを構成する必要があります。手順については、[132 ページの「SMTP クライアントの構成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

アラートルールに指定できるプロパティ値の詳細は、『Oracle ILOM 3.0 日常的管理 - 概念ガイド』のアラート管理についてのセクションを参照してください。

▼ アラートルールの無効化 (CLI)

始める前に

- 次の手順を実行する前に、[126 ページの「アラートルールの設定要件 \(CLI\)」](#)を確認してください。

アラートルールを無効にするには、次の手順に従います。

- 1 サーバー SP または CMM で Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 アラートルールターゲットに移動するには、**cd** コマンドを使用します。

- ラック搭載型サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **cd /SP/alertmgmt/rules/n**

- ブレードサーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **cd /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules/n**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **cd /CMM/alertmgmt/rules/n**

ここでは、BLn はシャーシ内のブレードサーバーモジュールの場所、n はアラートルールの番号です。アラートルールには、1 - 15 の番号を付けることができます。

- 3 アラートルールの構成を無効にするには、次のように入力します。

-> **set level=disable**

▼ テストアラートの有効化 (CLI)

始める前に

次の手順を実行する前に、126 ページの「アラートルールの設定要件 (CLI)」を確認してください。

次の手順に従って、テストアラートを有効にします。

- 1 サーバー SP または CMM で Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 アラートルールターゲットに移動するには、`cd` コマンドを使用します。

- ラック搭載型サーバーの場合、次のように入力します。

-> `cd /SP/alertmgmt/rules/n`

- ブレードサーバーモジュールの場合、次のように入力します。

-> `cd /CH/BLn/SP/alertmgmt/rules/n`

- CMM の場合、次のように入力します。

-> `cd /CMM/alertmgmt/rules/n`

ここでは、BLn はシャーシ内のブレードサーバーモジュールの場所、n はアラートルールの番号です。アラートルールには、1 - 15 の番号を付けることができます。

- 3 アラートルールの構成に対するテストアラートを有効にするには、次のように入力します。

-> `set testalert=true`

CLI コマンド: アラートルール

次の表は、Oracle ILOM CLI を使ってアラートルール構成を管理する場合に、使用する必要のある CLI コマンドを示しています。

表 15 アラートルール構成を管理するための CLI コマンド

CLI コマンド	説明
show	show コマンドを使用すると、フルパスまたは相対パスのいずれかを指定して、任意のレベルのアラート管理コマンドツリーを表示できます。 例: - フルパスを使用して最初のアラートルールのプロパティをすべて表示するには、次のように入力します。 -> show /SPorCMM/alertmgmt/rules/1 /SPorCMM/alertmgmt/rules/1 Properties: community_or_username = public destination = 172.16.132.251 level = minor snmp_version = 1 type = snmptrap Commands: cd set show - フルパスを使用して最初のアラートルールの type プロパティだけを表示するには、次のように入力します。 -> show /SPorCMM/alertmgmt/rules/1 type /SPorCMM/alertmgmt/rules/1 Properties: type = snmptrap Commands: set show

表 15 アラートルール構成を管理するための CLI コマンド (続き)

CLI コマンド	説明
	■ 現在のツリーの場所が /SP/alertmgmt/rules である場合、相対パスを使用して最初のアラートルールのプロパティをすべて表示するには、次のように入力します。 -> show 1 /SP/alertmgmt/rules/1 Targets: Properties: community_or_username = public destination = 129.148.185.52 level = minor snmp_version = 1 type = snmptrap Commands: cd set show
cd	cd コマンドを使用すると、作業用ディレクトリを設定できます。 たとえば、サーバー SP の作業用ディレクトリとしてアラート管理を設定するには、次のように入力します。 -> cd /SP/alertmgmt
set	set コマンドを使用すると、ツリー内の任意の場所からプロパティの値を設定できます。ツリー内の場所に応じて、プロパティのフルパスまたは相対パスのいずれかを指定できます。 例: ■ フルパスを使用して最初のアラートルールのアラートの type を ipmipet に設定するには、次のように入力します。 -> set /SPorCMM/alertmgmt/rules/1 type=ipmipet ■ 現在のツリーの場所が /SP/alertmgmt である場合、相対パスを使用して最初のアラートルールのアラートの type を ipmipet に設定するには、次のように入力します。 -> set rules/1 type=ipmipet ■ 現在のツリーの場所が /SP/alertmgmt/rules/1 である場合、相対パスを使用して最初のアラートルールのアラートの type を ipmipet に設定するには、次のように入力します。 -> set type=ipmipet

▼ SMTP クライアントの構成 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM CLI で SMTP クライアントを有効にするには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- SMTP クライアントの機能には、x86 システムサーバー SP、SPARC システムサーバー SP、Sun ブレード CMM の各 Oracle デバイスの Oracle ILOM CLI からアクセスできます。
- 構成済みの電子メール通知アラートを生成するには、Oracle ILOM クライアントが SMTP クライアントとして動作し、電子メールアラートメッセージを送信できるようにする必要があります。

Oracle ILOM クライアントを SMTP クライアントとして有効にする前に、電子メール通知を処理する送信 SMTP 電子メールサーバーの IP アドレスとポート番号を指定しておく必要があります。

SMTP クライアントを有効にするには、次の手順に従います。

- 1 サーバー SP または CMM で **Oracle ILOM CLI** にログインします。
- 2 **cd** コマンドを使用して、**/clients/smtp** 作業用ディレクトリに移動します。
 - ラック搭載型サーバーの場合、次のように入力します。
-> **cd /SP/clients/smtp**
 - ブレードサーバーモジュールの場合、次のように入力します。
-> **cd /CH/BLn/SP/clients/smtp**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **cd /CMM/clients/smtp**
- 3 SMTP クライアントのプロパティを表示するには、次のように入力します。

-> **show**

例:

```
-> show
/SP/clients/smtp
Targets:
Properties:
  address = 0. 0. 0. 0
  port = 25
  state = enabled
Commands:
  cd
  set
  show
```

- 4 SMTPクライアントの **IP address** を指定したり、**port** または **state** プロパティ値を変更したりするには、次のように入力します。

-> **set** *property=value*

たとえば、222.333.44.5 を IP アドレスに割り当てるには、次のように入力します。

-> **set address=222.333.44.5**

電力監視およびハードウェアインタフェースの管理

説明	リンク
Oracle ILOM ファームウェアのポイントリリースごとの電力の監視および管理機能の更新	■ 135 ページの「電力管理機能の更新のサマリー (CLI)」
ハードウェアインタフェースの電力の監視および管理のための CLI 手順	■ 137 ページの「システムの消費電力の監視 (CLI)」 ■ 144 ページの「電力ポリシーおよび通知しきい値の構成 (CLI)」 ■ 147 ページの「コンポーネント割り当て配電の監視 (CLI)」 ■ 153 ページの「電力制限プロパティの構成 (CLI)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念』、消費電力
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、消費電力の監視と管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理』、消費電力の監視と管理

電力管理機能の更新のサマリー (CLI)

次の表では、Oracle ILOM 3.0 以降に行われた代表的な電力管理機能の拡張とドキュメントの更新内容を示します。

表 16 Oracle ILOM ファームウェアのポイントリリースごとの電力管理機能の更新

新機能または拡張された機能	ファームウェアのポイントリリース	ドキュメントの更新	更新された CLI 手順の参照先
消費電力メトリックを監視する	Oracle ILOM 3.0	■ 消費電力メトリックの新しい用語および定義 ■ 新しい「System Monitoring」-->「Power Management」消費電力メトリックのプロパティ ■ デバイスの消費電力を監視するための新しい CLI 手順と Web 手順を追加	■ 137 ページの「システムの消費電力の監視 (CLI)」

表 16 Oracle ILOM ファームウェアのポイントリリースごとの電力管理機能の更新 (続き)

新機能または拡張された機能	ファームウェアのポイントリリース	ドキュメントの更新	更新された CLI 手順の参照先
電力ポリシープロパティを構成する	Oracle ILOM 3.0	■ 新しい電力ポリシープロパティについての説明 ■ 電力ポリシーを構成するための新しい CLI 手順と Web 手順を追加	■ 144 ページの「電力ポリシーおよび通知しきい値の構成 (CLI)」
消費電力履歴を監視する	Oracle ILOM 3.0.3	■ 新しい消費電力履歴メトリック ■ 消費電力を監視するための新しい CLI 手順と Web 手順を追加	■ 142 ページの「消費電力履歴の監視 (CLI)」
消費電力通知しきい値を構成する	Oracle ILOM 3.0.4	■ 新しい消費電力通知しきい値の設定 ■ 消費電力しきい値を構成するための新しい CLI 手順と Web 手順を追加	■ 144 ページの「電力ポリシーおよび通知しきい値の構成 (CLI)」
割り当て配電メトリックを監視する	Oracle ILOM 3.0.6	■ 新しいコンポーネント割り当てメトリック ■ 電力割り当てを監視するための新しい CLI 手順と Web 手順を追加 ■ ブレードスロットの許容電力を構成するための新しい CLI 手順と Web 手順を追加	■ 147 ページの「コンポーネント割り当て配電の監視 (CLI)」
電力割当量プロパティを構成する	Oracle ILOM 3.0.6	■ 新しい電力割当量プロパティ ■ 電力割当量プロパティを構成するための新しい CLI 手順と Web 手順を追加	■ 153 ページの「電力制限プロパティの構成 (CLI)」
CMM システムの電源冗長性プロパティを構成する	Oracle ILOM 3.0.6	■ CMM の新しい電源冗長性プロパティ ■ CMM の電源冗長性プロパティを構成するための新しい CLI 手順と Web 手順を追加	■ 157 ページの「CMM の電源冗長性プロパティの管理 (CLI)」
CMM 電力管理用の CLI を更新する	Oracle ILOM 3.0.10	■ 電力管理のための新しい最上位タブを Oracle ILOM Web インタフェースに追加 ■ CMM 用の改定された CLI コマンド ■ CMM の Oracle ILOM Web インタフェースから「Power Management Metrics」タブを削除 ■ ブレードスロットの許可制限 (以前の割り当て可能電力) を構成するための CLI 手順を更新	■ 151 ページの「Oracle ILOM 3.0.10 でのブレードスロットの許容電力または予約電力の表示 (CLI)」 ■ 152 ページの「Oracle ILOM 3.0.10 でのブレードの許容電力または許可制限の表示 (CLI)」 ■ 157 ページの「Oracle ILOM 3.0.10 でのブレードサーバーへの CMM 許可制限の設定 (CLI)」

システムの消費電力の監視 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
システムの消費電力監視の必要条件	■ 137 ページの「要件 - 消費電力の監視 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM
消費電力監視の CLI 手順	■ 138 ページの「システムの合計消費電力の監視 (CLI)」 ■ 139 ページの「実際の消費電力の監視 (CLI)」 ■ 139 ページの「個々の電源装置の消費電力の監視 (CLI)」 ■ 140 ページの「使用可能な電力の監視 (CLI)」 ■ 141 ページの「サーバーハードウェアの最大消費電力の監視 (CLI)」 ■ 141 ページの「許容消費電力の監視 (CLI)」	
消費電力履歴監視の CLI 手順	■ 142 ページの「消費電力履歴の監視 (CLI)」	

要件 - 消費電力の監視 (CLI)

このセクションで説明されている手順を開始する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- 使用しているサーバーまたは CMM で Oracle ILOM の消費電力機能がサポートされているかどうかを確認するには、そのサーバーまたは CMM 用に提供されている管理ガイドまたは Oracle ILOM 補足マニュアルを参照してください。
- Oracle ILOM で提供されている消費電力メトリックを表示するには、サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0 以降が実行されている必要があります。
- Oracle ILOM で提供されている消費電力履歴にアクセスするには、サーバーで Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.3 以降が実行されている必要があります。

注 - 消費電力履歴には、Oracle ILOM CLI および Web インタフェースからのみアクセスできます。

- プラットフォームサーバーによっては、付加的な電力メトリックが /SP/powermgmt/advanced ノード以下で提供される場合があります。使用しているシステムが付加的な電力メトリックをサポートしているかどうかを判断するには、使用しているサーバー用の Oracle ILOM の補足マニュアルまたは管理ガイドを参照してください。
- 手順で使用されている電力監視関連の用語の定義については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』の電力監視の用語に関するセクションを参照してください。

▼ システムの合計消費電力の監視 (CLI)

始める前に

137 ページの「要件 - 消費電力の監視 (CLI)」を確認してください。

システムの消費電力の合計を監視するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 合計消費電力を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **show /SYS/VPS**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CH/VPS**

例:

-> **show /CH/VPS**
/CH/VPS

Targets:
history

Properties:
type = Power Unit
ipmi_name = VPS
class = Threshold Sensor
value = 898.503 Watts
upper_nonrecov_threshold = N/A
upper_critical_threshold = N/A
upper_noncritical_threshold = N/A
lower_noncritical_threshold = N/A
lower_critical_threshold = N/A
lower_nonrecov_threshold = N/A
alarm_status = cleared

Commands:
cd
show

Oracle ILOM CLI の合計消費電力センサー用のプロパティを、次に示します。

- type
- class
- value
- upper_nonrecov_threshold
- upper_critical_threshold
- upper_noncritical_threshold
- lower_noncritical_threshold
- lower_critical_threshold
- lower_nonrecov_threshold

しきい値はプラットフォームに固有です。詳細は、サーバーのドキュメントを参照してください。

▼ 実際の消費電力の監視 (CLI)

始める前に

137 ページの「要件 - 消費電力の監視 (CLI)」を確認してください。

実際の消費電力を監視するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 実際の消費電力を表示するには、**show** コマンドを使用します。
 - サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **show /SP/powermgmt actual_power**
 - CMM の場合、次のように入力します。
-> **show /CMM/powermgmt actual_power**

注 - actual_power は、/SYS/VPS (消費電力履歴) と同じです。actual_power は、センサーによって返される値です。

▼ 個々の電源装置の消費電力の監視 (CLI)

始める前に

137 ページの「要件 - 消費電力の監視 (CLI)」を確認してください。

個々の電源装置の消費電力を監視するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 個々の電源装置の消費電力を表示するには、**show** コマンドを使用します。

■ ラック搭載型サーバーの場合、次のように入力します。

-> **show /SYS/platform_path_to_powersupply/[INPUT_POWER|OUTPUT_POWER]**

■ CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CH/platform_path_to_powersupply/[INPUT_POWER|OUTPUT_POWER]**

次の表に、CLI センサーのプロパティを示します。INPUT_POWER および OUTPUT_POWER のどちらのセンサーにも同じプロパティがあります。
- | プロパティ | 説明 |
|-----------------------------|-----------------------|
| type | 電力装置 |
| class | しきい値センサー |
| value | <全電力消費量(ワット)、例: 1400> |
| upper_nonrecov_threshold | 該当なし |
| upper_critical_threshold | 該当なし |
| upper_noncritical_threshold | 該当なし |
| lower_noncritical_threshold | 該当なし |
| lower_critical_threshold | 該当なし |
| lower_nonrecov_threshold | 該当なし |
- 注 - 電力センサーは、サーバーモジュール(ブレード)ではサポートされていません。
- ▼ 使用可能な電力の監視 (CLI)
- 始める前に

137 ページの「要件 - 消費電力の監視 (CLI)」を確認してください。

使用可能な電力を監視するには、次の手順に従います。
- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 140

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 • 2013 年 2 月

2 システムで使用可能な電力を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- ラック搭載型サーバーの場合、次のように入力します。

-> **show /SP/powermgmt available_power**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CMM/powermgmt available_power**

▼ サーバーハードウェアの最大消費電力の監視 (CLI)

始める前に

137 ページの「要件 - 消費電力の監視 (CLI)」を確認してください。

サーバーのハードウェアの最大消費電力を監視するには、次の手順に従います。

1 Oracle ILOM SP CLI にログインします。

2 サーバーのハードウェア構成の最大消費電力を表示するには、**show** コマンドを使用します。次のように入力します。

-> **show /SP/powermgmt hwconfig_power**

▼ 許容消費電力の監視 (CLI)

始める前に

137 ページの「要件 - 消費電力の監視 (CLI)」を確認してください。

許容消費電力を監視するには、次の手順に従います。

1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。

2 システムの許容消費電力を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- ラック搭載型サーバーの場合、次のように入力します。

-> **show /SP/powermgmt permitted_power**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CMM/powermgmt permitted_power**

▼ 消費電力履歴の監視 (CLI)

始める前に

137 ページの「要件 - 消費電力の監視 (CLI)」を確認してください。

消費電力履歴を監視するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。
- 2 **show** コマンドを使用して、実際の消費電力を表示します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **show /SYS/VPS**
- ブレードサーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **show /CMM/BLn/VPS**
- CMM の場合、次のように入力します。
-> **show /CH/VPS**

例:

```
->show /CH/VPS
/CH/VPS
Targets:
  history

Properties:
  type = Power Unit
  ipmi_name = VPS
  class = Threshold Sensor
  value = 1400.000 Watts
  upper_nonrecov_threshold = N/A
  upper_critical_threshold = N/A
  upper_noncritical_threshold = N/A
  lower_noncritical_threshold = N/A
  lower_critical_threshold = N/A
  lower_nonrecov_threshold = N/A
  alarm_status = cleared

Commands:
  cd
  show
```

- 3 15 秒、30 秒、60 秒間の消費電力の移動平均、および平均消費電力履歴のターゲットの選択肢を表示するには、**show** コマンドを使用します。
- サーバー SP の場合、次のように入力します。
-> **show /SYS/VPS/history**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CH/VPS/history**

例:

```
->show /CH/VPS/history
/CH/VPS/history
Targets:
    0 (1 Minute Average, 1 Hour History)
    1 (1 Hour Average, 14 Day History)

Properties:
    15sec_average = 1210.000
    30sec_average = 1400.000
    60sec_average = 1800.000

Commands:
    cd
    show
```

- 4 分または時間での平均消費電力履歴を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **show /SYS/VPS/history/0**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CH/VPS/history/0**

例:

```
->show /CH/VPS/history/0
/CH/VPS/history/
Targets:
    list

Properties:
    average = 1500.000
    minimum = 1500.000 at Mar  4 08:51:24
    maximum = 1500.000 at Mar  4 08:51:23
    period = 1 Minute Average
    depth = 1 Hour History

Commands:
    cd
    show
```

- 5 タイムスタンプや消費電力ワット数などの履歴サンプルについての詳細を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- サーバー SP の場合、次のように入力します。

-> **show /SYS/VPS/history/0/list**

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CH/VPS/history/0/list**

例:

```
->show /CH/VPS/history/0/list
/CH/VPS/history/0/list
Targets:

Properties:
  Mar  4 08:52:23 = 1500.000
  Mar  4 08:51:24 = 1500.000
  Mar  4 08:50:24 = 1500.000
  Mar  4 08:49:24 = 1500.000
  Mar  4 08:48:24 = 1500.000
  Mar  4 08:47:23 = 1500.000

Commands:
  cd
  show
```

電力ポリシーおよび通知しきい値の構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
サーバーでの電力ポリシーの使用を構成する CLI 手順	■ 144 ページの「サーバー SP 電力ポリシー値の構成 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP (Oracle ILOM 3.0.4 よりも前のバージョン) ■ SPARC システムサーバー SP
通知のための消費電力しきい値を表示または構成する CLI 手順	■ 145 ページの「電力ワット数通知しきい値の表示と構成 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM

▼ サーバー SP 電力ポリシー値の構成 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM 電力ポリシープロパティは、すべての Oracle の Sun サーバーでサポートされているわけではありません。電力ポリシー機能がサーバーでサポートされているかどうかを判断するには、使用しているサーバー用に提供されている管理ガイドまたは Oracle ILOM 補足マニュアルを参照してください。
- Oracle ILOM で電力ポリシープロパティを変更するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- x86 プラットフォームサーバーの場合、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.3 以前がサーバーで実行されている必要があります。
- SPARC プラットフォームサーバーの場合、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0 以降がサーバーで実行されている必要があります。

- この手順で使用されている電力監視関連の用語の定義については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』の電力監視の用語に関するセクションを参照してください。

電力ポリシーの設定を定義してサーバーの電力使用を管理するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM サーバー SP CLI にログインします。
- 2 サーバーで設定されている現在の電力ポリシープロパティ値を表示するには、**show** コマンドを使用します。次のように入力します。
-> **show /SP/powermgmt policy**
- 3 サーバーで設定されている電力ポリシープロパティ値を変更するには、**set** コマンドを使用します。次のように入力します。
-> **set /SP/powermgmt policy=[Performance|Elastic]**

ポリシープロパティの値	説明
Performance	システムが利用可能なすべての電力を使用できるようにします。
Elastic	システムの電力使用量を現在の使用率のレベルに合わせて変化できるようにします。たとえば、作業負荷が変動した場合でも、相対利用率が常に 70% で保持されるように、供給する電力を増減します。

▼ 電力ワット数通知しきい値の表示と構成 (CLI)

始める前に

- プラットフォームサーバーまたは CMM は、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.4 以降を実行している必要があります。
- 電力ワット数通知しきい値を変更するには、Oracle ILOM で Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- この手順で使用されている電力監視関連の用語の定義については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』の電力監視の用語に関するセクションを参照してください。

システムによる消費電力ワット数に基づいて通知しきい値を設定するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM サーバー SP CLI または CMM CLI にログインします。

- 2 現在の電力管理設定を表示するには、**show** コマンドを使用します。

- CMM の場合、次のように入力します。

-> **show /CMM/powermgmt**

- ラック搭載型サーバーの場合、次のように入力します。

-> **show /SP/powermgmt**

例:

```
-> show /SP/powermgmt
/SP/powermgmt
Targets:
  budget
  powerconf
Properties:
  actual_power = 103
  permitted_power = 497
  allocated_power = 497
  available_power = 1500
  threshold1 = 0
  threshold2 = 0
Commands:
  cd
  set
  show
```

- 3 システムが消費する電力ワット数に基づいて通知しきい値を設定するには、次のように入力します。

-> **set threshold[1|2]=n**

ここでは、*n* はワット数を表します。

注 - 通知しきい値を 0 (ゼロ) に設定すると、通知しきい値オプションが無効になります。

コンポーネント割り当て配電の監視 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
電力割り当ての考慮事項	■ 147 ページの「電力割り当ての特別な考慮事項 (CLI)」	■ x86 システムサーバー SP ■ SPARC システムサーバー SP ■ CMM
サーバーまたは CMM でコンポーネント割り当てメトリックを表示するための CLI 手順	■ 148 ページの「すべてのシステムコンポーネントのサーバー電力割り当ての表示 (CLI)」 ■ 148 ページの「サーバーコンポーネントカテゴリの電力割り当ての表示 (CLI)」 ■ 150 ページの「すべてのシャーシコンポーネントに対する CMM 電力割り当ての表示 (CLI)」 ■ 150 ページの「CMM コンポーネントカテゴリの電力割り当ての表示 (CLI)」 ■ 151 ページの「Oracle ILOM 3.0.10 でのブレードスロットの許容電力または予約電力の表示 (CLI)」 ■ 152 ページの「Oracle ILOM 3.0.10 でのブレードの許容電力または許可制限の表示 (CLI)」	

電力割り当ての特別な考慮事項 (CLI)

電力割り当ての CLI 手順を実行する前に、次のことを考慮します。

- サーバーまたは CMM は、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 を実行している必要があります。さらに、一部の電力割り当て手順においては (明記されている場合)、サーバーまたは CMM が Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降を実行している必要があります。
- 次の CMM およびブレードサーバーの電力割り当てプロパティは、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降で更新されました。
 - `allocated_power` は `granted_power` に名前が変更されました
 - `allocatable_power` は `grantable_power` に名前が変更されました
 - `permitted_power` は `grant_limit` に名前が変更されました

更新された CLI プロパティ	説明
granted_power	単一のサーバーコンポーネント (メモリーモジュールなど)、サーバーコンポーネントのカテゴリ (すべてのメモリーモジュールなど)、またはすべてのサーバー消費電力コンポーネントによって消費される最大電力の合計。
grantable_power	許可制限を超えることなく CMM からブレードスロットに割り当て可能な残りの電力の合計 (ワット単位)。
grant_limit	CMM がブレードスロットに許可する最大電力。

- CLI 手順で使用されている電力監視関連の用語の定義については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』の電力監視の用語に関するセクションを参照してください。

▼ すべてのシステムコンポーネントのサーバー電力割り当ての表示 (CLI)

始める前に

147 ページの「電力割り当ての特別な考慮事項 (CLI)」を確認してください。

すべてのサーバーコンポーネントに割り当てられている電力の合計を表示するには、次の手順に従います。

- 1 **Oracle ILOM サーバー SP CLI** にログインします。
または、CMM にログインし、サーバー SP にドリルダウンして、すべての電力消費コンポーネントに割り当てられている電力の合計を表示することもできます。
- 2 システム内のすべてのコンポーネントに割り当てられた電力の合計を表示するには、次のように入力します。
-> **show /SP/powermgmt allocated_power**

▼ サーバーコンポーネントカテゴリの電力割り当ての表示 (CLI)

始める前に

147 ページの「電力割り当ての特別な考慮事項 (CLI)」を確認してください。

サーバーコンポーネントカテゴリに割り当てられている電力の合計を表示するには、次の手順に従います。

1 Oracle ILOM サーバー SP CLI にログインします。

または、CMM にログインし、サーバー SP にドリルダウンして、コンポーネントカテゴリに割り当てられている電力の合計を表示することもできます。

2 コンポーネントカテゴリ (ファン、CPU など) に割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/powermgmt/powerconf/component_type
```

ここでは、*component_type* は、コンポーネントカテゴリの名前です。

たとえば、すべての CPU (コンポーネントカテゴリ) に割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/powermgmt/powerconf/CPU
```

注-各コマンドでは、コンポーネントによって消費される最大電力の読み取り専用値がワット単位で返されます。

3 特定のコンポーネントに割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/powermgmt/powerconf/component_type/component_name
```

ここでは、*component_type* はコンポーネントカテゴリの名前、*component_name* はコンポーネントの名前です。

例:

CPU0 に割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/powermgmt/powerconf/CPU/CPU0
```

他のラック搭載型サーバーコンポーネントに割り当てられている電力を表示するには、次のいずれかを入力します。

- `show /SP/powermgmt/powerconf/Fans/FB0_FMn`
- `show /SP/powermgmt/powerconf/PSUs/PSn`
- `show /SP/powermgmt/powerconf/CPU/MB_Pn`
- `show /SP/powermgmt/powerconf/memory/MB_P0_Dn`
- `show /SP/powermgmt/powerconf/IO/DBP_HDDn`

他のブレードサーバーコンポーネントに割り当てられている電力を表示するには、次のいずれかを入力します。

- `show /SP/powermgmt/powerconf/CPU/MB_Pn`
- `show /SP/powermgmt/powerconf/memory/MB_P0_Dn`
- `show /SP/powermgmt/powerconf/IO/DBP_HDDn`

▼ すべてのシャーシコンポーネントに対する **CMM** 電力割り当ての表示 (CLI)

始める前に

147 ページの「電力割り当ての特別な考慮事項 (CLI)」を確認してください。

すべての CMM シャーシコンポーネントに割り当てられている電力の合計を表示するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM CMM CLI にログインします。
- 2 すべてのシャーシシステムコンポーネントに割り当てられた電力の合計を表示するには、次のいずれかの操作を実行します。
 - CMM が Oracle ILOM 3.0.8 以前を実行している場合は、次のように入力します。
-> `show /CMM/powermgmt allocated_power`
 - CMM が Oracle ILOM 3.0.10 以降を実行している場合は、次のように入力します。
-> `show /CMM/powermgmt granted_power`
- 3 ブレードスロットに割り当てられる残存電力を表示するには、次のように入力します。
-> `show /CMM/powermgmt allocatable_power`

▼ **CMM** コンポーネントカテゴリの電力割り当ての表示 (CLI)

始める前に

147 ページの「電力割り当ての特別な考慮事項 (CLI)」を確認してください。

CMM コンポーネントカテゴリに割り当てられている電力の合計を表示するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM CMM CLI にログインします。
- 2 CMM コンポーネントカテゴリ (ファン、ブレードのスロットなど) に割り当てられた電力の合計を表示するには、次のように入力します。
-> `show /CMM/powermgmt/powerconf/component_type`
ここでは、`component_type` は、コンポーネントカテゴリの名前です。

たとえば、すべてのブレードスロット (コンポーネントカテゴリ) に割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots
```

注-各コマンドでは、コンポーネントによって消費される最大電力の読み取り専用値がワット単位で返されます。

- 3 特定の CMM シャーシコンポーネントに割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/component_type/component_name
```

ここでは、*component_type* はコンポーネントカテゴリの名前、*component_name* はコンポーネントの名前です。

例:

ブレードスロット 0 に割り当てられた電力を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/BL0
```

他の CMM コンポーネント (NEM、ファン、電源装置など) に割り当てられている電力を表示するには、次のいずれかを入力します。

- `show /CMM/powermgmt/powerconf/NEMs/NEMn`
- `show /CMM/powermgmt/powerconf/Fans/FMn`
- `show /CMM/powermgmt/powerconf/PSUs/PSn`

▼ Oracle ILOM 3.0.10 でのブレードスロットの許容電力または予約電力の表示 (CLI)

始める前に

147 ページの「電力割り当ての特別な考慮事項 (CLI)」を確認してください。

シャーシのブレードスロットに割り当てられている電力の合計を表示するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM CMM CLI にログインします。

- 2 すべてのブレードスロットに許容された電力の合計、またはすべての自動送電式 I/O ブレードスロットに予約された電力の合計を表示するには、次のように入力します。

-> **show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots**

すべてのシャーシブレードのスロットに割り当てられた `granted_power` 値および `reserved_power` 値が表示されます。

例:

```
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots
/CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots
```

Targets:

```
BL0
BL1
BL2
BL3
BL4
BL5
BL6
BL7
BL8
BL9
```

Properties:

```
granted_power = 952
reserved_power = 876
```

Commands:

```
cd
show
```

▼ Oracle ILOM 3.0.10 でのブレードの許容電力または許可制限の表示 (CLI)

始める前に

147 ページの「電力割り当ての特別な考慮事項 (CLI)」を確認してください。

個別のブレードサーバーの許容電力または電力許可制限を表示するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM CMM CLI にログインします。
- 2 個別のブレードに許容された電力の合計、またはブレードに対して設定された許可制限値を表示するには、次のように入力します。

-> **show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslot/BLn**

ここでは、*n* はブレードのスロット位置を表します。


```
例:
-> show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/BL1
/CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/BL1
Targets:

Properties:
  granted_power = 0
  grant_limit = 800

Commands:
  cd
  set
  show
```

電力制限プロパティの構成 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
電力制限を設定するときの特別な考慮事項	153 ページの「電力制限を設定するときの特別な考慮事項 (CLI)」	- x86 システムサーバー SP - SPARC システムサーバー SP - CMM
サーバー SP の電力制限プロパティの構成の CLI 手順	154 ページの「シャーシブレードスロットの許容電力の構成 (CLI)」 155 ページの「サーバーの電力割当量プロパティの設定 (CLI)」 157 ページの「Oracle ILOM 3.0.10 でのブレードサーバーへの CMM 許可制限の設定 (CLI)」	

電力制限を設定するときの特別な考慮事項 (CLI)

- Oracle ILOM で電力制限プロパティを変更する前に、次のことを考慮します。
- プラットフォームサーバーまたは CMM は、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 以降を実行している必要があります。明記されている場合、一部の電力制限手順では、サーバーまたは CMM が Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降を実行している必要があります。
 - 次の CMM およびブレードサーバーの電力割り当てプロパティは、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降で更新されました。
 - allocated_power は granted_power に名前が変更されました
 - allocatable_power は grantable_power に名前が変更されました
 - permitted_power は grant_limit に名前が変更されました

更新された CLI プロパティ	説明
<code>granted_power</code>	単一のサーバーコンポーネント (メモリーモジュールなど)、サーバーコンポーネントのカテゴリ (すべてのメモリーモジュールなど)、またはすべてのサーバー消費電力コンポーネントによって消費される最大電力の合計。
<code>grantable_power</code>	許可制限を超えることなく CMM からブレードスロットに割り当て可能な残りの電力の合計 (ワット単位)。
<code>grant_limit</code>	CMM がブレードスロットに許可する最大電力。

- 電力管理構成プロパティを変更するには、Oracle ILOM で Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- 手順で使用されている電力監視関連の用語の定義については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』の電力監視の用語に関するセクションを参照してください。
- サーバーの電力制限 (またはサーバーの電力割当量) の使用についての詳細は、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』の電力管理のセクションを参照してください。

▼ シャーシブレードスロットの許容電力の構成 (CLI)

始める前に

153 ページの「電力制限を設定するときの特別な考慮事項 (CLI)」を確認してください。

シャーシのブレードスロットに割り当てられる許容電力の合計を構成するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM CMM CLI にログインします。
- 2 CMM がブレードスロットに割り当てる許容 (最大) 電力を設定するには、次のいずれかの操作を実行します。

- システムが Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.8 以前を実行している場合は、次のように入力します。

```
-> set /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/bladeSlotn permitted_power=watts
```

ここでは、*n* は構成するブレードスロットの数です。

例:

```
-> set /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/bladeSlot1
permitted_power=1200
Set 'permitted_power' to '1200'
```

- システムが Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.10 以降を実行している場合は、次のように入力します。

-> **set /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/blade-slot-*n* grant_limit=watts**

ここでは、*n* は構成するブレードスロットの数です。

注-ブレードサーバーに電源が投入されないようにするには、シャーシブレードスロットの許容電力値を 0 に設定します。

▼ サーバーの電力割当量プロパティの設定 (CLI)

始める前に

153 ページの「電力制限を設定するときの特別な考慮事項 (CLI)」を確認してください。

サーバーの電力割当量プロパティ値を変更するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM サーバー SP CLI にログインします。

または、CMM にログインし、ブレードサーバー SP にドリルダウンして、サーバーの電力割当量プロパティ値を設定することもできます。

- 2 現在の電力割当量設定を表示するには、次のように入力します。

-> **show /SP/powermgmt/budget**

例:

```
-> show /SP/powermgmt/budget
/SP/powermgmt/budget
Targets:
```

```
Properties:
  activation_state = enabled
  status = ok
  powerlimit = 600 (watts)
  timelimit = default (30 seconds)
  violation_actions = none
  min_powerlimit = 150
  pendingpowerlimit = 600 (watts)
  pendingtimelimit = default
  pendingviolation_actions = none
  commitpending = (Cannot show property)
```

```
Commands:
  cd
  show
```

- 3 電力割当量プロパティを設定するには、次のように入力します。

-> **set /SP/powermgmt/budget *property*=*value***

ここでは、`property=value` は次のいずれかを表します。

- `activation_state=[enabled|disabled]`
- `pendingpowerlimit=[watts|percent]`
- `pendingtimelimit=[default|none|seconds]`
- `pendingviolation_actions=[none|hardpoweroff]`
- `commitpending=true`

電力割当量プロパティ	説明
アクティベーション状態	電力割当量構成を有効にするには、このプロパティを有効にします。
電力制限	Power Limit は、ワット単位、または最小システム電力と最大システム電力の範囲の % で設定します。 注 - 最小システム電力は、CLI の <code>/SP/powermgmt/budget min_powerlimit</code> ターゲット以下で表示できます。最大システム電力は、Web インタフェースの Allocated Power プロパティまたは CLI の <code>/SP/powermgmt allocated_power</code> ターゲットから確認できます。
時間制限	電力使用の上限を設定するために、次のいずれかの猶予期間を指定します。 ■ Default - プラットフォームで選択された最適な猶予期間。 ■ None - 猶予期間なし。電力の上限が永続的に適用されます。 ■ Custom - ユーザー指定の猶予期間。
違反アクション	電力制限を猶予期間内に実現できない場合にシステムが実行するアクションを選択します。このオプションは、<code>none</code> または <code>hardpoweroff</code> に設定できます。 このプロパティは、デフォルトでは <code>none</code> に設定されています。

注 - Oracle ILOM CLI で `powerlimit`、`timelimit`、および `violation_action` を設定するには、一致する保留プロパティを設定し、これら 3 つの保留プロパティをグループとしてコミットする必要があります。 `set /SP/powermgmt/budget commitpending=true` を入力してこれらのプロパティをコミットすると、割当量の `activation_state` が `enabled` に設定されるたびに、新しい値が適用されます。

例:

```
-> set /SP/powermgmt/budget activation_state=enabled
Set 'activation_state' to 'enabled'
```

▼ **Oracle ILOM 3.0.10**でのブレードサーバーへの**CMM**許可制限の設定 (CLI)

始める前に

153 ページの「電力制限を設定するときの特別な考慮事項 (CLI)」を確認してください。

ブレードサーバーに割り当てられる許容電力を構成するには、次の手順に従います。

- 1 **Oracle ILOM CMM CLI** にログインします。
- 2 **CMM** がブレードに割り当てる許容 (最大) 電力を構成するには、次のように入力します。

```
-> set /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots/BLn grant_limit=watts
```

ここでは、n は構成するブレードサーバーの数です。

注-サーバーモジュールの電源が投入されないようにするには、ブレードの許可制限値を 0 に設定します。

注-grant_limit の値を、すでに許容された量 (granted_power) よりも少ない値にすることはできません。

CMM の電源冗長性プロパティの管理 (CLI)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
CMM 電源冗長性プロパティを監視または構成する CLI 手順	■ 158 ページの「CMM の電源冗長性プロパティの表示または設定 (CLI)」	■ CMM

▼ CMM の電源冗長性プロパティの表示または設定 (CLI)

始める前に

- CMM システムでの電源冗長性プロパティの使用の詳細は、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』の電力管理のセクションを参照してください。
- CMM は、Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.0.6 以降を実行している必要があります。
- 電源冗長性プロパティを変更するには、Oracle ILOM で Admin (a) の役割を有効にする必要があります。
- この手順で使用されている電力監視関連の用語の定義については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - 概念ガイド』の電力監視の用語に関するセクションを参照してください。

Oracle ILOM で CMM 電源冗長性プロパティを表示するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM CMM CLI にログインします。
- 2 CMM で設定されている現在の電力管理プロパティ値を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /CMM/powermgmt
```

- 3 CMM 電源冗長性プロパティを設定するには、次のように入力します。

```
-> set /CMM/powermgmt redundancy=[none|n+n]
```

例:

```
-> set /CMM/powermgmt redundancy=none  
Set 'redundancy' to 'none'
```

注 - 冗長性ポリシーを変更すると、サーバーモジュール (ブレード) に割り当てられるための CMM の許容電力量に影響します。シャーシの許容電源 (Permitted Power) は、使用可能な電源が提供できる電力から、使用可能な冗長電力を差し引いた電力に設定されます。さらに、システムで使用できる冗長電力が存在しない場合、電源の損失が起これば、システムが許容電力 (-Permitted -Power) を下げます。システムが許容電力 (-Permitted -Power) をすでに割り当てられている電力以下に落とす場合、すみやかにサーバーモジュールをオフにする手段をとり、割り当てられた電力を削減する必要があります。

ストレージメディアのリダイレクトと Oracle ILOM リモートコンソールの表示の

ロック

説明	リンク
Oracle ILOM Storage Redirection CLI 機能の使用方法的検索についての詳細	■ 160 ページの「ストレージメディアのリダイレクト (CLI)」
Oracle ILOM リモートコンソールをセキュリティー保護するための CLI 手順の検索についての詳細	■ 160 ページの「ストレージメディアのリダイレクト (CLI)」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、リモートリダイレクションコンソールオプション
- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、CLI または Web インタフェースを使用した Oracle ILOM リモートコンソールの表示のロック

ストレージメディアのリダイレクト (CLI)

Oracle ILOM 3.0 のストレージリダイレクション CLI 機能は、Oracle のすべての Sun x86 サーバー、および一部の SPARC プロセッサベースのサーバーでサポートされています。

Oracle ILOM Storage Redirection CLI の使用方法については、次を参照してください。

- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、ストレージメディアをリダイレクトするための初期設定タスク
- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、Storage Redirection CLI を使用したストレージデバイスのリダイレクト

注 - Oracle ILOM のストレージリダイレクション機能は、シャresh監視モジュール (CMM) または Oracle ILOM 2.0 を実行する x86 サーバーでは、サポートされていません。

Oracle ILOM リモートコンソールロックオプションの管理 (CLI)

CLI で Oracle ILOM リモートコンソールをロックする方法については、『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール - CLI および Web ガイド』のリモートコンソールロックオプションの管理に関する説明を参照してください。

リモートホストの電源状態、BIOS ブート
デバイス、およびホストサーバーコン

ソールの管理

説明	リンク
リモートサーバーモジュールの電源状態を管理します	■ 164 ページの「サーバー SP CLI または CMM CLI からのリモート電源状態コマンドの実行」
リモートホスト制御 - x86 システム SP のブートデバイス	■ 167 ページの「BIOS ホストブートデバイスのオーバーライドの構成 (CLI)」
ホストコンソールの起動、表示プロパティの変更、およびコンソール履歴やブートログの表示方法を学習します	■ 168 ページの「SP ホストコンソールの管理」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、リモートホスト管理オプション
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、リモートホストの電源状態の管理

サーバー **SP CLI** または **CMM CLI** からのリモート電源状態コマンドの実行

コマンドウィンドウまたは端末から、[表 17](#)および[表 18](#)で説明されているコマンドを実行して、離れた場所からホストサーバーまたは CMM の電源状態を制御できます。

表 17 サーバー SP のリモート電源制御コマンド

電源状態コマンド	説明	コマンド構文例
start	start コマンドを使用して、リモートホストサーバーの電源を投入します。 start コマンドを実行するには、次のように入力します。 ■ サーバー SP の場合、次のように入力します。start /SYS ■ 1 つの専用 SP 付きブレードサーバーの場合、次のように入力します。start /CH/BLn/SYS ■ 2 つの専用 SP 付きブレードサーバーの場合、次のように入力します。start /CH/BLn/NODEn/SYS	

表 17 サーバー SP のリモート電源制御コマンド (続き)

電源状態コマンド	説明	コマンド構文例
stop	stop コマンドを使用して、ホストサーバーの電源を切断する前に、OS を正常に停止します。 stop コマンドを実行するには、次のように入力します。 ■ サーバー SP の場合、次のように入力します。 stop /SYS ■ 1つの専用 SP 付きブレードサーバーの場合: stop /CH/BLn/SYS ■ 2つの専用 SP 付きブレードサーバーの場合: stop /CH/BLn/NODEn/SYS	
stop -force	stop -force コマンドを使用して、リモートホストサーバーの電源をただちに切断します。 stop -force コマンドを実行するには、次のように入力します。 ■ サーバー SP の場合、次のように入力します。 stop -force /SYS ■ 1つの専用 SP 付きブレードサーバーの場合、次のように入力します。 stop -force /CH/BLn/SYS ■ 2つの専用 SP 付きブレードサーバーの場合、次のように入力します。 stop -force /CH/BLn/NODEn/SYS	

表 17 サーバー SP のリモート電源制御コマンド (続き)

電源状態コマンド	説明	コマンド構文例
reset	reset コマンドを使用して、リモートホストサーバーをただちにリブートします。 reset コマンドを実行するには、次のように入力します。 ■ サーバー SP の場合、次のように入力します。reset /SYS ■ 1 つの専用 SP 付きブレードサーバーの場合、次のように入力します。reset /CH/BLn/SYS ■ 2 つの専用 SP 付きブレードサーバーの場合、次のように入力します。reset /CH/BLn/NODEn/SYS	

表 18 シャーシ監視モジュール (CMM) のリモート電源状態コマンド

電源状態コマンド	説明	コマンド構文例
start	start コマンドを使用して、リモートシャーシの全電源を入れます。 CMM CLI からリモートシャーシへ start コマンドを実行するには、次のように入力します。	start /CH
stop	stop コマンドを使用して、シャーシおよびそのコンポーネントの電源を正常に切断します。 CMM CLI からリモートシャーシへ stop コマンドを実行するには、次のように入力します。	stop /CH
stop -force	stop -force コマンドを使用して、シャーシおよびそのコンポーネントの電源をただちに切断します。 CMM CLI からリモートシャーシへ stop -force コマンドを実行するには、次のように入力します。	stop -force /CH

ホストサーバーへの接続、または Oracle ILOM CLI からのコマンド実行の詳細については、[37 ページの「ネットワーク、Secure Shell、ローカル相互接続の構成」](#)を参照してください。

▼ BIOS ホストブートデバイスのオーバーライドの構成 (CLI)

始める前に

- ホストブートデバイスの構成変数を変更するには、Reset and Host Control (r) の役割が必要です。

注 - ホスト制御の BIOS ブートデバイス機能は、x86 サーバー SP でサポートされています。この機能は CMM または SPARC サーバー SP ではサポートされていません。SPARC サーバー SP での Oracle ILOM ホスト制御ブートオプションについては、システムに付属の管理ガイドまたは Oracle ILOM 補足マニュアルを参照してください。

BIOS ブートデバイスを Oracle ILOM からオーバーライドするには、次の手順に従います。

- 1 Oracle ILOM SP CLI にログインします。
- 2 ホストブートプロパティに移動して表示するには、**cd** および **show** コマンドを使用します。

例:

```
-> cd /HOST
/HOST

-> show

/HOST
  Targets:
    diag

  Properties:
    boot_device = default
    generate_host_nmi = (Cannot show property)

  Commands:
    cd
    set
    show
```

- 3 次回システムの電源が投入されるときにホストブートデバイスを設定するには、次のように入力します。
- ```
-> set boot_device=value
```

取り得る値は次のとおりです。

- **default** – 値を **default** に設定すると、**BIOS** 設定はオーバーライドされません。**default** に設定すると以前の設定内容もすべてクリアされます。
- **pxe** – 値を **pxe** に設定すると、次回のホストブート時に **BIOS** のブート順序設定は一時的に無視され、ホストは **PXE** のブート指定に従ってネットワークから起動します。
- **disk** – 値を **disk** に設定すると、次回のホストブート時に **BIOS** のブート順序設定は一時的に無視され、**BIOS** が選択した最初のディスクからブートします。どのディスクが選ばれるかは、構成によって異なります。通常、ホストではこのオプションがデフォルトで使用されるため、このオプションを選択してもホストの動作は変わらない可能性があります。
- **diagnostic** – 値を **diagnostic** に設定すると、次回のホストブート時に **BIOS** のブート順序設定は一時的に無視され、ホストは診断パーティションにブートします (構成されている場合)。
- **cdrom** – 値を **cdrom** に設定すると、次回のホストブート時に **BIOS** のブート順序設定は一時的に無視され、ホストは接続されている **CD-ROM** または **DVD** デバイスからブートします。
- **bios** – 値を **bios** に設定すると、次回のホストブート時に **BIOS** のブート順序設定は一時的に無視され、ホストは **BIOS** 設定画面にブートします。

## SP ホストコンソールの管理

| トピックの説明                              | リンク                                                         | プラットフォーム機能のサポート                          |
|--------------------------------------|-------------------------------------------------------------|------------------------------------------|
| ホストコンソールプロパティを表示および設定します             | ■ <a href="#">169 ページの「ホストコンソールプロパティを表示および構成する」</a>         | ■ x86 システムサーバー SP<br>■ SPARC システムサーバー SP |
| ホストコンソールを起動し、コンソール履歴またはブートログ履歴を表示します | ■ <a href="#">171 ページの「ホストコンソールを起動し、コンソール履歴とブートログを表示する」</a> |                                          |



## ▼ ホストコンソールプロパティを表示および構成する

始める前に

- Oracle ILOM でホストコンソールプロパティを変更するには、Oracle ILOM で Admin (a) の役割の権限を有効にする必要があります。
- Oracle ILOM 3.0.12 から、ホストコンソールプロパティ (line\_count、pause\_count、および start\_from) はセッションをまたいで保持されなくなりました。これらのホストコンソールプロパティの値は、spsh セッションの間有効です。

- 1 Oracle ILOM SP CLI にログインします。
- 2 ホストコンソールプロパティに移動して表示するには、**cd** および **show** コマンドを使用します。

例:

```
-> cd /HOST/console
/HOST/console

-> show

/HOST/console
Targets:
 history

Properties:
 line_count = 0
 pause_count = 0
 start_from = end

Commands:
 cd
 show
 start
 stop
```

---

注-spsh セッションが起動されるたびに、これらのプロパティはデフォルト値 (line\_count=0、pause\_count=0、start\_from=end) に初期化されます。これらプロパティの値は、実行中の特定の spsh セッションの間だけ有効です。

---

- 3 ホストコンソールプロパティの説明を表示するには、**help** コマンドを使用します。

例:

```
-> help escapechars
Properties:
 escapechars : set escape chars using the console connection
```

```
escapechars : User role required for set = a
```

```
-> help line_count
```

```
Properties:
```

```
line_count : total number of lines to display
line_count : Possible values = 0-2048 where 0 means no limit
line_count : User role required for set = c
```

```
-> help pause_count
```

```
Properties:
```

```
pause_count : number of lines to display before each pause
pause_count : Possible values = 0-2048 where 0 means no limit
pause_count : User role required for set = c
```

```
-> help start_from
```

```
Properties:
```

```
start_from : from which end of the available history to list
start_from : Possible values = beginning,end
start_from : User role required for set = c
```

#### 4 ホストコンソールプロパティを構成するには、**set** コマンドを使用します。

例:

- **line\_count** プロパティに値を設定するには、次のように入力します。

```
-> set line_count=value
```

ここでは、*value* には 1 - 2048 を指定できます。

- **pause\_count** プロパティに値を設定するには、次のように入力します。

```
-> set pause_count=value
```

ここでは、*value* には、行数として 1 から任意の有効な整数または無限数を指定できます。デフォルトでは一時停止しません。

- **start\_from** プロパティに値を設定するには、次のように入力します。

```
-> set start_from=[end|beginning]
```

ここでは、*end* はバッファ内の最後 (最新) の行 (デフォルト) で、*beginning* はバッファ内の最初の行です。

- **escapechars** に値を設定するには、次のように入力します。

```
-> set escapechars=value
```

ここでは、*value* は 2 文字に制限されています。デフォルト値は #. (ハッシュとピリオド) です。

---

注 - /SP/console escapechars プロパティを使用すると、システムコンソールセッションを切り替えて Oracle ILOM に戻るときに使用する、エスケープ文字シーケンスを指定できます。エスケープ文字の変更は、現在アクティブなコンソールセッションでは有効になりません。

---

## ▼ ホストコンソールを起動し、コンソール履歴とブートログを表示する

始める前に

- Oracle ILOM でホストコンソールプロパティを変更するには、Admin (a) の役割の権限を有効にする必要があります。
- Oracle ILOM 3.0.12 から、ホストコンソールプロパティ (line\_count、pause\_count、および start\_from) はセッションをまたいで保持されなくなりました。これらのホストコンソールプロパティの値は、spsh セッションの間有効です。

- 1 Oracle ILOM SP CLI にログインします。
- 2 ホストコンソールの表示プロパティを設定します (169 ページの「ホストコンソールプロパティを表示および構成する」を参照)。

---

注 - Oracle ILOM 3.0.12 から、ホストコンソールプロパティ (line\_count、pause\_count、および start\_from) はセッションをまたいで保持されなくなりました。これらプロパティの値は、実行中の特定の spsh セッションの間だけ有効です。

---

- 3 ホストコンソールを起動するには、次のように入力します。

-> **start /SP/console**

- 4 コンソール履歴を表示するには、次のように入力します。

-> **show /SP/console/history**

コンソール履歴バッファは、最大 1M バイトの情報を格納できる循環バッファです。このバッファには、ホストコンソールで制御される OS 情報およびすべての POST 情報とブート情報が格納されます。

- 5 ブートログの種類を表示するには、次のように入力します。

-> **show /SP/console/bootlog**

ブートログは、システムのスタートアップ状況を追跡し、発生した問題をすべて記録します。



# SPARC サーバーでの TPM と LDom の状態の管理 (CLI)

| 説明                                  | リンク                                                       |
|-------------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| SPARC サーバー上の TPM の状態を制御します          | ■ <a href="#">173 ページの「SPARC サーバーでの TPM の状態の制御 (CLI)」</a> |
| SPARC サーバー上の論理ドメイン (LDom) の構成を管理します | ■ <a href="#">175 ページの「SPARC サーバーでの LDom 構成の管理 (CLI)」</a> |

## 関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 リモートリダイレクションコンソール』、リモートホスト管理オプション
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 - Web 手順』、SPARC サーバーでの TPM および LDom の状態の管理

## ▼ SPARC サーバーでの TPM の状態の制御 (CLI)

始める前に

- Oracle ILOM の TPM (Trusted Platform Module) 機能は SPARC サーバーでのみ使用できます。
- SPARC サーバーで、TPM をサポートするバージョンの Oracle Solaris オペレーティングシステムが実行されている必要があります。  
Oracle Solaris での TPM のサポートの構成に関する詳細は、Oracle Solaris のドキュメントまたは使用しているサーバーに付属しているプラットフォームのドキュメントを参照してください。
- SPARC サーバー SP で Oracle ILOM 3.0.8 以降のバージョンを使用している必要があります。
- Oracle ILOM で TPM 設定を変更するには、Reset and Host Control (r) ユーザーアカウントが必要です。

- 1 Oracle ILOM SP CLI にログインします。

- 2 **show** コマンドを使用して、**TPM** のターゲット、プロパティ、およびコマンドを表示します。

例:

```
-> show /HOST/tpm

/HOST/tpm
Targets:

Properties:
 activate = false
 enable = false
 forceclear = false

Commands:
 cd
 set
 show
```

- 3 **help** コマンドを使用して、**TPM** のターゲットおよびプロパティについての詳細を表示します。

例:

```
-> help /HOST/tpm

/HOST/tpm : Host TPM (Trusted Platform Module) Knobs
Targets:

Properties:
 activate : TPM Activate Property. If set to TRUE, then TPM
will be activated if the 'enable' property is also set to TRUE.
 activate : Possible values = true, false
 activate : User role required for set = r
 enable : TPM Enable Property. If not enabled, then TPM
configuration changes can not be made.
 enable : Possible values = true, false
 enable : User role required for set = r

 forceclear : TPM Forceclear Property. If set to TRUE, then
TPM state will be purged on the next power on event if and only if
the 'enable' property is set to TRUE.
 forceclear : Possible values = true, false
 forceclear : User role required for set = r
```

- 4 **set** コマンドを使用して、**TPM** のプロパティ値を指定します。

例:

- **set** コマンドの使用法:

```
set [target] <property>=<value> [<property>=<value>]
```

- プロンプトで、**TPM** のターゲットと、1つ以上のプロパティ値を次のように指定します。

```
-> set /host/tpm property=value
```

-> **set /host/tpm property=value property=value**

ここでは、*property* と *value* には、次の表に示すいずれかのパラメータを指定できます。

| プロパティ      | 値                                                                 | 例                                                                                                                                                                                                 |
|------------|-------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| enable     | true または false を指定できます。<br><br>注 - enable のデフォルト値は -false です。     | TPM 状態を有効にするには、次のように入力します。<br><br>-> <b>set /HOST/tpm enable=true</b><br><br>注 - SPARC サーバーの次の電源投入時に TPM の有効な状態をサーバーに適用するには、TPM 状態をアクティブにする必要があります。詳細については、activate プロパティを参照してください。               |
| activate   | true または false を指定できます。<br><br>注 - activate のデフォルト値は -false です。   | TPM の状態を有効にし、SPARC サーバーの次の電源投入時にサーバーでこの状態 (有効) をアクティブにするには、次のように入力します。<br><br>-> <b>set /HOST/tpm enable=true activate=true</b>                                                                   |
| forceclear | true または false を指定できます。<br><br>注 - forceclear のデフォルト値は -false です。 | SPARC サーバーの次の電源投入時にサーバーで TPM の有効な状態を消去する (無効にする) には、次のように入力します。<br><br>-> <b>set /HOST/tpm forceclear=true</b><br><br>注 - enable と activate のプロパティ値が true に設定されている場合、forceclear は true にのみ設定されます。 |

## SPARC サーバーでの LDom 構成の管理 (CLI)

| 説明                                         | リンク                                                                                                                                                                                                                     | プラットフォーム機能のサポート           |
|--------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------|
| 必要条件を確認します                                 | <ul style="list-style-type: none"><li>176 ページの「要件 — LDom 構成」</li></ul>                                                                                                                                                  | ■ SPARC システムサーバー SP (CLI) |
| 格納されている LDom 設定の Oracle ILOM 構成を表示および管理します | <ul style="list-style-type: none"><li>176 ページの「SPARCT3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 構成のターゲットおよびプロパティの表示 (CLI)」</li><li>177 ページの「格納されている LDom 構成に対するホストの電源の指定 (CLI)」</li><li>178 ページの「制御ドメインのプロパティ値の有効化または無効化 (CLI)」</li></ul> |                           |

## 要件 — LDom 構成 (CLI)

格納されている論理ドメイン (LDom) 構成の Oracle ILOM 設定を表示および管理するには、次の要件を満たす必要があります。

- 適切な Oracle ILOM ポイントリリースファームウェアがインストールされている SPARC サーバーの Oracle ILOM にアクセスする必要があります (次の「注」を参照)。

---

注 - SPARC T3 シリーズのサーバーから LDom のターゲットおよびプロパティを表示するには、Oracle ILOM 3.0.12 以降が必要です。次の場合は Oracle ILOM 2.0.0 以降が必要です。(1) ホスト SPARC サーバーで使用する LDom 構成を指定する場合。(2) ホスト SPARC サーバーから制御ドメインのブートプロパティ値を管理する場合。

---

- Oracle VM Server for SPARC (Logical Domains Manager) 2.0 以降のソフトウェアがホスト SPARC サーバーにインストールされている必要があります。
- ホスト SPARC サーバーに LDom 構成が格納されている必要があります。ホスト SPARC サーバーで LDom 構成を作成して保存する方法については、『Logical Domains 1.3 管理ガイド』を参照してください。
- 次を設定するには、Oracle ILOM で Remote Host Reset and Host Control (r) 権限を有効にする必要があります。
  - LDom の bootmode ターゲット
  - bootmode ターゲットのプライマリまたはゲストドメインのプロパティ値。

## ▼ SPARC T3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 構成のターゲットおよびプロパティの表示 (CLI)

SPARC T3 シリーズのサーバーに格納されている LDom 構成の CLI ターゲットおよびプロパティを表示するには、次の手順に従います。

- 1 SPARC T3 シリーズのサーバーで **Oracle ILOM CLI** にログインします。
- 2 格納されている **LDom** ホスト構成の名前を表示するには、次のように入力します。  
-> **show /HOST/domain/configs**
- 3 格納されている **LDom** 構成の作成日と、格納されている **LDom** 構成内で構成されているドメイン数についてのプロパティ値を表示するには、次のように入力します。  
-> **show /HOST/domain/configs/<name\_of\_stored\_configuration>**



次の例は、ONEDOMAIN という名前の架空の保存済み LDom 構成に関連するプロパティ値を表示する CLI の出力を示しています。

```
-> show
/HOST/domain/configs
 Targets:
 trimmed
 ONEDOMAIN
 Properties:

 Commands:
 cd
 show
-> show ONEDOMAIN
/HOST/domain/configs/ONEDOMAIN
 Targets:
 Properties:
 date_created = 2010-08-17 17:09:34
 domains = 1

 Commands:
 cd
 show
```

---

注 - Oracle ILOM は読み取り専用のプロパティを非揮発性メモリーに格納し、LDom Manager の LDom 構成が更新されるたびにそれらのプロパティを更新します。

---

## ▼ 格納されている LDom 構成に対するホストの電源の指定 (CLI)

ホストサーバーの電源が投入されたときに使用する LDom 構成を指定するには、次の手順に従います。

- 1 SPARC サーバーで Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 **cd** コマンドを使用して /Host/bootmode ターゲットに移動したあと、**set config=** コマンドを使用して格納されている LDom 構成の名前を指定します。

次の例は、ONEDOMAIN という名前の架空の保存済み LDom 構成を bootmode ターゲットとして設定するための CLI の出力を示しています。

```
-> cd /HOST/bootmode
/HOST/bootmode

-> set config=ONEDOMAIN
Set 'config' to 'ONEDOMAIN'
```

LDom 構成の bootmode プロパティに加えた変更は、ホストサーバーを次回リセットまたは電源投入したときに有効になります。

▼ 制御ドメインのプロパティ値の有効化または無効化 (CLI)

Oracle ILOM で LDom 制御ドメインのブートプロパティ値を有効または無効にするには、次の手順に従います。

- 1 SPARC サーバーで **Oracle ILOM CLI** にログインします。
- 2 **cd** コマンドを使用して **/Host/domain/control** ターゲットに移動したあと、**ls** コマンドを使用して、ホスト制御ドメインおよびゲストドメインの自動ブートプロパティを表示します。

例:

```
-> cd /HOST/domain/control
-> ls
```

```
/HOST/domain/control
Targets:

Properties:
 auto-boot = enabled
 boot_guests = enabled

Commands:
 cd
 reset
 set
 show
```

- 3 **set** コマンドを使用して、次の **auto-boot** プロパティ値および **boot-guests** プロパティ値を指定します。

| プロパティ     | set プロパティ値            | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-----------|-----------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| auto-boot | set auto-boot=<value> | set auto-boot= コマンドに続けて、次のプロパティ値のいずれかを入力します。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ enabled (デフォルト)。auto-boot プロパティ値を有効にすると、次の電源投入またはリセット後に制御ドメインが自動的に起動します。</li><li>■ disabled。制御ドメインの auto-boot プロパティ値を無効にすると、次の電源投入またはリセット後にドメインは自動的にリブートせず、OpenBoot の ok プロンプトで停止します。</li></ul> |

| プロパティ       | set プロパティ値              | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-------------|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| boot_guests | set boot_guests=<value> | <p>set boot_guests= コマンドに続けて、次のプロパティ値のいずれかを入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ enabled (デフォルト)。boot_guests プロパティを有効にすると、ゲストドメインは次の電源投入またはリセット後にブートします。</li> <li>■ disabled。ゲストドメインの boot_guests プロパティ値を無効にすると、次の電源投入またはリセット後にゲストドメインがブートしなくなります。</li> </ul> |

- 4 /HOST/domain/control をリセットしたあと、ホストで電源をリセットします。

例:

```
-> reset /HOST/domain/control
```

```
-> reset /SYS
```

boot\_guests プロパティの変更は、両方のリセット操作 (/host/domain/control と /SYS) が完了したあとでのみ有効になります。



# CLI コマンドリファレンス

---

このリファレンスの構文例では、`/SP/` で始まるターゲットを使用しています。これは、ほとんどの Oracle Sun サーバーに適用されます。サブターゲットはすべてのプラットフォームで共通のため、これらのコマンドを CMM から実行する場合は、`/SP/` で始まるターゲットを `/CMM/` に置き換えることができます。これらのコマンドをブレードサーバーシャーシから実行する場合は、ブレードサーバーのプラットフォームに応じて、`/SP/` で始まるターゲットを、`/CH/BLn` または `CH/BLn/Noden` に置き換えることができます。

このリファレンスでは、次の CLI コマンドについて説明します。

- [181 ページの「cd コマンド」](#)
- [182 ページの「create コマンド」](#)
- [183 ページの「delete コマンド」](#)
- [184 ページの「dump コマンド」](#)
- [184 ページの「exit コマンド」](#)
- [185 ページの「help コマンド」](#)
- [186 ページの「load コマンド」](#)
- [187 ページの「reset コマンド」](#)
- [187 ページの「set コマンド」](#)
- [198 ページの「show コマンド」](#)
- [210 ページの「start コマンド」](#)
- [211 ページの「stop コマンド」](#)
- [212 ページの「version コマンド」](#)

## cd コマンド

`cd` コマンドを使用すると、ネームスペースを操作できます。ターゲットの場所に `cd` を行くと、その場所がほかのすべてのコマンドのデフォルトターゲットになります。ターゲットなしで `-default` オプションを使用すると、最上位のネームスペースに戻ります。`cd -default` を入力した場合は、`cd /` を入力した場合と同じ結果が得られます。`cd` とだけ入力すると、ネームスペースの現在の場所が表示されます。`help targets` と入力すると、ネームスペース全体にあるすべてのターゲットのリストが表示されます。

## 構文

**cd** *target*

## オプション

**[-default] [-h|help]**

## ターゲットとプロパティー

ネームスペースの任意の場所。

## 例

emmett というユーザー名を作成するには、/SP/users に **cd** を行い、デフォルトのターゲットとして /SP/users を使用して create コマンドを実行します。

```
-> cd /SP/users
```

```
-> create emmett
```

自分の場所を表示するには、**cd** と入力します。

```
-> cd
```

# create コマンド

create コマンドを使用すると、ネームスペースのオブジェクトを設定できます。create コマンドで特定のプロパティーを指定しないかぎり、プロパティーは空です。

## 構文

**create** [*options*] *target* [*propertyname=value*]

## オプション

**[-h|help]**

## ターゲット、プロパティ、および値

表 19 create コマンドのターゲット、プロパティ、および値

| 有効なターゲット                                                | プロパティ                  | 値                                          | デフォルト      |
|---------------------------------------------------------|------------------------|--------------------------------------------|------------|
| <i>/SP/users/username</i>                               | password               | <string>                                   | (なし)       |
|                                                         | role                   | administrator<br> operator <br>a u c r o s | o          |
| <i>/SP/services/snmp/communities<br/>/communityname</i> | permissions            | ro rw                                      | ro         |
| <i>/SP/services/snmp/users/ username</i>                | authenticationprotocol | MD5                                        | MD5        |
|                                                         | authenticationpassword | <string>                                   | (null 文字列) |
|                                                         | permissions            | ro rw                                      | ro         |
|                                                         | privacyprotocol        | none DES AES                               | DES        |
|                                                         | privacypassword        | <string>                                   | (null 文字列) |

### 例

```
-> create /SP/users/susan role=administrator
```

## delete コマンド

delete コマンドを使用すると、ネームスペースのオブジェクトを削除できます。delete コマンドを確認するプロンプトが表示されます。-script オプションを使用することで、このプロンプトの表示を省略できます。

### 構文

```
delete [options] [-script] target
```

### オプション

```
[-h|help] [-script]
```

## ターゲット

表 20 delete コマンドのターゲット

| 有効なターゲット                                                 |
|----------------------------------------------------------|
| <code>/SP/users/username</code>                          |
| <code>/SP/services/snmp/communities/communityname</code> |
| <code>/SP/services/snmp/users/username</code>            |

### 例

```
-> delete /SP/users/susan
```

```
-> delete /SP/services/snmp/communities/public
```

## dump コマンド

dump コマンドを使用すると、URI で指定したリモートの場所にターゲットからファイルを転送できます。

### 構文

```
dump -destination <URI> target
```

### オプション

```
[-destination]
```

## exit コマンド

exit コマンドを使用すると、CLI セッションを終了できます。

### 構文

```
exit [options]
```

### オプション

```
[-h|help]
```



## help コマンド

help コマンドを使用すると、コマンドとターゲットについてのヘルプ情報を表示できます。-o|output terse オプションを使用すると、使用法に関する情報のみが表示されます。-o|output verbose オプションでは、使用法、説明、およびコマンド使用法の例などの追加情報が表示されます。-o|output オプションを使用しない場合は、コマンドの使用法と簡単な説明が表示されます。

*command targets* を指定すると、/SP と /SYS にある固定ターゲットのうち、そのコマンドに有効なターゲットの詳細リストが表示されます。固定ターゲットとは、ユーザーが作成できないターゲットです。

legal コマンドのターゲットを指定すると、著作権情報と製品使用権が表示されます。

### 構文

**help** [*options*] *command target*

### オプション

**[-h|help] [-o|output terse|verbose]**

### コマンド

**cd, create, delete, exit, help, load, reset, set, show, start, stop, version**

### 例

-> **help load**

The load command transfers a file from a remote location specified by the URI and updates the given target.

Usage: load [-script] -source <URI> [target]

-source: Specify the location to get a file.

-> **help -output verbose reset**

The reset command is used to reset a target.

Usage: reset [-script] [target]

Available options for this command:

-script: Do not prompt for yes/no confirmation and act as if yes were specified.

## load コマンド

load コマンドを使用すると、Uniform Resource Indicator (URI) で特定されるソースからイメージファイルを転送して、Oracle ILOM のファームウェアを更新できます。URI によって、転送に使用するプロトコルと認証を指定できます。load コマンドは、FTP、TFTP、SFTP、SCP、HTTP、および HTTPS プロトコルをサポートしています。認証が必要であっても指定しない場合は、パスワードの入力を求めるコマンドプロンプトが表示されます。-script オプションを使用すると、yes または no を確認するプロンプトの表示が省略され、yes が指定されたものとしてコマンドが動作します。

---

注- このコマンドは、Oracle ILOM のファームウェアと BIOS を更新するために使用します。

---

### 構文

**load -source *URI***

### オプション

**[-h|help] [-script]**

### 例

**-> load -source tftp://ip\_address/newmainimage**

---

注- ファームウェアをアップグレードすると、サーバーおよび Oracle ILOM がリセットされます。アップグレード処理の前に、サーバーの正常な停止を実行してください。アップグレードの完了には、約 5 分かかります。その間、Oracle ILOM の特別なモードで新しいファームウェアがロードされます。ファームウェアのアップグレードが完了して Oracle ILOM がリセットされるまで、Oracle ILOM でほかのタスクは実行できません。

---

```
-> load -source tftp://ip_address/newmainimage
Are you sure you want to load the specified file (y/n)? y
File upload is complete.
Firmware image verification is complete.
Do you want to preserve the configuration (y/n)? n
Updating firmware in flash RAM:
.
Firmware update is complete.
ILOM will now be restarted with the new firmware.
```

## reset コマンド

reset コマンドを使用すると、ターゲットの状態をリセットできます。リセット操作を確認するプロンプトが表示されます。-script オプションを使用することで、このプロンプトの表示を省略できます。

---

注 - reset コマンドは、ハードウェアデバイスの電源状態には影響を与えません。

---

### 構文

**reset** [*options*] *target*

### オプション

**[-h|help] [-script]**

(SPARC ベースのシステムでは、-f|force オプションがサポートされています。)

### ターゲット

表 21 reset コマンドのターゲット

| 有効なターゲット |
|----------|
| /SP      |
| /SYS     |

### 例

-> **reset** /SP

-> **reset** /SYS

## set コマンド

set コマンドを使用すると、ターゲットのプロパティを指定できます。

### 構文

**set** [*options*] *target* [*propertyname=value*]

### オプション

**[-h|help]**

## ターゲット、プロパティ、および値

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値

| 有効なターゲット                                                | プロパティ                 | 値                                                                                                                                                                                                                             | デフォルト  |
|---------------------------------------------------------|-----------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|
| /HOST/tpm                                               | enable                | true false                                                                                                                                                                                                                    | false  |
|                                                         | activate              | true false                                                                                                                                                                                                                    | false  |
| /SP/alertmgmt/rules/ <i>n</i> ここで<br><i>n</i> は 1-15 です | forceclear            | true false                                                                                                                                                                                                                    | false  |
|                                                         | community_or_username | <文字列>                                                                                                                                                                                                                         | public |
|                                                         | destination           | SNMP トラップの <i>IP address hostname</i><br>IPMI PET の <i>IP address</i><br>電子メールの <i>email_address</i>                                                                                                                          | (なし)   |
|                                                         | destination_port      | <整数>                                                                                                                                                                                                                          | 0      |
|                                                         | event_class_filter    | "" Developer Email <br>Internal Captive Shell <br>Backup Restore Reset <br>Chassis Power HMD COD <br>Storage CPLD Restricted<br>Shell ZMGTD Ethernet<br>Switch Audit IPMI Fault<br>System ActDir LdapSsl  HOST SP<br>Hardware | (なし)   |
|                                                         | event_type_filter     | "" Log Connection Send <br>Test Product Chassis <br>Voting Command Entered  Command<br>Executed SAS2 fabric status CMM<br>Ethernet Switch State Action Fault <br>Repair Warning                                               | (なし)   |
|                                                         | level                 | disable down critical major minor                                                                                                                                                                                             | (なし)   |
|                                                         | snmp_version          | 1 2c 3                                                                                                                                                                                                                        | 3      |
|                                                         | testrule              | true                                                                                                                                                                                                                          | (なし)   |
|                                                         | type                  | email ipmipet snmptrap                                                                                                                                                                                                        | (なし)   |
| /SP/cli                                                 | timeout               | <整数><br><br>ここでは、整数は 0-1440、0 は<br>timeout が無効であることを示します                                                                                                                                                                      | 0      |

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

| 有効なターゲット           | プロパティ          | 値                                                     | デフォルト    |
|--------------------|----------------|-------------------------------------------------------|----------|
| /SP/clock          | datetime       | <MMDDhhmmYYYY><br><br>ここでは、MMDDhhmmYYYYは現在の日付と時間を示します | <文字列>    |
|                    | timezone       | EST PST8PDT etc                                       | GMT      |
|                    | usentpserver   | enabled disabled                                      | disabled |
| /SP/console        | line_count     | <整数><br><br>ここでは、整数は0-2048で、0は無制限であることを示します           | 0        |
|                    | logging        | enabled disabled                                      | enabled  |
|                    | pause_count    | <整数><br><br>ここでは、整数は0-2048で、0は無制限であることを示します           | 0        |
|                    | start_from     | end beginning                                         | end      |
|                    | port           | <ポート><br><br>ここでは、ポートはhttpサービスのポート番号を示します             | 80       |
| /SP/services/http  | secureredirect | enabled disabled                                      | enabled  |
|                    | servicestate   | enabled disabled                                      | disabled |
| /SP/services/https | port           | <ポート><br><br>ここでは、ポートはhttpsサービスのポート番号を示します            | 443      |
|                    | servicestate   | enabled disabled                                      | disabled |
|                    | sslv2          | enabled disabled                                      | disabled |
|                    | sslv3          | enabled disabled                                      | enabled  |
|                    | tlsv1          | enabled disabled                                      | enabled  |
|                    | weak_ciphers   | enabled disabled                                      | disabled |
|                    | servicestate   | enabled disabled                                      | enabled  |
|                    | servicestate   | enabled disabled                                      | enabled  |

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

| 有効なターゲット                                  | プロパティ                 | 値                                                                                                                                                                                                                                            | デフォルト    |
|-------------------------------------------|-----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| /SP/services/kvms                         | custom_lock_key       | esc end tab ins del home <br>enter space break backspace <br>pg_up pg_down scr_lck <br>sys_rq num_plus num_minus <br>f1 f2 f3 f4 f5 f6 f7 f8 f9 <br>f10 f11 f12 a-z 0-9 ! @ # \$ % ^ & <br>* ( ) - _ = +   ~ ' [{] }] ; : ' "<br> < .  > / ? | (なし)     |
|                                           | custom_lock_modifiers | l_alt r_alt l_shift r_shift <br> l_ctrl r_ctrl l_gui r_gui                                                                                                                                                                                   | (なし)     |
|                                           | lockmode              | disabled windows custom                                                                                                                                                                                                                      | disabled |
|                                           | mousemode             | absolute relative                                                                                                                                                                                                                            | absolute |
|                                           | servicestate          | enabled disabled                                                                                                                                                                                                                             | enabled  |
|                                           | engineid              | <16 進数><br><br>ここでは、16 進数は snmp エージェント ID を示します                                                                                                                                                                                              | (なし)     |
| /SP/services/snmp                         | port                  | <ポート><br><br>ここでは、ポートは snmp エージェントポートアドレスを示します                                                                                                                                                                                               | 161      |
|                                           | sets                  | enabled disabled                                                                                                                                                                                                                             | disabled |
|                                           | v1                    | enabled disabled                                                                                                                                                                                                                             | disabled |
|                                           | v2c                   | enabled disabled                                                                                                                                                                                                                             | disabled |
|                                           | v3                    | enabled disabled                                                                                                                                                                                                                             | enabled  |
|                                           | servicestate          | enabled disabled                                                                                                                                                                                                                             | enabled  |
|                                           | dump_uri              | <URI><br><br>ここでは、URI には<br>tftp、ftp、sftp、scp、http、または<br>https を使って指定します                                                                                                                                                                    | (なし)     |
| /SP/services/snmp/<br>communities/private | permission            | ro rw                                                                                                                                                                                                                                        | rw       |
| /SP/services/snmp/<br>communities/public  | permission            | ro rw                                                                                                                                                                                                                                        | ro       |

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

| 有効なターゲット                                                      | プロパティ                   | 値                                                                 | デフォルト      |
|---------------------------------------------------------------|-------------------------|-------------------------------------------------------------------|------------|
| <b>/SP/services/snmp/users</b><br><i>/username</i>            | authenticationprotocol  | MD5                                                               | MD5        |
|                                                               | authenticationpassword  | <パスワード>                                                           | (null 文字列) |
|                                                               | permissions             | ro rw                                                             | ro         |
|                                                               | privacyprotocol         | none DES AES                                                      | DES        |
|                                                               | privacypassword         | <パスワード>                                                           | (null 文字列) |
| <b>/SP/services/ssh</b>                                       | generate_new_key_action | true                                                              | (なし)       |
|                                                               | generate_new_key_type   | none rsa dsa                                                      | (なし)       |
|                                                               | restart_sshd_action     | true                                                              | (なし)       |
|                                                               | state                   | enabled disabled                                                  | enabled    |
| <b>/SP/services/sso</b>                                       | state                   | enabled disabled                                                  | enabled    |
| <b>/SP/users/username</b>                                     | role                    | administrator operator  a u c r o s                               | (なし)       |
|                                                               | password                | <パスワード>                                                           | (なし)       |
| <b>/SP/clients/ activedirectory</b>                           | state                   | enabled disabled                                                  | disabled   |
|                                                               | defaultrole             | administrator operator  a u c r o s                               | (なし)       |
|                                                               | dnslocatormode          | enabled disabled                                                  | disabled   |
|                                                               | expsearchmode           | enabled disabled                                                  | disabled   |
|                                                               | address                 | <IP アドレス> または <DNS 名>                                             | (なし)       |
|                                                               | port                    | <ポート>                                                             | 0          |
|                                                               |                         | ここでは、ポートは Active Directory<br>サーバーの TCP ポートで、0-65535<br>の整数で指定します |            |
|                                                               | strictcertmode          | enabled disabled                                                  | disabled   |
|                                                               | timeout                 | <秒>                                                               | 4          |
|                                                               |                         | ここでは、秒は 0-20 を示します                                                |            |
|                                                               | logdetail               | none high medium low trace                                        | none       |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/<br/>admingroups/<i>n</i></b> | name                    | <文字列>                                                             | (なし)       |

ここでは、*n* は 1-5 を示します

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

| 有効なターゲット                                                                                          | プロパティ         | 値                                              | デフォルト |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|------------------------------------------------|-------|
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ opergroups/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します            | name          | <文字列>                                          | (なし)  |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ userdomains/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します           | domain        | <文字列>                                          | (なし)  |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ customgroups/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します          | name          | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                                   | roles         | a u c r o s  administrator operator            | o     |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します      | address       | <IP アドレス> または <DNS 名>                          | (なし)  |
|                                                                                                   | port          | <整数>                                           | 0     |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/<i>n</i>/cert</b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します | certstatus    | <文字列>                                          | 証明書なし |
|                                                                                                   | clear_action  | true                                           | (なし)  |
|                                                                                                   | issuer        | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                                   | load_uri      | <URI><br>ここでは、URI は tftp、ftp、または scp を使って指定します | (なし)  |
|                                                                                                   | serial_number | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                                   | subject       | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                                   | valid_from    | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                                   | valid_until   | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                                   | version       | <文字列>                                          | (なし)  |



表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

| 有効なターゲット                                      | プロパティ         | 値                                                  | デフォルト    |
|-----------------------------------------------|---------------|----------------------------------------------------|----------|
| <b>/SP/clients/<br/>activedirectory/cert/</b> | certstatus    | <文字列>                                              | 証明書なし    |
|                                               | clear_action  | true                                               | (なし)     |
|                                               | issuer        | <文字列>                                              | (なし)     |
|                                               | load_uri      | <URI><br><br>ここでは、URI は tftp、ftp、または scp を使って指定します | (なし)     |
|                                               | serial_number | <文字列>                                              | (なし)     |
|                                               | subject       | <文字列>                                              | (なし)     |
|                                               | valid_from    | <文字列>                                              | (なし)     |
|                                               | valid_until   | <文字列>                                              | (なし)     |
|                                               | version       | <文字列>                                              | (なし)     |
|                                               | service       | <ドメイン>                                             | (なし)     |
| ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します                    |               |                                                    |          |
| <b>/SP/clients/dns</b>                        | auto_dns      | enabled disabled                                   | disabled |
|                                               | nameserver    | <文字列>                                              | (なし)     |
|                                               | retries       | <整数><br><br>ここでは、整数は 0-4 を示します                     | (なし)     |
|                                               | searchpath    | <文字列>                                              | (なし)     |
|                                               | timeout       | <秒><br><br>ここでは、秒は 0-10 を示します                      | (なし)     |
|                                               |               |                                                    |          |
| <b>/SP/clients/ldap</b>                       | binddn        | <ユーザー名>                                            | (なし)     |
|                                               | bindpw        | <パスワード>                                            | (なし)     |
|                                               | defaultrole   | administrator operator  a u c r o s o              |          |
|                                               | address       | <IP アドレス>                                          | (なし)     |
|                                               | port          | <整数>                                               | 389      |
|                                               | searchbase    | <文字列>                                              | (なし)     |
|                                               | state         | enable disabled                                    | disabled |

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

| 有効なターゲット                                                                                | プロパティ          | 値                                                                            | デフォルト    |
|-----------------------------------------------------------------------------------------|----------------|------------------------------------------------------------------------------|----------|
| <b>/SP/clients/ldapssl</b>                                                              | state          | enabled disabled                                                             | disabled |
|                                                                                         | defaultrole    | administrator operator  a u c r o s (なし)                                     |          |
|                                                                                         | address        | <IP アドレス> または <DNS 名>                                                        | (なし)     |
|                                                                                         | port           | <ポート><br><br>ここでは、ポートは LDAP/SSL<br>サーバーの TCP ポートで、0 - 65535<br>の整数で指定します     | 0        |
|                                                                                         | strictcertmode | enabled disabled                                                             | disabled |
|                                                                                         | timeout        | <秒><br><br>ここでは、秒は 0 - 20 を示します                                              | 4        |
|                                                                                         | logdetail      | none high medium low trace                                                   | none     |
| <b>/SP/clients/ldapssl/<br/>optionalUserMapping</b>                                     | state          | enabled disabled                                                             | disabled |
| <b>/SP/clients/ ldapssl/<br/>admingroups/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します     | name           | <文字列>                                                                        | (なし)     |
| <b>/SP/clients/ ldapssl/<br/>opergroups/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します      | name           | <文字列>                                                                        | (なし)     |
| <b>/SP/clients/ ldapssl/<br/>userdomains/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します     | domain         | <ユーザー名>                                                                      | (なし)     |
| <b>/SP/clients/ldapssl/<br/>customgroups/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します     | name           | <文字列>                                                                        | (なし)     |
|                                                                                         | roles          | administrator operator  a u c r o s                                          | (なし)     |
| <b>/SP/clients/ldapssl/<br/>alternateservers/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します | address        | <IP アドレス> または <DNS 名>                                                        | (なし)     |
|                                                                                         | port           | <ポート><br><br>ここでは、 <i>port</i> は代替サーバー構成<br>TCP ポートで、0 - 65535 の整数で指定<br>します | 0        |

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

| 有効なターゲット                                                                               | プロパティ         | 値                                              | デフォルト |
|----------------------------------------------------------------------------------------|---------------|------------------------------------------------|-------|
| /SP/clients/ldapssl/<br>alternateservers/ <i>n</i> /cert<br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します | certstatus    | <文字列>                                          | 証明書なし |
|                                                                                        | clear_action  | true                                           | (なし)  |
|                                                                                        | issuer        | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | load_uri      | <URI><br>ここでは、URI は tftp、ftp、または scp を使って指定します | (なし)  |
|                                                                                        | serial_number | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | subject       | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | valid_from    | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | valid_until   | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | version       | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        |               |                                                |       |
| /SP/clients/ldapssl/cert                                                               | certstatus    | <文字列>                                          | 証明書なし |
|                                                                                        | clear_action  | true                                           | (なし)  |
|                                                                                        | issuer        | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | load_uri      | <URI><br>ここでは、URI は tftp、ftp、または scp を使って指定します | (なし)  |
|                                                                                        | serial_number | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | subject       | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | valid_from    | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | valid_until   | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        | version       | <文字列>                                          | (なし)  |
|                                                                                        |               |                                                |       |
| /SP/clients/ntp/server/ [1 2]                                                          | address       | <IP アドレス>                                      | (なし)  |

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

| 有効なターゲット                | プロパティ          | 値                                                                                 | デフォルト    |
|-------------------------|----------------|-----------------------------------------------------------------------------------|----------|
| /SP/clients/radius      | defaultrole    | administrator operator <br>a u c r o s none                                       | operator |
|                         | address        | <IP アドレス> または <ホスト名>                                                              | (なし)     |
|                         | port           | <ポート><br><br>ここでは、 <i>port</i> は RADIUS<br>サーバーポートを示します                           | 1812     |
|                         | secret         | <共有シークレット>                                                                        | (なし)     |
|                         | state          | enable disabled                                                                   | disabled |
|                         |                |                                                                                   |          |
| /SP/clients/smtp        | address        | <IP アドレス> または <ホスト名>                                                              | (なし)     |
|                         | port           | <ポート><br><br>ここでは、ポートは SMTP<br>サーバーポートを示します                                       | 25       |
|                         | state          | enabled disabled                                                                  | enabled  |
| /SP/clients/syslog[1 2] | address        | <IP アドレス> または <ホスト名>                                                              | (なし)     |
| /SP/config              | dump_uri       | <URI><br><br>ここでは、 <i>URI</i> には<br>tftp、ftp、sftp、scp、http、または<br>https を使って指定します | (なし)     |
|                         | load_uri       | <URI><br><br>ここでは、 <i>URI</i> には<br>tftp、ftp、sftp、scp、http、または<br>https を使って指定します | (なし)     |
|                         | passphrase     | <パスフレーズ>                                                                          | (なし)     |
|                         |                |                                                                                   |          |
| /SP/diag/snapshot       | dataset        | normal normal-logonly fruid<br> fruid-logonly full  full-logonly                  | normal   |
|                         | dump_uri       | <URI><br><br>ここでは、 <i>URI</i> は ftp または sftp を<br>使って指定します                        | (なし)     |
|                         | encrypt_output | true false                                                                        | false    |

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティ、および値 (続き)

| 有効なターゲット                      | プロパティ                    | 値                                                       | デフォルト         |
|-------------------------------|--------------------------|---------------------------------------------------------|---------------|
| <b>/SP/network</b>            | commitpending            | true                                                    | (なし)          |
|                               | pendingipaddress         | <IP アドレス>                                               | (なし)          |
|                               | pendingdiscovery         | dhcp static                                             | dhcp          |
|                               | pendingipgateway         | <IP アドレス>                                               | (なし)          |
|                               | pendingipnetmask         | <IP アドレス>                                               | 255.255.255.0 |
|                               | state                    | enabled disabled                                        | enabled       |
| <b>/SP/network/ipv6</b>       | state                    | enabled disabled                                        | enabled       |
|                               | autoconfig               | stateless dhcpv6_stateless <br>dhcpv6_stateful disabled | stateless     |
|                               | pending_static_ipaddress | <IPv6 アドレス>                                             | (なし)          |
|                               | commitpending            | true                                                    | (なし)          |
| <b>/SP/network/test</b>       | ping                     | <IPv4 アドレス>                                             | (なし)          |
|                               | ping6                    | <IPv6 アドレス>                                             | (なし)          |
| <b>/SP/preferences/banner</b> | connect_message          | <文字列>                                                   | (なし)          |
|                               | login_message            | <文字列>                                                   | (なし)          |
|                               | login_message_acceptance | enabled disabled                                        | disabled      |
| <b>/SP/serial/external</b>    | commitpending            | true                                                    | (なし)          |
|                               | flowcontrol              | software hardware none                                  | none          |
|                               | pendingspeed             | <リストの整数>                                                | 9600          |
|                               | speed                    | <リストの整数>                                                | 9600          |
| <b>/SP/serial/host</b>        | commitpending            | true                                                    | (なし)          |
|                               | pendingspeed             | <リストの整数>                                                | 9600          |
|                               | speed                    | <リストの整数>                                                | 9600          |

表 22 set コマンドのターゲット、プロパティー、および値 (続き)

| 有効なターゲット | プロパティー                  | 値                | デフォルト |
|----------|-------------------------|------------------|-------|
| /SP/     | check_physical_presence | true false       | (なし)  |
|          | hostname                | <文字列>            | (なし)  |
|          | reset_to_defaults       | all factory none | (なし)  |
|          | system_contact          | <文字列>            | (なし)  |
|          | system_description      | <文字列>            | (なし)  |
|          | system_identifier       | <文字列>            | (なし)  |
|          | system_location         | <文字列>            | (なし)  |

例

```
-> set /SP/users/susan role=administrator

-> set /SP/clients/ldap state=enabled binddn=proxyuser bindpw=ez24get
```

show コマンド

show コマンドを使用すると、ターゲットとプロパティーについての情報を表示できます。

-display オプションは、表示される情報の種類を決定します。-display targets を指定すると、現在のターゲットの下にあるネームスペースのすべてのターゲットが表示されます。-display プロパティーを指定すると、ターゲットのすべてのプロパティー名と値が表示されます。このオプションでは、特定のプロパティー名を指定することができ、これらの値のみ表示されます。-display all を指定すると、現在のターゲットの下にあるネームスペースのすべてのターゲットと、指定したターゲットのプロパティーが表示されます。-display オプションを指定しない場合、show コマンドは、-display all が指定されたものとして動作します。

-level オプションは、show コマンドの深さを制御し、-display オプションのすべてのモードに適用されます。-level 1 を指定すると、オブジェクトが存在するネームスペースのレベルが表示されます。1 より大きい値の場合、ネームスペースの現在のターゲットレベルおよび<指定した値>のレベルより下にあるレベルの情報を返します。-level all 引数を指定すると、ネームスペースの現在のレベルとそれより下のレベルの情報すべてが表示されます。

-o|output オプションは、コマンド出力の内容と形式を指定します。Oracle ILOM では、表形式でターゲットおよびプロパティーを表示する -o table のみをサポートしています。

エイリアスの show components は、次の CLI コマンドのショートカットです。

```
-> show -o table -level all /SYS component state
```

show components エイリアスでも、このコマンドと同じ出力が生成されます。したがって、このエイリアスを使用して、ターゲットごとに1つのプロパティーに限定して表出力を行うことができます。

構文

```
show [options] [-display targets|properties|all] [-level value|all] target [propertyname]
```

オプション

```
[-d|-display] [-l|level] [-o|output]
```

ターゲットとプロパティー

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティー

| 有効なターゲット  | プロパティー                |
|-----------|-----------------------|
| /HOST/tpm | activate              |
|           | enable                |
|           | forceclear            |
| /SYS      | type                  |
|           | ipmi_name             |
|           | product_name          |
|           | product_part_number   |
|           | product_serial_number |
|           | product_manufacturer  |
|           | fault_state           |
|           | clear_fault_action    |
|           | power_state           |

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                                | プロパティ                |
|-----------------------------------------|----------------------|
| <b>/SYS/DBP/HDD<i>n</i></b>             | type                 |
| ここでは、 <i>n</i> は有効な HDD スロットです          | ipmi_name            |
|                                         | fru_name             |
|                                         | fru_manufacturer     |
|                                         | fru_version          |
|                                         | fru_serial_number    |
|                                         | controller_id        |
|                                         | disk_id              |
|                                         | capacity             |
|                                         | device_name          |
|                                         | disk_type            |
|                                         | wwn                  |
|                                         | raid_status          |
|                                         | raid_ids             |
| <b>/STORAGE/raid/controller@od:00.0</b> | fru_manufacturer     |
| ここでは、00.0 はコントローラの ID です                | fru_model            |
|                                         | pci_vendor_id        |
|                                         | pci_device_id        |
|                                         | pci_subvendor_id     |
|                                         | pci_subdevice_id     |
|                                         | raid_levels          |
|                                         | max_disks            |
|                                         | max_raids            |
|                                         | max_hot_spare        |
|                                         | max_global_hot_spare |
|                                         | min_stripe_size      |
|                                         | max_stripe_size      |



表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                                                              | プロパティ                   |
|-----------------------------------------------------------------------|-------------------------|
| <b>/STORAGE/raid/controller@od:00.0/ raid_id0</b>                     | level                   |
| ここでは、00.0 はコントローラの ID、raid_id0 はターゲット RAID ディスクです                     | status                  |
|                                                                       | disk_capacity           |
|                                                                       | device_name             |
|                                                                       | mounted                 |
| <b>/STORAGE/raid/controller@od:00.0/<br/>raid_id0/disk_id0</b>        | fru_manufacturer        |
| ここでは、00.0 はコントローラの ID、raid_id0 はターゲット RAID ディスク、disk_id0 はターゲットディスクです | fru_serial_number       |
|                                                                       | fru_version             |
|                                                                       | status                  |
|                                                                       | capacity                |
|                                                                       | device_name             |
|                                                                       | disk_type               |
|                                                                       | wwn                     |
|                                                                       | raid_ids                |
|                                                                       | system_drive_slot       |
|                                                                       | check_physical_presence |
| <b>/SP</b>                                                            | customer_fru_data       |
|                                                                       | hostname                |
|                                                                       | reset_to_defaults       |
|                                                                       | system_contact          |
|                                                                       | system_description      |
|                                                                       | system_identifier       |
|                                                                       | system_location         |

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                                                                                     | プロパティ                                                                                                                                                         |
|----------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>/SP/alertmgmt/rules/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-15 を示します                           | community username<br><br>destination<br><br>destination_port<br><br>event_class_filter<br><br>event_type_filter<br><br>level<br><br>snmp_version<br><br>type |
| <b>/SP/cli</b>                                                                               | timeout                                                                                                                                                       |
| <b>/SP/clients/ activedirectory</b>                                                          | state<br><br>defaultrole<br><br>address<br><br>logdetail<br><br>port<br><br>strictcertmode<br><br>timeout                                                     |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ admingroups/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します      | name                                                                                                                                                          |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ alternateservers/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します | address<br><br><br><br>port                                                                                                                                   |

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                                                                                              | プロパティ                                                                                                                |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>/SP/clients/ activedirectory/<br/>alternateservers/<i>n</i>/cert</b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します | clear_action<br>certstatus<br>issuer<br>load_uri<br>serial_number<br>subject<br>valid_from<br>valid_until<br>version |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/cert</b>                                                              | certstatus<br>clear_action<br>issuer<br>load_uri<br>serial_number<br>subject<br>valid_from<br>valid_until<br>version |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ customgroups/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します              | name<br><br>roles                                                                                                    |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ opergroups/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します                | name                                                                                                                 |
| <b>/SP/clients/ activedirectory/ userdomains/<i>n</i></b><br>ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します               | domain                                                                                                               |
| <b>/SP/clients/dns</b>                                                                                | auto_dns<br>nameserver<br>searchpath                                                                                 |

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                                               | プロパティ          |
|--------------------------------------------------------|----------------|
| <b>/SP/clients/ldap</b>                                | binddn         |
|                                                        | bindpw         |
|                                                        | defaultrole    |
|                                                        | address        |
|                                                        | port           |
|                                                        | searchbase     |
| <b>/SP/clients/ldapssl</b>                             | state          |
|                                                        | defaultrole    |
|                                                        | address        |
|                                                        | logdetail      |
|                                                        | port           |
|                                                        | state          |
| <b>/SP/clients/ldapssl/ optionalUserMapping</b>        | strictcertmode |
|                                                        | timeout        |
|                                                        | state          |
| <b>/SP/clients/ ldapssl/ admingroups/<i>n</i></b>      | name           |
| ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します                             |                |
| <b>/SP/clients/ ldapssl/ alternateservers/<i>n</i></b> | address        |
|                                                        | port           |
| ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します                             |                |

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                                                    | プロパティ         |
|-------------------------------------------------------------|---------------|
| <b>/SP/clients/ ldapssl/ alternateservers/<i>n</i>/cert</b> | certstatus    |
| ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します                                  | clear_action  |
|                                                             | issuer        |
|                                                             | load_uri      |
|                                                             | serial_number |
|                                                             | subject       |
|                                                             | valid_from    |
|                                                             | valid_until   |
|                                                             | version       |
| <b>/SP/clients/ldapssl/cert</b>                             | certstatus    |
|                                                             | clear_action  |
|                                                             | issuer        |
|                                                             | load_uri      |
|                                                             | serial_number |
|                                                             | subject       |
|                                                             | valid_from    |
|                                                             | valid_until   |
|                                                             | version       |
| <b>/SP/clients/ ldapssl/ customgroups/<i>n</i></b>          | name          |
| ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します                                  |               |
|                                                             | roles         |
| <b>/SP/clients/ ldapssl/ opergroups/<i>n</i></b>            | name          |
| ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します                                  |               |
| <b>/SP/clients/ ldapssl/ userdomains/<i>n</i></b>           | domain        |
| ここでは、 <i>n</i> は 1-5 を示します                                  |               |
| <b>/SP/clients/ntp/server/[1 2]</b>                         | address       |

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                  | プロパティ        |
|---------------------------|--------------|
| <b>/SP/clients/radius</b> | address      |
|                           | port         |
|                           | secret       |
|                           | state        |
| <b>/SP/clients/smtp</b>   | port         |
|                           | state        |
| <b>/SP/clock</b>          | datetime     |
|                           | usentpserver |
|                           | uptime       |
|                           | timezone     |
| <b>/SP/config</b>         | dump_uri     |
|                           | load_uri     |
|                           | passphrase   |
| <b>/SP/console</b>        | line_count   |
|                           | logging      |
|                           | pause_count  |
|                           | start_from   |
| <b>/SP/diag/snapshot</b>  | dataset      |
|                           | dump_uri     |
|                           | result       |
| <b>/SP/firmware</b>       | load_uri     |
| <b>/SP/logs/event</b>     | clear        |

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                      | プロパティ                    |
|-------------------------------|--------------------------|
| <b>/SP/network</b>            | commitpending            |
|                               | dhcp_server_ip           |
|                               | ipaddress                |
|                               | ipdiscovery              |
|                               | ipgateway                |
|                               | ipnetmask                |
|                               | macaddress               |
|                               | pendingipaddress         |
|                               | pendingdiscovery         |
|                               | pendingipgateway         |
|                               | pendingipnetmask         |
|                               | state                    |
|                               | state                    |
| <b>/SP/network/ipv6</b>       | autoconfig               |
|                               | dhcpv6_server_duid       |
|                               | link_local_ipaddress     |
|                               | static_ipaddress         |
|                               | ipgateway                |
|                               | pending_static_ipaddress |
|                               | dynamic_ipaddress_1      |
| <b>/SP/network/test</b>       | ping                     |
|                               | ping6                    |
| <b>/SP/powermgmt</b>          | actual_power             |
|                               | permitted_power          |
|                               | available_power          |
| <b>/SP/preferences/banner</b> | connect_message          |
|                               | login_message            |
|                               | login_message_acceptance |

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                                   | プロパティ         |
|--------------------------------------------|---------------|
| <b>/SP/serial/external</b>                 | flowcontrol   |
|                                            | speed         |
| <b>/SP/serial/host</b>                     | commitpending |
|                                            | pendingspeed  |
|                                            | speed         |
| <b>/SP/services/http</b>                   | port          |
|                                            | securedirect  |
|                                            | servicestate  |
| <b>/SP/services/https</b>                  | port          |
|                                            | servicestate  |
| <b>/SP/services/https/ssl</b>              | cert_status   |
| <b>/SP/services/https/ssl/default_cert</b> | issuer        |
|                                            | subject       |
|                                            | valid_from    |
|                                            | valid_until   |
| <b>/SP/services/https/ssl/custom_cert</b>  | clear_action  |
|                                            | issuer        |
|                                            | load_uri      |
|                                            | subject       |
|                                            | valid_from    |
|                                            | valid_until   |
| <b>/SP/services/https/ssl/custom_key</b>   | key_present   |
|                                            | load_uri      |
|                                            | clear_action  |
| <b>/SP/services/ipmi</b>                   | servicestate  |
| <b>/SP/services/kvms</b>                   | mousemode     |
|                                            | servicestate  |



表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                                     | プロパティ                                                       |
|----------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
| <b>/SP/services/servicetag</b>               | passphrase<br>servicetag_urn<br>state                       |
| <b>/SP/services/snmp</b>                     | engineid<br>port<br>sets<br>v1<br>v2c<br>v3<br>servicestate |
| <b>/SP/services/snmp/communities/private</b> | permissions                                                 |
| <b>/SP/services/snmp/communities/public</b>  | permissions                                                 |
| <b>/SP/services/snmp/users/username</b>      | password<br>role                                            |
| <b>/SP/services/ssh</b>                      | state                                                       |
| <b>/SP/services/ssh/keys/dsa</b>             | fingerprint<br>length<br>privatekey<br>publickey            |
| <b>/SP/services/ssh/keys/rsa</b>             | fingerprint<br>length<br>privatekey<br>publickey            |
| <b>/SP/services/sso</b>                      | state                                                       |
| <b>/SP/sessions/sessionid</b>                | username<br>starttime<br>type<br>mode                       |

表 23 show コマンドのターゲットおよびプロパティ (続き)

| 有効なターゲット                             | プロパティ                       |
|--------------------------------------|-----------------------------|
| <b>/SP/users/username</b>            | role                        |
|                                      | password                    |
| <b>/SP/users/username/ssh/keys/1</b> | fingerprint                 |
|                                      | algorithm                   |
|                                      | load_uri                    |
|                                      | clear_action                |
|                                      | embedded_comment            |
| <b>/SP/users/username/service</b>    | bit_length                  |
|                                      | service_password            |
|                                      | service_password_expires    |
| <b>/SP/users/username/escalation</b> | escalation_password         |
|                                      | escalation_password_expires |

例

```
-> show /SP/users/user1
-> show /SP/clients -level2
-> show components
```

start コマンド

start コマンドを使用すると、ターゲットの電源を入れるか、ホストコンソールとの接続を開始できます。-script オプションを使用すると、yes または no を確認するプロンプトの表示が省略され、yes が指定されたものとしてコマンドが動作します。

構文

```
start [options] target
```

オプション

```
[-h|help] [-script]
```

## ターゲット

表 24 start コマンドのターゲット

| 有効なターゲット                   | 説明                              |
|----------------------------|---------------------------------|
| <b>/SYS</b> または <b>/CH</b> | システムまたはシャーシを起動 (電源を投入) します。     |
| <b>/SP/console</b>         | コンソールストリームヘインタラクティブセッションを開始します。 |

## 例

```
-> start /SP/console
```

```
-> start /SYS
```

# stop コマンド

stop コマンドを使用すると、ターゲットを停止するか、またはホストコンソールと別のユーザーの接続を終了できます。stop コマンドを確認するプロンプトが表示されます。-script オプションを使用することで、このプロンプトの表示を省略できます。-f|force オプションは、アクションをただちに実行するように指定します。

## 構文

```
stop [options] [-script] target
```

## オプション

```
[-f|force] [-h|help]
```

## ターゲット

表 25 stop コマンドのターゲット

| 有効なターゲット                   | 説明                                                                                    |
|----------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>/SYS</b> または <b>/CH</b> | 正常な停止を実行し、指定したシステムまたはシャーシの電源を切ります。-f -force オプションを使用すると、正常な停止をスキップして、ただちに電源を強制的に切ります。 |
| <b>/SP/console</b>         | ホストコンソールとほかのユーザーの接続を終了します。                                                            |

例

```
-> stop /SP/console
```

```
-> stop -force /SYS
```

## version コマンド

version コマンドを使用すると、Oracle ILOM のバージョン情報を表示できます。

構文

**version**

オプション

**[-h|help]**

例

```
-> version
version SP firmware version: 3.0.0
SP firmware build number: 4415
SP firmware date: Mon Mar 28 10:39:46 EST 2008
SP filesystem version: 0.1.9
```

# IPv4 または IPv6 の Oracle ILOM 接続に関する問題の診断

このセクションでは、IPv6 を使用して Oracle ILOM にアクセスするときの一般的な問題の解決策について説明します。

詳細については、次を参照してください。

- [213 ページの「Oracle ILOM の接続に関する問題の診断」](#)

## Oracle ILOM の接続に関する問題の診断

IPv6 の使用時に Oracle ILOM への接続に関する問題が発生する場合は、次の表で示す情報を使用すると、IPv6 を使用して Oracle ILOM にアクセスする際によく発生する問題の解決に役立ちます。

表 26 IP 接続の一般的な問題と推奨される解決策

| IPv6 接続の一般的な問題                                   | 推奨される解決策                                                                                                               |
|--------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| IPv6 アドレスを使用して Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスできない。 | URL 内の IPv6 アドレスが角括弧で囲まれていることを確認します。例:<br><code>https://[fe80::221:28ff:fe77:1402]</code>                              |
| IPv6 アドレスを使用してファイルをダウンロードできない。                   | URL 内の IPv6 アドレスが角括弧で囲まれていることを確認します。例:<br><code>load -source tftp://[fec0:a:8:b7:214:rfff:fe01:851d]desktop.pkg</code> |

表 26 IP 接続の一般的な問題と推奨される解決策 (続き)

| IPv6 接続の一般的な問題                                              | 推奨される解決策                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ネットワーククライアントから IPv6 を使用して Oracle ILOM にアクセスできない。            | <p>分割サブネットの場合は、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ Oracle ILOM のアドレスがリンクローカルアドレスかどうかだけでなく、動的か静的かを確認します。</li><li>■ ネットワーククライアントに構成されているアドレスがリンクローカルアドレスかどうかだけでなく、IPv6 アドレスかどうかを確認します。</li></ul> <p>同一サブネットまたは分割サブネットの場合は、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または Oracle ILOM CLI の /SP/network/ipv6 のターゲットで、IPv6 State の設定が有効になっていることを確認します。</li><li>■ 制限付きシェルで ping6 を実行します。</li><li>■ 制限付きシェルで traceroute を実行します。</li></ul> |
| IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境内でクライアントから Oracle ILOM にアクセスできない。 | <p>次の設定が有効になっていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ State – Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または CLI の /SP/network のターゲットで、State の設定を有効にできます。</li><li>■ IPv6 State – Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または /SP/network/ipv6 のターゲットで、IPv6 State の設定を有効にできます。</li></ul>                                                                                                                                                                                                   |
| ネットワーククライアントから IPv4 を使用して Oracle ILOM にアクセスできない。            | <p>Oracle ILOM Web インタフェースの「Network Settings」ページ、または Oracle ILOM CLI の /SP/network ターゲットで、State の設定が有効になっていることを確認します。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |

# ローカル相互接続インタフェースのホスト OS 手動構成ガイドライン

---

次のトピックでは、ローカル相互接続インタフェース上のホスト OS 接続ポイントに対して、ルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスを手動で構成する場合のガイドラインを提供します。

- [215 ページの「ホスト OS での内部 USB Ethernet デバイスの構成」](#)

## ホスト OS での内部 USB Ethernet デバイスの構成

ローカル相互接続インタフェース上の Oracle ILOM SP 接続ポイントのルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスを手動で構成する場合、ローカル相互接続インタフェース上のホスト OS 接続ポイントのルーティングの宛先とならない IPv4 アドレスも手動で構成する必要があります。次の表では、オペレーティングシステムごとに、ホスト OS 接続ポイントのルーティングの宛先とならない静的 IPv4 アドレスを構成する場合の一般的なガイドラインについて説明します。ホストオペレーティングシステムで IP アドレスを構成する方法の詳細については、ベンダーのオペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

---

注 - Oracle ILOM には、ホストオペレーティングシステムへの USB Ethernet インタフェースとしてサーバーにインストールされた内部 USB Ethernet デバイスが表示されます。

---

表 27 ホスト OS で内部 USB Ethernet デバイスを構成するための一般的なガイドライン

| オペレーティングシステム        | 一般的なガイドライン                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|---------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Windows Server 2008 | <p>Windows で内部 USB Ethernet デバイスが検出されると、ほとんどの場合、そのデバイスのデバイスドライバを指定するためのプロンプトが表示されます。実際にはドライバは不要なため、.inf ファイルを指定することで、内部 USB Ethernet デバイスの通信スタックの要件を満たす必要があります。.inf ファイルは、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 のソフトウェアディストリビューションから入手できます。この Management Pack ソフトウェアを Oracle のソフトウェア製品ダウンロードページ (<a href="http://www.oracle.com">www.oracle.com</a>) からダウンロードし、.inf ファイルを抽出できます。.inf ファイルを Management Pack ソフトウェアから抽出する方法の詳細については、『Oracle Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。</p> <p>Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 のソフトウェアディストリビューションから .inf ファイルを適用すると、「コントロールパネル」(「スタート」-&gt;「コントロールパネル」)にある Microsoft Windows のネットワーク構成オプションを使用することにより、ホスト OS 接続ポイントの静的 IP アドレスをローカル相互接続インタフェースで構成できるようになります。</p> <p>Windows 2008 で IPv4 アドレスを構成する方法の詳細については、Microsoft Windows オペレーティングシステムのドキュメントまたは Microsoft TechNet サイト (<a href="http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754203%28WS.10%29.aspx">http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754203%28WS.10%29.aspx</a>) を参照してください。</p> |
| Linux               | <p>Oracle Sun プラットフォームサーバーでサポートされているほとんどの Linux オペレーティングシステムのインストールには、内蔵 Ethernet デバイスのデバイスドライバのインストールが含まれます。</p> <p>通常、内部 USB Ethernet デバイスは、Linux オペレーティングシステムによって自動的に検出されます。内部 Ethernet デバイスは、通常 <code>usb0</code> と表示されます。ただし、内部 Ethernet デバイスの名前は、Linux オペレーティングシステムのディストリビューションに応じて異なる場合があります。</p> <p>次の手順で、<code>usb0</code> (通常、サーバーで検出された内部 USB Ethernet デバイス) に対応する静的 IP アドレスを構成する方法について説明します。</p> <pre>\&gt;lsusb usb0 \&gt; ifconfig usb0 169.254.182.77 \&gt; ifconfig usb0 netmask 255.255.255.0 \&gt; ifconfig usb0 broadcast 169.254.182.255 \&gt; ifconfig usb0 \&gt; ip addr show usb0</pre> <p>注-一般的な <code>ifconfig</code> の手順を実行する代わりに、インタフェースの構成をスクリプト処理することもできます。ただし、厳密には、Linux ディストリビューション間でネットワークスクリプトは異なります。通常、Linux の動作バージョンには、ネットワークスクリプトをモデル化するための例が含まれています。</p> <p>Linux オペレーティングシステムを使用してデバイスの IP アドレスを構成する方法の詳細については、Linux オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。</p>                                                                                                           |



表 27 ホスト OS で内部 USB Ethernet デバイスを構成するための一般的なガイドライン (続き)

| オペレーティングシステム   | 一般的なガイドライン                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Oracle Solaris | <p>Oracle Sun プラットフォームサーバー上のほとんどの Oracle Solaris オペレーティングシステムには、内部 USB Ethernet デバイス用のデバイスドライバが搭載されています。このドライバがサポートされていなかった場合、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアからこのドライバを抽出できます。Ethernet インタフェース用の Solaris 固有の OS ドライバを抽出する方法については、『Oracle Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。</p> <p>通常、内部 USB Ethernet デバイスは、Solaris オペレーティングシステムによって自動的に検出されます。内部 Ethernet デバイスは、通常 <code>usbem0</code> と表示されます。ただし、内部 Ethernet デバイスの名前は、Oracle Solaris オペレーティングシステムのディストリビューションに応じて異なる場合があります。</p> <p>Oracle Solaris オペレーティングシステムによってローカル USB Ethernet デバイスが認識されたあと、USB Ethernet デバイスの IP インタフェースを構成する必要があります。</p> <p>次の手順で、<code>usbem0</code> (通常、サーバーで検出された内部 USB Ethernet デバイス) に対応する静的 IP アドレスを構成する方法について説明します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ IP インタフェースを <code>plumb</code> または <code>unplumb</code> するには、次のコマンドを入力します。<pre>ifconfig usbem0 plumb ifconfig usbem0 unplumb</pre></li><li>■ アドレス情報を設定するには、次のコマンドを入力します。<pre>ifconfig usbem0 netmask 255.255.255.0 broadcast 169.254.182.255 169.254.182.77</pre></li><li>■ インタフェースを設定するには、次のように入力します。<pre>ifconfig usbem0 up</pre></li><li>■ インタフェースを停止するには、次のように入力します。<pre>ifconfig usbem0 down</pre></li><li>■ アクティブなインタフェースを表示するには、次のように入力します。<pre>ifconfig -a</pre></li><li>■ 接続をテストするには、Oracle Solaris ホストまたは SP 内部 USB Ethernet デバイスに対して <code>ping</code> を実行します。<pre>ping &lt;Solaris ホストの IPv4 アドレス&gt; ping &lt;SP-Ethernet USB の IPv4 アドレス&gt;</pre></li></ul> <p>注—一般的な <code>ifconfig</code> の手順を実行する代わりに、インタフェースの構成をスクリプト処理することもできます。ただし、厳密には、Oracle Solaris ディストリビューション間でネットワークスクリプトが異なる場合があります。通常、動作バージョンに、ネットワークスクリプトをモデル化するための例が含まれています。</p> <p>Oracle Solaris オペレーティングシステムを使用してデバイスの静的 IP アドレスを構成する方法の詳細は、Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。</p> |

---

注 - 内部 USB Ethernet デバイスのドライバがオペレーティングシステムのインストールに含まれていなかった場合、Oracle Hardware Management Pack 2.1.0 以降のソフトウェアから Ethernet デバイス用のデバイスドライバを入手できます。このファイルを Management Pack から抽出する方法については、『Oracle Hardware Management Pack ユーザーズガイド』を参照してください。

---

# 索引

---

## A

### Active Directory

- certstatus, 77–78
- strictcertmode, 77
- 証明書の削除, 78–79
- 設定の表示と構成, 79–86
- トラブルシューティング, 86–87

### Admin (a) の役割, 71

## C

### CLI コマンド

- アラートルール, 129
- 組み合わせて実行, 19–20
- 個別に実行, 19
- リファレンス, 181–212

### CLI コマンド構文, 19

- cd コマンド, 181
- create コマンド, 182
- delete コマンド, 183
- dump コマンド, 184
- exit コマンド, 184
- help コマンド, 185
- load コマンド, 186
- reset コマンド, 187
- set コマンド, 187
- show コマンド, 198
- start コマンド, 210
- stop コマンド, 211
- version コマンド, 212

### CLI コマンドの種類

- SNMP コマンド, 23
- アラート管理コマンド, 22
- 一般的なコマンド, 20
- クロック設定コマンド, 22
- システム管理アクセスコマンド, 22
- ネットワークとシリアルポートのコマンド, 21
- ホストシステムのコマンド, 23
- ユーザーコマンド, 21

### CLI ターゲットの種類

- /CH, 15
- /CMM, 15
- /HOST, 15
- /SP, 15
- /SYS, 15

### Console (c) の役割, 71

## D

### Distributed Management Task Force コマンド行プロトコル (DMTF CLP), 12

### DMTF コマンド行プロトコルコマンド, 16

### Domain Name Service (DNS), ロケータサービス, 84

### DSA 鍵, 表示, 58

## H

### HTTP or HTTPS settings, targets, properties, and values for, 54

### HTTP または HTTPS の設定, 有効化, 53–55

**I**

## ILOM 2.x

- 2.x スクリプトの更新, 24

- ILOM 3.0 と比較したプロパティ, 24

## IP アドレスの割り当て

- CLI を使用した編集, 42

- リモート syslog 受信側, 115

**L**

## LDAP/SSL, 89

- certstatus, 90–91

- strictcertmode, 89–90

- 証明書の削除, 91

- 設定の表示と構成, 92–96

- トラブルシューティング, 96–97

## LDAP サーバー, 構成, 87–88

## Lightweight Directory Access Protocol (LDAP), 87

- 概要, 87–88

- 構成, 88–89

**R**

## RADIUS

- 構成, 98

- 構成の必要条件, 98

## Read Only (o) の役割, 71

## Reset and Host Control (r) の役割, 71

## RSA 鍵, 表示, 58

**S**

## Secure Shell (SSH)

- 新しい鍵の生成, 59

- 現在の鍵の表示, 57–58

- 設定, 56

- 有効化または無効化, 56–57

- リモート接続の確立, 56

## Serverices (s) の役割, 71

## SMTP クライアント, 構成, 132

## SNMP トラップアラート, 126

- SPARC サーバー, TPM と LDom の状態の管理, 173–179

## SSH 鍵, 74

- 削除, 75–76

- 追加, 74–75

## ssh コマンド (Solaris), SP への接続, 56

## SSH 接続, 56

- CLI を使用した鍵暗号化, 57–58

- 新しい鍵, 59

- 有効化および無効化, 56–57

- リブート, 59

## Storage Redirection CLI

- 初期設定, 160

## strictcertmode, 77

**U**

## User Management (u) の役割, 71

**あ**

## アクセス権、ユーザー, 70

## アラート

- アラート管理用の CLI コマンド, 129

## 電子メール通知

- SMTP クライアントの構成, 132

- 電子メール通知の生成, 132–133

## アラートテスト, 生成, 128–129

## アラートルール

- CLI コマンド, 129

- 構成, 126–128

- 無効化, 128

**い**

## イベントログ

- 出力のフィルタ処理, 112

- 内容, 114

- 表示およびクリア, 113–114

## う

失ったパスワードの回復, 31-32

## く

クロック設定, 110-112

## こ

コマンド行インタフェース (CLI)

オプション, 17

概要, 12

コマンド構文, 18

コマンドの出力オプションのフィルタリング, 24

ターゲットツリー, 17, 18

コマンドのプロパティー

ILOM 2.x, 24

ILOM 3.0, 24

コマンド文字列, 20

コンポーネント

監視, 107-117, 119-123

管理, 101

サービスへの復帰, 103

取り外し, 102-103

有効化および無効化, 103-104

コンポーネント情報, 101-102

## さ

サーバーのある場所にいる, 証明, 32

## し

システムアラート

SMTP クライアントの構成, 132

管理用のコマンド, 129

構成, 126-128

構成の必要条件, 126

削除, 128

生成, 128-129

システムインジケータ

構成, 109-110

表示, 109

システムコンポーネント, 表示および管理, 101

消費電力

監視, 137

許容電力の監視, 141

個別の電源装置の監視, 139-140

システムの合計電力の監視, 138-139

実際の電力の監視, 139

使用可能電力の監視, 140-141

消費電力管理

電力の監視

show コマンド, 141

証明書の状態, 78

証明書の認証, 77

シリアルポート出力, ILOM CLI を使用した切り替え, 55

シリアルポート設定

pending および active プロパティー, 53

ターゲット、プロパティー、および値, 53

表示と構成, 52-53

シングルサインオン, 68

## せ

センサー, 測定値の表示, 108-109

センサー測定値, 108-109

## た

ターゲットツリー, 18

ターゲットの種類, 14

## つ

通信設定, 構成, 37-65

## て

デフォルトユーザーアカウント, パスワードの回復に使用, 31-32  
デュアルスタックネットワーク設定, 43  
電力ポリシー, 構成, 144-145

## と

ドメインネームサービス (DNS), ターゲット、プロパティ、および値, 52

## ね

ネットワーク設定, 38  
DNS, 51-52  
IP アドレスの編集, 41-43  
pending および active プロパティ, 39  
システム識別子, 50-51  
シリアルポート, 52-53  
ターゲット、プロパティ、および値, 40  
表示および構成, 40-41  
ホスト名, 50-51

## は

パスワード  
失ったパスワードの回復, 31-32  
変更, 69-70  
バックアップと復元、アクセス権 (auctro), 71

## ふ

プロパティ, ILOM 3.0 と ILOM 2.x の比較, 24

## や

役割、ユーザー, 70

## ゆ

ユーザーアカウント  
構成, 68  
個別のセッションの表示, 73-74  
個別のユーザーアカウントの表示, 72  
削除, 71-72  
追加, 69  
パスワード, 69-70  
役割, 70  
ユーザーセッションのリストの表示, 73

## り

リモート syslog 受信側, 115  
リモート電源制御, CLI コマンド, 164  
リモートホスト  
管理, 159-161  
電源状態の管理, 163-171

## ろ

ログアウト, 31  
ログイン  
初回, 30  
必要条件, 28